
蜜柑色の君

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜜柑色の君

【著者名】

N1162S

桜

【あらすじ】

初恋をしたことがない少女・ココロ。友達は皆恋をしていた。そんな「ココロに今までなんともおもつてなかつた男の子が急に気になり始める。何年も想い続ける一途な女の子の恋のお話。

o n e s i d e d l o v e - 1 中学生（前書き）

前から書きたかった蜜柑色の君！

ついに投稿です！

あらすじでは「ん？」と思つかもしませんが実際は「ゴチャヤゴチ
ヤ」です。
ではどうぞ！

one sided love -1 中学生

あなたは誰かを好きになつたことはありますか？

想いを伝える勇気はありますか？

きっとほとんどの人が無理だと思う。

けれど想いを伝えたならば、あなたにはそれだけの勇氣がある。
傷付くのを恐れない人はきっと強く、美しいんだよ。

私はあの人出会い、たくさん涙したし、たくさん笑了。
辛かつたし、切なかつた日々もあつたけど後悔はしません。
恋をする……それだけで人を信頼するという勇氣がいるんだから。

——初恋の相手があなたで良かつた…… —

「髪の毛よしー制服ぱつちりーうん、大丈夫かな

私は鏡で上半身を見て、目立つところがないかチェックする。
少し髪の毛がしつぽ頭になつたので手のひらで軽く頭を押さえ付

ける。

いや、押さえ付けるところより、おいているところの方がいいのか
もしれない。

これは私の癖だ。

「用意できた? お母さんはできたけど」

「うん、私もできた! 時間はまだ早いね」

私は時計をみてまだ時間があまつていた。 今日から新しい季節
……暖かい春の始まりだ。

「今日は中学校の入学式ね。 誰と同じクラスになるのかしらね。
ねぇ、□□口?」

私は……□□口と呼ばれて母親の方を見る。 私の名前は□□口
だけ少し変わった名前だと思つ。
理由は『他人の□□口が考えられるよつ』といつせられた。

「私は……誰となつてもいいよ。 なりたくない人もいるけどね」

母親はそう、とだけ言い、しばらく沈黙が続く。

「あ、こんな時間。 もう行かなくちゃ!」

私は時計を見てはつとする。
急いで靴をはき、通学カバンをもつ。

「お母さん、早く~」

「待つてーお母さん歳やから……」

はあ？ と少し呆れるけど突っ込んでいる暇はない。
でもこの母、いつも「私はまだ若い！」とか言つてるんだよ？それが歳？なんだこの母親！…と思つ。

私は待つてられなかつたので、ドアを開けて、廊下のよつな細長いところにエレベーターのボタンを押す。

私の住んでいるところはマンションでまあまあ綺麗だと思つ。階段もあればエレベーターもある。

母を待つている間とエレベーターがくるのを待つていた。

「ハ、ハハロは早いわね……若いつていいわね」

ぐるっと後ろを向いて母に一言だけ言つた。

「遅い」

また、沈黙が続く。ちょうどいといところにエレベーターがきたのでよかつた。

エレベーターにのり、一階までつくるを待つ。
すぐについた。

外に出ると、春の生暖かい風が髪を靡かしてくれる。
ブレザーを着てるから少し暑いけどシャツは案外薄くて寒そう。
学校につくと校門に誰かたつている。
男の子だらうか？男子の制服を着ている。

「おっ、星野ーー！」

「あ、ぬりちゃん!…ひしゃぶりだね!」

校門にいたのは同じ学校だった音無 ルイ だった。
ルイとこう名前だが、みんなルイのことをぬりちゃんと呼んでい
るから私もぬりちゃんと呼んでいる。

星野といつのは私の苗字。

「ぬりちゃん、男子の制服なんだ? 女の子なのに」

ぬりちゃんは苦笑する。
ぬりちゃんは外見は男の子に近い女の子で、ショートカットの髪
に少しほつちやりしている。
でもぬりちゃんは心は男の子らしい。
だから男の子っぽい言葉遣いになるみたい。

「ん? 星野、また髪のびた?」

ぬりちゃんが私に聞いてくる。

私はこくんと頷いた。

私の外見は少しぬねていて長い髪に茶色っぽい瞳。
体はやせている。

髪は少し茶色がかかつたぐらいで長い髪は少しの血塊だ。

「クラス表みたか? まだなら見てこよ。俺はこいで待ってる
奴がいるから」

「うん、そうある。ぬりちゃん、またね

私は手をふり、クラス表を見てみる。

「わ、六組だ！ん？美咲と千恵は違うクラス！？ええ……」

クラス表を見てがっかりする。

小学校の時から仲がいい美咲と千恵は違うクラスだったから。

「いいじゃない、新しい友達つくれば」

「うん……やつだよね……」

私は六組の列に並ぶ。

その時に声をかけられたので振り返ると真琴がいた。

「ハハローーひせしづりーー！」

真琴…………富内　　真琴は同じ学校だった人で、肩までつく髪に少しほつちやりしている。

でも、可愛いと思いつ。

「み、 富内　　真琴ーー！」

「…………どうしてフルネームなのかなあ？」

小動物みたいで可愛いけどな～。

「なんとなく……かな？エヘヘ？」

真琴が頬を膨らませる。

「もひー別にいいけど……でも新しい学校の人ってなんか……おびえちゃうね……特に女子……」

真琴がなんだか変?

私はおびえるというより、緊張するよ……。

「私は不安だなあ。友達できるか……私、人見知りだもん」

真琴はああ、とだけ返事をしてニーンマリと意地悪な笑みをする……。なんだらう、嫌な予感が……。

「『』『』ロは人見知りだもんね~。初めてあつた人とか、そんなに仲良くない人と喋る時なんかのすゞくおどおどしてるもんね?」

「……仲がいい人だったら、本当の自分でいられるんだけどね……」

私はテンションの低い声で言った。

だつて、仲がいい友達は違うクラスだもん!!

私はふうっとため息をついた。少し自信がない。このクラス（六組）で友達ができるか。

「じゃあ、並びましょうか」

真琴がからかうような、楽しんでいるかのような声をだす。
ひ、ひどいー!

並んですぐに体育館に行き、先生達の挨拶、校長の話で、その後各クラスに移動した。

今、六組の自分の机に座つて、先生の話を聞いている。

「初めまして！このクラスの担任の 工藤 鈴 です。
担当科目は国語です」

工藤先生は女教師でまあまあ綺麗な方だ。 声も透き通っていて
綺麗。

「初めまして、このクラスの副担任の 中山 聖 です。
担当科目は理科です」

中山先生は男教師で顔は普通だなあ。

「では皆さんにも自己紹介をしてもらいます。一番からおねが
いします」

「俺かよー?えと……………です」

みたいな感じで始まった。

私は二十六番なのでまだまだだと思っていたけど、すぐに私の番
になつた。

「ほ、星野 ハロです。よろしくお願ひします」

私の自己紹介は終わり、後ろを向くと真琴がいた。 私の次が真

琴なんだ。

「富内 真琴です。よろしくお願ひします……」

真琴はさつさと済ませて、ガタンと音をたてて座った。少し、落ち着いた……。

全員の自己紹介が終わって、さよならの挨拶をした。私は通学カバンにもらつた教科書をつめて、靴に履き替える。ここは学校では上靴で、学校に行くときや帰るときには運動靴に履き替えなきやいけない。 体育はグランドだつたら運動靴で体育馆だつたら上靴らしい。 当たり前だけだ。

「美咲と千恵は四組か……廊下で待つてよ」

駆け足で私は四組に向かつ。 待つてる間暇だったのでミニーフラス表を見る。一瞬、時が止まつたような感覚がした。

——大西 穂——

その名前を見ただけでチクン、と胸が痛む。 穂も四組だつたんだ……。 会わせる顔がないよ……。 だつて、私は一度穂に——

「ハハロー……ビーフしたの? ポートヒート! ——」

私は考えるのをやめて、声のした方を向く。 大体予想はしてゐ

んだけどね。

「千恵か…… 美咲は？」

「美咲なら、まだ教室にいるよ」

美咲、おいていかれたんだね……。今、私の目の前にいるのは千恵。武内 千恵。外見は髪をポニー テールに結ついて、鋭い目、明るい性格かな。

「待つてよう～！千恵は早いんだから～」

美咲が来た。佐藤 美咲はのんびりした性格で髪はストレート、目は大きく、体重は普通。

「帰ろつか……！？」

誰かとぶつかつたのでぐるっと後ろを向いて相手を見ると……そこには……大西 棗が！？

「なんだ、星野かよ！」

「大西！？ぶつかって悪かったね！」

私はそれだけ言つと大西を無視した。千恵はクスクス笑つている。私、笑われるようなことしたかな？

「ココロ、大西だけは惚れちゃだめだからね？」

はあ？と思いつつも黙つて頷く。実は私と大西は小学校の時に

両想いとかいう噂があった。勿論、嘘だよ？

「そういうえば、一人の初恋の相手は誰？」

美咲は顔を真っ赤にしてモジモジしてから言った。

「リ、リク…… 杉村 リク。今も好きだよ……」

美咲の後に千恵が言った。

「私は元カレだな。口口口はまだ初恋をしてないんだっけ？」

「うん。初恋……恋ってどんな感じなのかなーって思うぐらい」

私はこの時知らなかつた。私の初恋の相手はすぐそこにはいることを……何年もその人を想い続けることを……。

o n e s i d e d l o v e - 1 中学生（後書き）

蜜柑色の君は思い付きで書いてるので更新は早かったり遅かったりと不定期です。
けれど大体最後は決まっているので最後までよろしくお願ひします！

one sided love-2 クラブ体験（前書き）

テーマは「恋」なんですがまだまだテーマは書かずにだらだら書いてます。

だらだら書いていてもちゃんと恋と関係あって進んでいるので大丈夫なんですが問題は自覚なんですね。

one sided love-2 クラブ体験

朝。

目覚し時計が耳元で騒がしく鳴るので布団からもぐもぐと手を伸して力チツと小さな音をさせて時間をみる。

少しねぼけている私は目をこすりながら制服に着替える。時間はきつちりとした7時。

歯磨きをして、髪をととのえ、制服についている「」をなれたでつきで落としていく。時間にまだ余裕があるので食パンを手にとり私の大好きなチョコレートをぬつてぱくりと食べる。

飲み物は何にしようか迷う。

牛乳はアレルギーで飲めないし……。

考えた私はオレンジジュースにした。

オレンジは好きだ。

私は千恵が迎えにくるのを待つ。

昨日の帰りに千恵が私を迎えてきて、そのあと一人で美咲を迎えていくという話をした。

私と美咲の家は中学校に近いけれど、千恵は遠い。
だから徒步で私の家にくるには三十分ぐらいかかる。
いろいろ大変なんだよなあ、千恵って。

そんなことをぼややんと思つていたらインターほんの音が家のによく響く。

きつと千恵がきたのだろうと思ひ、私は鞄をもってドアを勢いよくあける。

あけた途端に千恵の「あーー」とこづ驚いた声が少しだけ聞こえたような……。

「あ～、ビックリしたあー！」「はしゃぎやがじやない？」

「だつてー夢にみた中学生なんだよー？楽しまないとねー。」

私は鼻歌を交えて軽々と美咲の家についた。

美咲の家は少し花が植えてある。

なので春……今の季節は蝶が花に舞っている。
心癒されるから好きな場面。

千恵が美咲の家のインター ホンをおす。
だけど何の応答もないのでもう一回おそいつとすると美咲がでてきた。

美咲はのんびりしてるので遊ぶ時も遅れることが多い。
そこが美咲の好きなところでもあるんだけど……。

美咲は私と千恵の姿を確認すると安心したように笑んだ。
そして学校の門をくぐる。

美咲の家は中学校に近いから歩いて一分でつべぐらい。
羨ましいと思つ。

そんなことを思つていたら美咲が私に聞いてきた。

「『ハロ～？』聞いてる？』『ハロはノートもつてきた？』

ノートへ。どうして？…………あ！そつだ、今日から初授業なんだ。
ノート……いるよね……。

忘れたあー！

そんな私を見て千恵は大体予想がついたのだろう、鞄からノートを一冊取り出し、私にわたしてくる。

「口々口の」とだから忘れたんでしょ？あげるよ。一冊だけなら

「

それは大学ノートで緑色の綺麗なノート。千恵はいつも私を助けてくれる。

千恵は私の親友だ……。

美咲もだけどね！

いろんな話をしていたらもう教室の近くまできていた。

まだ話したいなあ、と思うけどしうがない。

二人に手をふって教室にはいようとすると美咲が私に言った。

「休み時間になつたらいくからね～ だから休み時間まで我慢だよお？」

にっこりと笑い、美咲は私の頭をよしよしとなる。

うう……なんか私だけが幼い子供みたい。

私は美咲にありがとう、といい教室にはいる。はいつた途端、誰かから声をかけられた。

「おはよおー！確か……星野さんだよね？」

「は、はい！？ほ、黒野ですか……」

その女の子は少し長めの髪に綺麗な顔、なんていつか……もてそ
うな女の子。

……この人は柴崎さん。

11のクラスで少し目立っていたから名前もすぐに覚えた。

「やだな！そんな敬語はいらない！タメでいいよ？」

「人見知りなん……。じゃ、じゃあ」

私は逃げるよに席についた。

柴崎さんはやりと笑っていたような感じがある。

私はふう、とため息をつく。

こんな人見知りじや、友達をつくるのが難しい。

いや、できるかな？

私はどうしようもなく不安になる。

そんな気持ちのせいかもう先生がいて、朝礼が始まる。

「田直は一番からです！男女ペアでやってもらひのどー番と二
番、おねがいしますね。日誌は前にあります

一番と二番が前にいつたと思つたら二番の女子は笑つており、一
番の男子は恥ずかしそうにしていた。

「げえー！お前とかよー！」

「何よー？私だつてね、あんたとやるのは嫌なんだからねー！」

仲がいいんだな～。小学校が同じだったのかな？

中学校には違う小学校だつた人が沢山いるから知らない学校からきた人は誰なのかわからない。

……でも、男子と一緒に日直をしないといけないのは嫌だ。

私は……男の子が苦手。

こわくて、乱暴なイメージが強いから。

気がつくと朝礼はおわっていたようで先生の説明が始まっていた。

「日直は日誌を書いてもらいます。書き忘れたりしたらやり直しなので気をつけて下さいね。授業はほとんど受け方の説明だと思います。では頑張って下さいね」

そう言つて先生は教室をでていく。

入れ違いで英語の先生がはいつてきた。
そしてファイルを配つていぐ。

「そのファイルは授業で配るプリントをとじてもうつためのものです。なくさないようにー配られたら名前を書いてください！」

私はファイルに名前を書く。
そしたら隣の男の子が話しかけてきた。

「へえ、ハロウかあ！いい名前だね」

「あ、ありがと～」

優しげに微笑む彼はなんだか素敵で。
すぐにおとなしいな、と分かった。

私と同じ茶黒の髪に少しだけはねてるしつぽ頭。ほんのりと赤に染まっている頬。にっこり笑うとかっこよわそつな顔。全てがととのつた人だ。

黙つてもきつとカツコいい。もてるだらうな~。

しばらく先生の話を聞いてチャイムがなる。私はやつとおわったと思い、廊下の方をみる。まだ、美咲達はきてなかつた。
どうしようかな……。私、このクラスに友達いないし。知らない人ばかり……。

……このクラスになじまないといけないのに、なじめない……。
凄く孤独に感じる。
おねがい、はやくきて……。

「…… ハッ ハロー――聞こえてるー? ハロー――」

私は顔をあげる。
真琴がいた。心配そうに私を覗き込んでいた。
真琴が私に何の用だらう?

「さつきから美咲がいるの。ハロをよんでもほしいと頼まれて
ね」

「真琴は?誰かと喋らないの?……友達とか」

私がそういうと真琴は苦笑した。

「んー……私、このクラスで仲のいい人いないから。それに一人の方が乐じやない? 女子なんか……裏でねちねち悪口言つしさあ」

それは私も思つた。女子は男子のいるところでは女らしくするけど、裏では下品な人が多い。男子がいないと女らしくないんだよなあ。でも、裏表のない人もいるけれど。本当は、男子より女子の方がこわいのかもしねない。
だから私は男女嫌いだ。

「そり……真琴、ありがと。じゃあね」

私は廊下にいく。

美咲達を長くまたせるとなんだか軽く怒るような気がして。

廊下にいくと美咲がふあー、とあぐびをしていた。
千恵は私を軽くバシバシとたたいた。

「ココロ、ぼーっとしてるー。じつはそっちのクラスは? いい人いる?」

「それがね、気の強い女の子ばっかで。真琴以外苦手かも。……でも男の子では隣の席の人とか! ジー! 優しそうないい人……かな」

私は教室にいるその男の子の話をする。

千恵は羨ましい、とか言つてた。

私はなんですか?、と思う。

まあいいか。

「今田さあ、クラブ体験だねえ？」「口せどい」を体験しにいくの〜？」

え？ クラブ体験なんかあつた？

話、きいてなかつた……。

私はうーん、と考えるじぐわをして少しうかんだクラブがあつた。

「び…… 美術部は？ 絵を描くの好きだし。楽そうだし！ 帰宅部でもいいな」

「そうか〜。口せどは美術部かあ！ 私も美術部にしようと思つてたんだよね。よつしー三人で今日体験しにいこつか！ いいよね？」

口せど、美咲？」

私は「ぐぐぐと頷く。 だつて三人の方がなんか安心するから……。

辛いことも頑張れる……から。

チャイムがなり、私達の声は打ち消されかわりに先生の声が響いた。

またね、と教室にもどつていぐ一人をさびしく思いながら私ももどる。

席につくと隣の男の子が私をじつと見る。

なんだろ、と思いながらも気にしないふりをする。

すると隣から聞こえないぐらいの声で「やっぱり可愛いなあ、凄い好みだ」と聞こえた。

なんのことだらう？

終礼をしてすぐに美咲達と会流し、美術部のところへいく。
ドキドキしながら美術室にはいるとツワツワの髪を結った清楚な
女の子がきた。

「体験にきたのね～？あ、この子可愛い！」

そういうて私にだきついてきた。
え……なんか想像^{イメージ}と違う。
もつと……控え目だと思つてた。

「こりゃー困つてるでしょ！あんたはもう可愛い子ばかりだきつ
いてー」

奥の方から背の高い美人さんがくる。
なんか……個性豊かな人達だな。

体験もおわり、帰る時間になつたので千恵と美咲と喋りながら門

に近付くと男子バスケットボール部がまだやっていた。

特に気にすることなく男バスをよけて門をくぐりついた。
あ、男バスって長いので短くしただけだよー。

「きめちまえーー！」

そう叫ぶ声が聞こえた。
私は思わず後ろを振り返り今……ショートをいれた人をしつかり
とどけた。
するとまるで——時間がとまったような感覚がした。
私に何があきたのか分からぬけど……『彼』から目がはなせなくなっていた。
そこにいたのは……あの男だから。

one sided love-2 クラブ体験（後書き）

問題は自覚と前書きに書きました。

それは主人公の「コロガいつ恋をしたか自覚した途端恋になりました。

そのへんではまだまだ自覚はできないんじゃないかなー、と思
います。

one sided love-3 彼の笑顔（前書き）

次話からは夏にする予定です。
すいません、季節外れで……。

そしてココロと棗の絡みがあるかな、と。

全然絡みがないので、二人の絡みが書けるのはある意味貴重なんですよ！

そして重要な人物も少しづつ出て来ます。
ココロの隣席の男の子の名前はかなり考えました！
気に入ってくれたら嬉しいです

one sided love-3 彼の笑顔

大西……。あの男があんな綺麗な笑顔、出来るの？今まで見たことない真剣な顔。

シユートが入り、嬉しそうにしながら友達と肩を組み、ハイタッチしながら喜ぶ君。

何時間していたのだろうか？服は汗でびしょびしょだ。

私は、初めて君の笑顔を見たよ。君でもあんな無邪気に笑うんだね。

そしてどうしてだるい？今、私の鼓動がドクン、ドクン、と高鳴る。

胸がきゅっとしめられた感じがする。
けど苦しくなくてむしろ感じたことのないくらい緊張して、ドキドキする。

感じたことのない、変な気持ち。

なんだろう、この胸の騒ぎは。名前があるならどんな名前？

何の感情？

どうして君から目が離せないの――？

「……『口口口』どうかしたの？誰を見ているの？」

千恵が心配そうに私を覗き込む。

私は恥ずかしくて顔をぱつとそっぽむいてしまう。

千恵はニヤリと意地の悪い笑顔をして、私はなんだか千恵に全て見透された気がして、顔をあわせるのが嫌になる。

「大西を見てたね？あれえ？『口口口』の顔、頬が紅いぞー？」

「そ、そんなことない！暑いだけ！」

暑くはなかつたけれど、今感じた胸の騒ぎはなんだか言えなかつた。とても嫌な感情のよつた気がしてーー。

私は夜も中々寝付けずにいた。

頭では寝ようと思つてゐるけれど大西の笑顔が何度も繰り返し思ひ出しては胸が高鳴る。こんなのがつして?なんであいつにあいたいと思つの?おかしいよ、こんなこと今までなかつたのに……。

学校でも寝不足だ。千恵からは「大西が気になる?」とからかわられるし……。

ため息を軽くして席へカタンと座る。

隣席の男の子はまだ来ていなかつた。

どうしようかなあ、と考えていたら後ろからついつんと制服が何かに触れる。

予想をしつつ、後ろを見ると予想通り真琴がシャーペンを持ち、「口つと笑つっていた。

「今日の口つと、何か悩んでる気がして。何か役に立てればいいな、と思つたんだけど……」

真琴は照れくさそうに頬を紅色に染める。 真琴なら言つてもいいかもしない。

真琴は誰にも言わなさそうだしね。 それに真琴なら知つてているかも……。

このわけのわからない気持ちが。

私は真琴にそのことを話した。

真琴はうんうんと分かつたように手を組む。

私は期待をこめて真琴を見る。

その時言つた言葉は信じられなかつた。

「それは『恋』だと思つよ? 分からないけど一目ぼれじゃないかな? 一目見て惚れるつていうあれ。見たことない棗の笑顔に惹かれたんだね」

「そんなはずない! だつて……だつて、見たことない人の笑顔だつてあんな気持ちにならないもん!」

私は真琴の言葉を信じられなく、いつも人の意見に流されるのに今回だけは納得したくなかった。

否定したかつた。

真琴はやれやれ、と呆れたように私を見つめ、その目には「まだ認めないか」という意味が込められていた気がする。

私はそんな真琴の瞳^めから逃げたくて目をそらした。

タイミングよく先生が教室にきてくれて朝礼が始まる。

朝礼が終わると真琴は隣席の男の子と喋つていた。 安心しながら教科書を机に置くと私の隣席の男の子がじつと見る。
そして話しかけ、優しく微笑む。 この人は優しい人だな。

「星野さん、悪いんだけど……教科書忘れちゃつてさ。見せて

く
れ
な
い
?」

私は出来る限り笑顔をつくり、うんいいよ、と頷く。

その男の子はありがとうと笑いながら真ん中に置いてある教科書をパラパラとめくつっていく。 そういえば、私この人の名前知らない。 なんか聞きにくいなあ……。

「槙野 隼人。僕の名前。知ってるかもしれないけど」

先まで教科書にあつた視線が今は私をとらえる。

カツコいい顔がしつかりと私を見て顔が熱くなる。

真剣 そうな瞳。 目を逸らすのがなんだかもつたいないくらい。

私は急に恥ずかしくなり、ぱつと目を教科書に向ける。

教科書を見やすいようにか手が教科書にのつてあり、凄く見やすい。

なんか紳士のように優しい。

他の女の子にもこんなに優しいんだろうな。

何か……モヤモヤする。 今日、変なもの食べたかな?

なんか気持ち悪い感情。 隼人は「意地悪しすぎたかな」と

苦く笑う。

どんなことを意味するのか分からなかつた。

隼人さんがどんな気持ちだつたのかも……。

休み時間になると教科書を私の机に優しく置くと次の準備を始めた。

はあ、と悩みがあるわけでもないのにため息をついてしまつ。

心配したのか隼人さんが顔を覗き込む。
すつごい顔が近い！！

「隼人～？何してんのよ？星野さんが迷惑してるじゃん！」

「柴崎？……あ、ごめん！迷惑だよね」

柴崎さんは隼人の机に手をつき、まるで隼人さんを狙っているような感覚。

仲が良いのかな……。 柴崎さんは隼人の腕を引っ張り、廊下へ出て行く。

「またかあ～！柴崎が隼人狙ってるよお～！いくら小学校が一緒で友達だからってえ！隼人は皆のものなんだからあ～！」

後ろの方で何か叫んでる人がいるけど、きっと隼人が好きなんだろうな。

柴崎さんと隼人さん、友達だつたんだ……。
だからあんなに親しいんだね。

真琴が私の手をひいて、机に座らせる。

私はどうして真琴がそんなことするのか分からず、真琴を不思議

そうに見る。

真琴は私の肩にそつと手をおき、小声で私に伝える。

「……槙野は女子から凄い人気があるの。だから『口口口』、気をつけて。女の嫉妬つてこわいから」

少し険しい顔。

どうしてそんな表情をするの？ 気をつけるって何を？

そんなの知らないよ。 隼人さんが人気だろうと私に関係ないも

の。

それに隼人は誰にでも優しいからいいんじゃないかなって思う。

ほんやり考えていたら少し変な笑い方をした女の子が教室に入ってくる。

柴崎さんだ。柴崎さんの隣には隼人がいて楽しそうに笑っている。
柴崎さんはチラリと私を見てニヤリと笑い、隼人の腕に手を絡ませる。

付き合っているみたい……。

女子のほとんどが悲鳴をあげている。

隼人は「どうしたの?」というように柴崎さんを見つめる。
真琴はギュッと強く拳を握り締めていた。

私は今日も美術部にいく。
今日は真琴もいた。

フワフワの先輩は私が来るのを確認すると必ずだきつく。

そのたび美人さんがとめにくるんだけど……。

そんなやりとりをしていると千恵が「男バスがいるよ?見ないの?」と笑う。

私は千恵を軽く叩くと美術室の窓を見る。そこからは男バスがシュー^{まえ}トをしようとして練習していた。

私はなぜかあいつが見たくなり、他の男バスの男など全然見ず、あいつーー大西を見る。

シュー^{まえ}トをはずすと悔しそうに強くボールをとり、シュー^{まえ}トをすると以前のような笑顔を見せた。

私はまた胸がきゅっとしめられたようになり、高鳴る。私はこれが限界で大西から視線をはずす。

すると千恵が「あれ、隣席の男の子じゃない?」と私に知らせる。千恵が言つとこりを見ると隼人さんがいた。友達と楽しそうに話しており、出番がくるとボールを投げる。見事ショートする。

「きやあー口口口、あの男の子カツ口こいよ!」

千恵がわあわあと騒ぐ。

隼人さんも男バス体験してたんだ……。

確かにスポーツしてるとこりはカツ口いい。

足もしゅつと細いけど筋肉はついており、前から運動してたんだろうな……。

きっと足もはやいだろ。

私が窓を見るのをやめようとすると隼人さんが少しだけこちらを見て、手をふってきた。

あまりの驚きに私は混乱し、千恵はきやー、とはしゃいでいる。私の顔はみるみる熱くなり、きっと真っ赤になつていると予想がつく。

隣にいた千恵がクスクスと笑い「口口口は誰に惚れているのかな?」と面白がる。

私はまだ隼人さんがこちらを見ているので恥ずかしくなり、窓から離れる。

でも顔が熱いのは消えない。

いくらクラスメイトで隣席だからってそんなことしなくていいのに……。また女子がヤキモチやくよ?

私はなんだか早く学校から出たくて小走りで門をくぐる。すると後ろには隼人さんが！！

「星野さんだ！ 美術室にいたけど美術部に入るの？」

「あ、まだ分からぬかな。今のところは美術部なだけで「隼人の隣にいる友達がジロジロと私を見る。な、なんだろう？ 私に何かついてるかな？」

「この星野つて奴、隼人の彼女？」

「は、はあ！？ 何言ってんだよ！？ 同級生で隣席なだけで！ 彼女なんかじゃない！ そんなこと言つたら星野さんに迷惑だろ！」

隼人は顔を真っ赤にして否定する。

別に迷惑じゃないけど…… そんなに全力で否定しなくてもいいと思つんだけど……。

でも彼女がいるなんて噂をたてられたら女子は嫉妬するし、むしろ隼人が大変な気がするなあ……。 彼女、出来るのかな？

「う、うめんね。 こいつに後でいろいろ話すから。 ジャ、また

明日」

その友達の背中をおし、私と反対方向に戻る隼人さん。
もしかして私に声をかけるためだけに反対方向なのにきたの？
どうして？ 時間の無駄なのに……。

隼人が別れ際にみせた笑顔は無邪氣で綺麗でかつこよくて……。

また、胸が騒がしく高鳴るんだ。

one sided love-3 彼の笑顔（後書き）

隼人くんは個人的に凄い好きです

沢山ココロと絡ませてあげたいのです……。

隣席のお話が好きで蜜柑色でも書いてしました……。

「君と繋がる」だけにしようと思っていたんですけど。
とりあえずほんわりした雰囲気を出したいなあ。

o n e s i d e d l o v e - 4 相談（前書き）

一ヶ月放置……。

不定期更新なので遅れる場合もあるのであたたかい田で見て下さいね。

一ヶ月放置はなんとかしないよつこします！

あの日から数ヶ月が過ぎてもう真夏。

春とは違ひ太陽の光が強くなり、暑くなる。

夏が苦手な私は早く秋が訪れたらいいのに、と思つ。

でもよく「夏は爽やかな恋の季節」と誰かが言つてた。どういう意味か全く分からないなあ。

私は手に握り締めているスケッチブックを鞄にしまい、美術室に向かう。

「あら～ ハロちゃん、来ててくれて嬉しい」

「来るのは当たり前じゃないですか。美術部に入部したんですねから」

私はもう何か月か前に美術部に入部した。

楽しそうだから、というのもあるけど一番の理由は先輩に頼まれたから。

「美術部がこのままじゃなくなっちゃうーお願い、入つてほしいの！」と頼まれ断れなくなつた。

でも千恵と美咲も入ってくれたからいいんだけどね！

「もうすぐ五時かあー。そろそろ帰る準備でもしようかー」

フワフワの髪の先輩は持つていたスケッチブックをなおし、鞄を机に置く。

私もすぐに鞄を机に置き、先輩にさよならと言つた。

今日も部活がある。

勿論楽しいのだが何か物足りない。

そんな気になる。

なんとなくだけど不意に教室に戻る。

そして隼人さんの机を指で軽く触れ、なぞる。

誰もいないから出来ただけで誰かいたら絶対に出来ないことだ。
そんなことをしたら隼人さんのファンの女子に殺されるのではな
いだろうか。

……こわい！ 考えただけでブルブルと震えちゃうよ……。

「……ほ、星野さん？」

慌てて振り返ると少し息を荒くした隼人さんがドアのところにた
つている。

え。み、見られた！？　は、恥ずかしいーー！

「何してるので？そこ、僕の席なんだけど」

近くに寄ってきた隼人さんの声に私は震えてしまふ。

お、怒ってる……かな？

ど、どうしようつー！　あ、謝らなきや！

「い、止めーー！」

「え？なんで謝るの？僕の席に触ってただけなら全然いいけど
？それに忘れ物を取りに来ただけだし」

隼人の言葉に驚き、私は隼人さんを凝視する。すると机の中からタオルを取り出し「これ、部活にいるんだよ」と笑う。

「そういえば隼人は何の部活してるんだろう？」

「何の部活してるか気になる？そんな顔してるよ。……僕はバスケ部！」

「バスケ部かあ……体験してたしなあ。

でも隼人は運動神経抜群だからサッカーでもよかつたのに。

「バスケ部に入ったのはね、ライバルがいるからなんだ。名を棗。大西 棗。棗は運動神経抜群なんだよ？だからバスケ部のエースだよ。棗とはいライバルになれそうなんだ。あいつも僕のことエースと思っててライバル意識されてるしね。それに……棗は恋敵だし」

ふえ？ 最後に言つた言葉、よく聞こえなかつた。

小さく呟くように言つたから。

「なんて言つたの？」と聞くと隼人は柔らかい笑みをして「星野さんは知らなくていいよ」と言うから余計に気になつて。

「星野さんは部活は？」と優しく問うから私もつられて笑顔になつて「美術部だよ」と言つた。

「楳野さんは大西と仲が良いんだね」

「……まあ。あのさ、星野さん。僕のこと『楳野さん』じゃなくて隼人って呼んでもらえない？その方がなれてていいんだ」

私は少し戸惑つたものの、他の人も呼び捨てだしいいかと思い、隼人さんを隼人と呼び捨てにすることにした。

隼人、と呼ぶと本当に嬉しそうに彼が笑うから。

私も幸せな気持ちになつてまた彼の名前を呼んでその笑顔が見たくなる。

「あー。もう戻らないと先輩に怒られるな。またね、星野さん」

君が手を振るから私も振替えして。

君が教室から出て行くと私は顔が熱いことに気が付いた。

見られてないかな？

見られてたらどうしよう？　は、恥ずかしいよ……。

私は鞄を見て部活のことを思い出した。

あ、行かなくちゃ！　先輩がきっと顔を紅く膨らませて「遅いよ」と怒りそう。

先輩はそんなことをしても可愛いから羨ましいな。

廊下を歩くと曲がったところに先輩と見知らぬ男の人人が楽しそうに話していた。

先輩は俯きながらも必死に喋っているので可愛い。

先輩はその男の人と別れると私にこりと微笑みかける。

「見られちゃったかあ～。『口ちゃんなら言つてもいいかも～。わ、わた、私ね、あの人の方が好きなの～！』

きゅうと恥ずかしそうにはにかみながら先輩は小さな唇を動かす。でもね、と悲しそうにも笑う。

「あの人は私を見てない。本当は私なんかより、あの娘の方がいいの」

先輩が見るのは美人さんだ。

先輩は『片思い』をしているのかな。だからそんなに切なそうに笑うの？

先輩の横顔は千恵や美咲の横顔とよく似ている。

千恵達も、好きな人のことを話すと嬉しそうにするけど、でも本当は深く悲しい笑顔。千恵も美咲も言っている。「アイツは私じやなくて他の人を見ている」と。

先輩もそう言つてる。

「相談が、あるんです」

「ん～？ 私で良ければなんでも聞くよ～？」

私はその場では言いにくいので裏庭に出た。

先生が花が好きらしいので育てている鮮やかな花が沢山。中でも好きなのは向日葵。

夏限定で先生が育てているんだ。花言葉は『あなたを見ている』。

私はその向日葵に近寄り、すぐ側でしゃがみこんだ。

「先輩、恋つてなんですか？」

先輩は驚いたように目を見開き、口を開けたままにする。

私は苦笑すると「恋がよく分からいんです」と付け加える。

先輩も向田葵に近寄り、向田葵を優しく見つめる。

「そりね、向田葵のよひ。いつも彼を見つめている、切ないくらごじうじゆもなく想ひ。……喋れると嬉しくて、ドキドキして。でも他の女の子と喋つてると嫉妬しちやう。案外複雑ね、恋する女子は」

先輩はこじこじしながら向田葵を撫でるよつに向田葵の上に右手を翳す。

私は先輩が幸せなつに話すから、もっと幸せになつてほしい。そして私はきっと酷いことを言つた。

「恋なんてしなければいいんじゃないですか？」

「そつ思うわよね？でも無理なのよ。恋は気付いたらしているもの。恋したら自分を成長させてくれる。強くさせてくれる」

先輩は少し表情を曇らせた。きっと私が無神経だから。

先輩に失礼なことを言つたから。

恋をしたら強くなれる？ 分からないけど、傷つくのは恐い。

「ハハハもいつかするよ。したら応援頑張るよ。恋は素敵だつて言つよ」

私には、そんな経験できますか？

先輩のように優しく相手を考えられる、優しい人になりますか？

私は相手のことを本気で想えるのですか？

先輩はその人を好きになつて悔いはないのですか？

そう聞こうと思つたけれど、私は自分で確かめたかった。

私にもそんな人は出来るのか。

それに本当に先輩があの男の人を諦めたら聞きたい。

「先輩は後悔しませんでしたか？」

そして先輩はなんて言つのか。

なんて、言うのかな……。

先輩は「ココロちゃん、部活に遅れても大丈夫だから」と私の肩を優しく叩くと裏庭には私だけになつた。

「星野？」

私はぐるりと後ろを向く。

するとそこには……アイツが。

「なんだよ、んなところで」

私はアイツ、大西を見る。

大西は体操服を着ていて、片手にはタオルと水筒があつた。汗を凄いかいていて髪の毛が首に張り付いている。
確か……大西もバスケ部だよね。

部活じゃないの？

「部活はどうしたの？まさかサボリ？」

「そんなことしねえよ。今は、その……休憩だ！」

そりなんだ？

私は少し頬が熱くなるのを感じながら大西に笑いかける。
そういうえば大西と喋るのは何年ぶりかな。

あの日以来まったく話すのもなくなつた。

あれは私が悪いんだって分かっているけれど。

「でもさ、星野と喋るの俺がフラれてから全然喋ってねえよな？俺が星野に告つて星野にフラれて……あの時はズタズタだつた」

やつぱり大西も覚えてる。

私は何も言えなかつた。これ以上言つたらまた大西を傷付けてしまいそうで、恐い。

「棗！お前部活サボつて何やつてんだよー？なかなか来ねえから心配したんだぞ？」

隼人が来て棗を軽く叩く。

え？ やつぱりサボり！？

棗は隼人に引っ張られどこかに行つてしまつた。

私はまだ美術室に行けなかつた。

だつて、きつと顔が紅い。そしたら千恵にからかわれてしまつ。

「口口口～？」「んなところにいたんだねえ～？」

あ。誰の声かはつきり分かつた。

私は声の主——美咲に抱き付く。抱き枕のように。安心感を求めるように。

美咲は「どうしたの～？」と笑いながら聞く。そしてよしよし、

と私を抱えるように抱き締めかえしてくれる。

私は美咲に思い切って聞いてみた。

「七年も想えるのは本気の恋なの？」

美咲は「うん」と首を左右に振ると急に真面目で真剣な表情になる。

「そんなことないよ。何年も想い続けたからって本気の想いとは限らないよ？一瞬でさめちゃう恋もあれば一瞬で本気になる恋だってある～」

驚いた。

だつていつもは幼い美咲がしつかりと自分の意志をもっていたから。

美咲はしつかりしてなくて千恵がいないとダメと思つていたけど全然違う。美咲はちゃんとしつかりしてるんだ。

しつかりしてないのは私の方なんだ。

私もちゃんとおどおどしないで自分の意志をもたなくちゃいけない。

美咲のように、優しく見守るような、そんな強さを。

「大丈夫だよ。恋は叶わなくても相手の為に出来ることが絶対にあるから」

美咲は「お見通しなんだから」とくすくす笑うけど、お見通しつて何が！？
ま、まさか……美咲も思つてるのかな？
私が大西のことが好きだって……。

「わ、私は恋なんかしてない……」

「あれえ～？ 私、恋なんて言つてないけど～？」

は、はめられた！

美咲も千恵に似てきて……私が困つてゐのを楽しんでるーー！

……うー、ひどいよ、美咲も千恵も。

「じゃあ、部活始まつてゐるから早く戻るよ～？先輩心配してたんだからね～？」

美咲が私の手をひいて早足で階段を上つて行く。
途中こけそうになつたけど美咲の優しさが嬉しくて。
私は美咲のよつにしつかりするよつとするからね。
友達を、支えられるよつ。

one sided love-4 相談（後書き）

蜜柑色の更新ペースは月1更新です。

早かつたら月に何回かは更新出来ると想います。 5話は書き終わっていますがすぐに更新しません。

探検隊の方もあるのでバランスを崩さないよう心していきまや。 蜜柑色、次は六月更新かなあ……。

one sided love-5 気になるのは（前書き）

蜜柑色の更新日は28日か29日にしおりであります。

一ヶ月に一回更新で決まりですね……。

でも更新日は守りたいと思います！

読んでくれている皆さんも更新日の28日か29日に読みにきて
くれると嬉しいです。

「 ハロー。次、体育だよー」

真琴が体操服を持ちながら私に言う。

私は昨日のことでもんやりしていた。

美咲や、先輩。皆強いつてこと。

私はそうだね、と相槌をうち鞄の中に入れっ放しの体操服を取り出しお、長く茶色が少しだけまざつている髪の毛をポニー テールに結う。

長い髪はいろんな髪型にアレンジ出来るから好き。でもくくつてないと邪魔になることもあるからせめて体育の時だけ結つようとしている。

「あ、そういうえば今日の体育は四組とだね」

「……………はい？」

ぽかんとする私に真琴は知らないのか、と首を傾げる。
その時にさらっと揺れる髪はなんて可愛い仕草なんだろう。

「なんかね、時間割りが変わつて四組になつたよ。四組となるのつて初めてだよね」

真琴はうーん、と伸びをする。

私は四組に誰がいるのだろ？と思つ。

千恵、美咲、大西……。

お、大西！？ なんで出てきたの！？

片手に持つているタオルを落としそうになりタオルを持っている

手に少し力をいれる。

「あ、暑いからお茶とタオル持つて行かなくちゃ。待つててくれる？」

「うん。美咲達のところに行つてるね」

そう言つと四組に向かう。

窓から覗くと千恵が机の中を必死に探つている。ビラしたのかな？

我慢出来ずドアノブをきつく握りガラガラと開ける。

千恵はびっくりしたように固まり、淡く笑む。

「来て、くれたんだ？美咲は先に行つた。私も水筒を取つたらすぐに行く」

だから机をいじつてたんだ。

ふと机の上を見ると制服が綺麗に畳まれている。ブレザーは椅子にかけてある。

千恵は私のタオルを見て、それは？、とタオルをじつと見ている。

「このタオルは汗ふきだよ。夏は汗かくからね」

「へー、可愛いタオル！桜桃の柄だ。口口口らしい、可愛い柄」

千恵はふんふんと鼻歌を歌いながら水筒を片手に行つよ、と笑いかける。

あ、真琴を待たなくちゃ！
でもまだいるかな？

「ハハロ、待つてくれたんだ！千恵、だつけ？宜しくね？」

ひよこ、と小動物みたいな真琴が顔を覗かせてはにかむように笑う。

千恵もにこりと笑うと宣しく、と言いつワインクをおくる。

活発な千恵は見た目とギャップがある。

男っぽいな、って思つたら意外に女の子らしい。

そこがお姉さんの存在なんだけど。

「ハハロー！ほーっとしてない！遅刻するよー！」

「あわわ……。行くから！待つてーー！」

千恵が軽く頭をポン、とたたく。

私は急いで千恵と真琴の後ろについていく。

2人は気が合つのか話が弾んでいる。

私には分からぬ、いろんな話。

あれこれしているとグラウンドに着き、皆並んでいた。

これは……遅刻だ。

急いで並ぶとそのままマラソン。

少し息を切らすと先生が満足したように笑顔。

「よしー走ったことだし、今日の体育はサービスして1500メートルを走るぞー！タイムはちゃんと覚えろよー！」

先生……。それサービスじゃありません。

タオル持つてきて良かった……。

でも走るのは嫌だな。 そういうえば大西の走り……見たことないな。 見て、みたい。

「隼人ー。棗いるぜ？ライバル対決だなー。どっちが速いんだろ
うな」

「プレッシャーかけないでほしいんだけどな。ま、対決つてそ
んな大袈裟なものじゃないけど」

男子の列から冷やかしにも似た声。

隼人は呆れたように笑う。

大西も隼人の近くにやつてきて肩に手をおく。

隼人もにやり、と楽しそうに笑う。
そんなに楽しみなのかな。ライバルと意識しているからその人
と勝負するのは嬉しいのだろうか。

私には分からぬ、ライバルの存在。
すぐに走る準備をするともういつせいにスタート。
後ろには千恵がいてくれて励ましてくれる。
で、でもしんどい……。

ゴールして、タオルで汗を拭うと隼人と大西は地面に座つて、胡
座をかいている。

そしてお茶を飲みながら笑い合つていた。

「あー。まさかまた同じタイムでゴールするとはな。やつぱり
ライバルだ！隼人は、俺のライバル」

「嬉しいこと言つてくれるね？僕のライバルも棗しかいないよ

そんな会話が聞こえる。

2人は信頼してる。

友達だけど、ライバル。 そんな関係なんだろうな。

「おしーもー一回勝負しようぜー！」

「うーん、いいけど先生が許してくれないとダメじゃん」

隼人は冷静。 逆に大西は落ち着きがない。
モテるのはきっと隼人の方だろう。

私なら隼人の方がいい。 大西はなんか……無理かな。
2人は先生のところへは行かずにそこらへんのグラウンドにスタートラインをつくる。

そして次の瞬間……走った。

綺麗なフォームで走り、同じぐらいで横に並んでいる。

隼人さん、速い！

でも……目が追っているのは大西^{アイツ}でーー。

「こらー勝手に遊んでんじゃねえ！」

先生が気付き2人は途中で走りをやめる。
もう少し、見たかった。

君の、その走りを。

「へえーカッコいいじゃんーあの、四組の」

柴崎さんがくす、と笑う。

大西のことを言つてているのかな？

そんな不安に一瞬戸惑つ。 どうして私、こんなに不安になるの
……。

別に大西に惚れた人がいても関係ない。

アイツが、誰かと付き合つたつて……私には……。

「あー、あれは大西　棗　だよ。柴崎さんに似合わない。平凡すぎるよ、棗は。柴崎さんは槇野　隼人　と似合つよ」

四組の女子がため息1つ。

柴崎さんはふうん、と咳くとこつちに来て私の目の前でしゃがむ。す、凄い綺麗で整つた顔が私のすぐそこに……！
男子なら一瞬で心を奪われるんだろう。

「ねえ、星野さん。大西　棗　と隼人、どっちが好み？」

どうしてそんなこと聞くの？　分からぬいよ。

私にはそんな話する必要ないでしょ。

柴崎さんがどうしたいのか分からぬ。

言つた方が、いいのかな……。

「うう　んと……おお、……隼人」

大西と言いそくなつて口を塞ぐ。

勘違いされると嫌だから。

アイツに氣があるなんて思われたら、最悪。
だから隼人にした。

ごめんね。

「そうかあ。隼人紳士的だもんね！私つてカッコいい人より、
どこにでもいそうな平凡な人がいいのよね！だから私は大西　棗
が好みかもね」

柴崎さんの言いたいことはそれだけ？

なら、他の人に言えばいいんじゃないの？

私だって聞いて嫌なことつてあるんだから……。 柴崎さんは声を出すとまっすぐ迷いのない足取りで大西の前に行く。そして笑って話しかけている。

「棗だよねー！ 初めまして！ 六組の柴崎。 もうきの走りかっこよかつたじやん！」

「俺のこと知ってるんだ？ 初めましてなんていられよ。 柴崎、か。 ありがとな」

照れくさそうに大西が笑う。

柴崎さんは、積極的だ。 気に入ったら手に入れようとアピールすると聞いたことがある。 それはきっと大西を気に入ったということになる。

チャイムが鳴つたので重い足を引きずるようにして教室に戻つた。あとから真琴達に心配された。

大丈夫だよ、と笑つて誤魔化すけれど……。 今感じてるもやもやはきつと気のせい。

気付いちやだめ。

この感情が何なのか、気付かないふりをして心の変化に目を瞑る。それが今の私に出来る、卑怯なやり方。

帰る時間になり、四組で2人が来るのを待つ。 真琴も一緒に帰りたかつたけど別に帰る人がいるみたい。

なら邪魔したらだめだよね。

だから真琴と一緒に帰ろう、と言わなかつた。 言つたら邪魔してゐるから。

私は待つてゐる間暇だつたので窓からグラウンドを見る。 サッカー部か陸上部か知らないけど何人か走つてゐる。 私も部活したいけど、今日は活動日ではない。だから大人しく帰るしかない。

「星野さん？あれ、四組に待つてゐる人がいるの？」

声のした方を反射的に振り向くと隼人がいた。 体操服を着ていて、今から部活があるのだろう。 水筒を手に持つてゐる。

「うん。 今日は部活がないから友達と帰るの。 隼人は今から部活？」

「そうだよ。 夏に運動部は走り回るから辛いんだ。 吹奏楽部とか美術部はクーラーのきいてる部屋にいれていいいなあ」

私は思わず笑つてしまつた。 こんな暑いなか毎日のように大西と走り回つているのかな。 そう思うと笑つてしまつ。

隼人も柔らかな笑顔を浮かべてゐる。

「じゃあね。 遅れると先輩に怒られる。 あ、今日雨降るかもよ。 気をつけてね」

隼人は階段を2段飛ばしでおりていく。

ちょうど四組のドアが開き、ぞろぞろと出でくる。 千恵が怒つたように大西と言ひ合つていた。 こうこうといふのは

小学校の時から変わらない。

「棗——」

ふとアイツを呼ぶ声がして大西の元へ駆け寄つた女の子——柴崎さんを見る。

体操服を着たまま。
この人も運動部だ。

「ね、一緒に行こうよ！私、女バスだしさあ！近いからいいでしょ？」

「んー。断る理由、ないしな」

柴崎さんはやつたあ、と喜んで顔を綻ばせる。2人は仲良く私の前を通り過ぎて行く。

そんなこと、気にしない……。

大西は、誰のものでもない。今は。

「もーー！大西め！綺麗な子と幸せそうにして……□□□？大丈夫？」

「…………何が？わ、私は元気だよ。心配しないで」

作り笑いを浮かべ、窓をふと覗く。
するとさつきの晴れやかな天気とは比べられないぐらい雨が降つていた。

「傘、持つてない」

そんな千恵の話をすら聞いていたのに私の心は胸に濡れられた
よつこしんみりとしていた。

one sided love-5 気になるのは（後書き）

「口の心情はぐらぐら揺れます。

幼い子供じゃないんですが「恋」が分からず迷ってしまいます。

柴崎さんは……もう分かりますね（笑）

隼人も分かるんじゃないでしょうか？

秋のお話、細かく設定中です。

one sided love-6 2人の距離（前書き）

サブタイトルは関係ないかもしません。

さて、次回から秋話ですよ！

早くすいません！秋話も3話ぐらいで終わります。

だいたい3話を目安に季節を変えていきます。だから春も夏も3話で終わっていますね。

もつと長くかけたらいいんですがサクサク進んだ方が読者様には読みやすいのかもしれません。

one sided love-6 2人の距離

私は鞄を頭の上に乗せて落とれなこよつと手を添える。

その状態で雨の中、走り中。 千恵達を待つていて気がついたら降っていたもんだから。 傘、皆持っていないのでこうするしかない。

寒いし、濡れるし……。 風邪ひきやがい……。

千恵がちらりと私を見てため息。
どうしたんだろう?

「ハハロ、本当はもやもやしてゐるでしょ?」

「してない…そんなことない…」

もやもやしてゐる感じない。

胸の奥がさつきからイライラする。

なんて、いうんだね!……。

何か、分からぬいけど見たくないものを見たような、そんな感じ。
何を見た? 悪いものなんて見てない。

「まあいいけど。でも、忘れないで。私はハハロの味方だから

「ね

千恵はいつものように優しく話す。

私は……強くなるつて決めたのに。

イライラしてるからつて友達に八つ当たりなんていけない」と。

「ごめんね。千恵。

私は支えられてばかり。なら、私から恩返しあげよう。

「じゃね。辛くなつたら電話でもしておいで。家に来ても私は

全然大丈夫だからねー

「ありがと…『めん、千恵……』」

泣きそうになるのを必死に押さえて言葉を紡ぐ。泣いたらまた迷惑かけてしまう。

だから2人の前では絶対に泣きたくない。

意地なかもしないね。

2人と別れ、家にフラフラと帰る。

そしたら、誰かが家の近くのところに誰かが蹲っていた。

声をかけようとして肩に触れるごくり、と震えた。何かに怯えてるよ!!。顔を覗くと……あれ? もしかしてこの子は真琴?

「真琴なの? どうしたの?」

その子は顔をパッと上げる。あ。やっぱり真琴。でもいつも顔じゃない。

目は赤くなってるし、涙のあとのようなものが一つ。

私が肩に手を添えると瞳の奥が揺れた。

泣くのを我慢してる? 目は潤んで今にも涙が零れそう。

「真琴、具合悪いの? 道路でこんなことしてたら迷惑になっちゃうから……とりあえず私の家に来る?」

真琴は反応しない。

ほつとけないし、家にいれるしかないよね。一人で泣いてたのかもしれない。

なら、私は傍にいてあげたい。真琴の不安や悲しみを支えてあげたら。力になれたら。真琴を擦りながらエレベーターのボタンを押し、待ってる間ハンカチを差し出す。真琴は震てる手で

握る。エレベーターには人がいないから良かつた……。

家の鍵を開け、真琴を部屋の椅子に座らせて落ち着くよつとお

茶を出す。あ、雨だったから私達、びしょ濡れだった……。

タオル、持つていかなくちゃね。

窓を見るとますます雨が激しい。

真琴のところに戻るとお茶をおいてタオルを渡す。

「悪いよ、こんなの……お茶だつて……」

「いいよ？ 真琴は友達なんだから。気にしないで。ほっとけないもん」

両親は仕事だから。やつひつと真琴はゆっくつお茶を飲んで「おこしこ」と落ち着いたように涙を拭き取る。

「何が……あつたの？」

はつきり聞いたらダメだけど。
でもそうじないと聞けない気がしたの。
隠すつていうのかな。よく分からぬけど。
真琴は黙る。言いくらいのか、言いたくないのか。
言いたくないなら聞いた私が悪い。

「過去のこと思い出した。『あん、私長面するのはよくないからもつ帰るね』

真琴は逃げるよつと玄関に行き靴をはく。あ、真琴つて傘ないよね？ 今、どじやぶりだけど……。

貸したほうがいいはず。雨の中帰つたら風邪をひくからね。傘を見ると私のお気に入りの花柄がモチーフの可愛い傘がある。

クローバー、椿、秋桜、梅などの四季の花がちりばめられていて
華やか。

真琴を引き止め傘を渡そうとすると真琴は暫く傘を見つめ苦笑。

「可愛い傘だけど私には可愛すぎるかな……。透明なのない?
シンプルなの」

「ん。そつか。待ってね……」

傘を見ていくとシンプルが少ない。いや、ない。
……しうがない。透明はないけど全体が青ならある。
これでいいのかな? 真琴に似合ひの色は分からない。
小動物みたいだから……自然色。
その色が似合う。

私の勝手な想像でよく間違えるけど。

「青? わあー。シンプルでいいね!」

嬉しそうに真琴はきやつときやつと笑う。
真琴はパン、と音をさせて傘を開くと雨の道を帰つてくる。
その時の後ろ姿は寂しそうに見えた。

錯覚……かな。

とりあえず私は宿題でもしよう。数学とか苦手なので分かるようになければ。

得意とすれば社会だらうか。いや。それは小学校の話。
社会は難しくなるだけ。得意科目……ないかも知れない。
それはそれでだめだらうなあ。

宿題したらお風呂に入ろう。今入つてもいいけど宿題で手が汚
れてしまつ。

テキストを出してもみると……「うふふ?」

あれ、なんだこれ？ こんなのが知らない……。

計算式？ うーんと…………やめよう。 明日美咲に聞

こう。 美咲、あんなにゆっくりでも賢いからなあ……。

羨ましいなー！

お風呂入ろうと。

私はシャワーを浴びて冷えきった身体を温めそのまま布団に倒れこむように寝転ぶ。

眠い……。 少しなら寝てもいいよね……？ 少し、だけ……。

「んー……。 何か眩しい……」

起き上がって窓を見る。 太陽が出ていた。 私、あれからずつと寝てたんだ……。

太陽の光は眩しい。 思わず目を細める。

「ゴロゴロー！ いつまで寝てるのよ？」

お母さんが朝食を作りながら叫ぶ。

制服に着替え、味噌汁を飲み、ご飯に鰯のふりかけをかけていた

だぐ。

うん。 美味しい。

…………ん？ 待って。 私、日直だった……？

「ご馳走さまー！ 行つてきます！」

小走りで学校に向かう。 隼人、来てるかな？ 仕事してたらど

うしょつ……。

隼人だけにさせるのは酷い。 日誌を書くのは私でいいかな?
男の子って書くの嫌がるしねえ。

「あー。 星野さん、 来た」

隼人がいつもの笑みをして花瓶の水をかえていた。 男の子って
こんなこと嫌がると思ってたけど……違うのかな? それに嫌みな
く似合つてる。 隼人は何をしても似合つから。
カツカツいからかなあ。

「ごめんね。 忘れてた!」

「いいよ。 僕も忘れてたしね」

え! ならなんで……? いるんだろう?
たまたま早く来て思い出したとか?

「朝練だよ。 朝練があつたから早く来れたんだ。 で、 思い出し
たわけださ」

なんだあ……。 朝練かあ。 私とかにはないから分からぬ
どきつと大変なんだろうな。 朝は何時起きなんだろ……。
考えただけでゾッとするよ。

私は教室に鞄を置いて黒板を綺麗にする。 あとは…… 叩きとか
日誌ぐらいかな。

隼人の仕事も手伝いに行こうっと。
さすがに恥ずかしいと思うから。
教室を出ると笑い声が響く。 この声は誰かすぐに分かった。
——柴崎さん。

柴崎さんの笑い声は癖があるから分かる。でも柴崎さんはどうしてこんなに早いの？特に用事もないはず……。笑い声のした方を見ると4組の前。そこには小さなシルエットが一つ。誰のか分かった。朝練。4組。小さい。大西しかいない。

「棗……それはダメでしょ。バカじゃん」

「るひせえなー。仕方ねえじゃん！ならどうすれば良かつたんだよ？」

何の話……？聞きたい。2人が何を話しているのか。気になつて仕方がないの。こんな気持ち、嫌だから。聞いたところはどうにもならないかもしないけど、それでも……。

「うーん。あんまり話したことないんでしょ？なら女友達としてすればよかつたのよ……私じゃダメ？……みたいな冗談を言える関係にね」

「ふうーん。柴崎はそんなふつに言われるのがいいのか？」

柴崎さんは顔を少し紅くさせ、皿を泳がせる。少しだけ手をパタパタと動かし何かを伝えようとしているのは見て明か。

「わ、私は…自分から言つ派…告白は自分が言いたいの！」

「そーか。俺はなかなか言えねえよ。フラれたら最悪だし？」

告白……。私もしたことがなかつた。

ううん、好きな人がいないからする機会もなかつたんだ。好きな人出来たら嬉しい……？

告白したい……？

そんな想い羨ましい。

「星野さん、そんなところでなんで蹲つてているの？」

横を見たら心配そうに私を見る隼人が映る。私は立ち上がり出
来るだけ笑顔を作つて「何でもないよ」と話す。隼人はそれでも
心配のまなざしをやめなくて。言つたことを信じてないな。
そこが隼人の優しさもある。他人を心から心配して。この
人は誰からも好かれる。そう思う。花瓶をそつと窓側に置いて
窓を開ける。空気の入れ替え。

皆が来る前にはやはり綺麗にしておきたいものだ。

「そういうえば美術部つて文化祭何を体育館に飾るの？」

油絵のことかあ。もうすぐ秋だから文化祭には体育館に絵を飾
ることになつているんだよね。私はまだ油絵を完成させてないけ
ど先輩達の絵は上手い。さすが部長さん。
でも何を飾るか教えたらつまらない。
文化祭まで秘密。

「秘密。文化祭で見てほしいから」

隼人はそうだね、と苦く笑う。苦く笑う理由は分からぬけど
私が気にしてたらだめだろう。筆箱を取り出してノートに絵を書
く。スケッチブックがないときはノートに書くようにしている。
それはそれでいけないなあ……。

ノート、すぐに減るし。すると隼人が後ろから覗き込んだ。
びっくりして持つていたシャーペンを落としそうになる。
隼人の整つた顔が近くにあると心臓に悪い。知つててやつてる

なら性質^{たち}が悪い。

「星野さん、頼みがあるんだけど、いいかな？」

「出来ることないうじよ？」

「こいつと笑いノートをとる。
そして自分を人差し指で顔のあたりを指すと「僕を描いてよ」と
言ひ。え……？ どうして？」

「星野さんの絵つて柔らかいね。優しいつて言つのかな」

ノートをペラペラとめくり私が今まで描いた絵をゆっくり見てい
く。褒められた……。優しいなんて言われたの初めて。
未熟だ、とか荒削りつてよく顧問の先生にも言われた。
だからずつとスケッチしてたの。時間があつたらいつでも。
そんな絵を、好きだと黙ってくれる人がいる。もつたいなくて
泣き出しそうになるよ。

「描いてくれますか？」

わざとらしい言葉に思わず笑う。

私の返事を分かつているんだろうね。君は。だからそう言つん
でしょう？ 私も嫌ではないよ。むしろ嬉しい。君を描けるな
んで。勉強にもなるから、ありがとつ。

「油絵が、終わつてからでいい？今は油絵に集中したいから」

「いつもいこよ。油絵、楽しみにしてる」

そうだね。君に喜んでもらえるように良い作品になるよつ、頑張るよ。だから待っててね？君の柔らかな笑顔を描けるまで。

one sided love-6 2人の距離（後書き）

棗との絡みがなくてすいません！

なんだか棗より隼人の方がココロと恋愛関係になりそうですね。
今のお話を展開で例えると起承転結の「起」なんですよ、まだ。
「承」の部分はまだ先……。

ココロと棗の絡みはいつなのか？

それは……まだ先です

one sided lover 7 描くと決めたから（前書き）

蜜柑色更新ですね。 蜜柑色は書いてるといふと口と棗が絡まないような……。

次回かそのまた次回に絡ませる予定です。 7で秋になりましたが冬あたりで蜜柑の意味が少し分かつていただけるかと……。

one sided lover 描くと決めたから

私は隼人と約束してから熱心に油絵に取り組むようになったと思う。自画自賛かもしれないけど前よりはやる気が出たの。綺麗な絵にしたい。隼人が褒めてくれた優しさがある絵に仕上げたい。

「あら～。上衣の部分、綺麗に出来てるよ～。ん……でも少し悲しい絵ね。青が沢山あるからかしら～」

ふわふわの先輩は片手に細筆、もう片手には絵の具を持っているという構図。

先輩、少しだけ表情を曇らせるけどそんな感じも可愛い。やはり、可愛い人は何でも似合ってしまう。先輩の隣に美人さんがいても負けないくらい可愛いけどな。

ちらり、と先輩のエプロンを見る。音符や星が散らばっている可愛いエプロン。

それにくらべて私は黄緑と白のチェック柄。油絵の時は制服が汚れないように、と先生がエプロンを持つてくるようにと言ったので持つてきたのだが……。なんでそんなに可愛いんでしょ？

「ハロちゃん、聞ってるの～？」

先輩がふくつと頬を紅く膨らませ赤風船のようになつている。こんな可愛い仕草、真似出来ない。うん。可愛い人しか似合わないね。すると美人さんがふわふわの先輩の肩を数回叩き呆れたように先輩を見る。

「あのさあ……アイツが呼んでるわよ

ちょい、と人差し指を廊下にてる。

ドアから覗いてる男の人がいた。ああ、前にみた先輩と話してた人。先輩は紅い顔をさらに紅くして油絵の具と細筆を机に静かに置き、恥ずかしそうに、でも嬉しそうにその人の傍に行く。

「お? エプロン似合つてんじゃんか」

「か、からかわないでよ! な、何か用事でもあるんでしょう? さつさと言つて」

先輩は冷たく言い放つ。照れ隠し?

男の人はちえ、と残念そうに背を向け、鞄を背負う。先輩はぎょっとし、慌てて男の人の腕を引っ張り足をとめさせる。

男の人は「何?」とでも言つまうに先輩をじとり、と見る。

「用事は何なのよ? なんで帰るのよ」

「あー。俺ね、お前に逢いに来ただけ。別に用事なんてない。逢いに来るのは、迷惑?」

先輩は男の人の腕を放し、戸惑つているのかな。瞳の奥が揺れている。なんて言おうか迷つてているんですね? 先輩。素直になることは大切ですよ? 意地を張つてたらきっといつか後悔します。

「そんな冗談やめてよ……。私じゃなくてあの娘に逢いに來てるんでしょ! ? あの娘に聞けばいいじゃない! 」

先輩は叫ぶように。すると泣いたのかその場にしゃがみこんで震えた。 美人さんがやれやれ、と先輩に近付く。先輩が言つてる「あの娘」は美人さんのこと。

男の人はため息をついて美人さんをじりり、と睨む。 美人さんも男の人を負けずと怖いくらい睨む。

「てめえ、泣かせんじゃないわよー約束が違うじゃないー！」

「お前こそそいつに何か言つたんじゃねーのー？俺がお前に逢いに来るとか絶対無いしー！」

なんか激しい言い合いに……。 と、とりあえず先輩にも話を聞いてもらわないとダメだよね？ もしかしたら先輩が言つてることは誤解かもしねり！

先輩に近寄り肩を何回かぽんぽんと叩く。 先輩は顔を上げて潤んだ紅い目で私を見る。

「だあーー！誤解すんなよ！俺は好きな女を泣かせたくねえよー！」

その瞬間、美人さんの顔がふつと和らぎ先輩の方へ向けられる。先輩は顔を上げたくない、と訴えるように首をぶんぶん振る。

「はつきり言えばいいんだろー？俺はお前が……好きだ！泣かして悪い！」

先輩はがばっと顔を上げて呆然と男の人を見る。 みると先輩の顔が紅くなるとつられたように男の人も紅くなる。 美人さんは先輩を抱き締めるように包み込み、また男の人を睨む。

「あんたが早く言えばよかったのよ！好きな女の子泣かせて…

…何やつてるの…？」

美人さんが男の人を殴りそうな勢い。

男の人は「う……」と申し訳なさそうに下を向いて頭をぽりぽりと搔く。 美人さんはなんていうか……わいぱりしてゐるな。 千恵と似てる。

先輩はまだ顔が紅くなり、口をぱくぱく動かす。 先輩はほっとかしですかー？

「あの、そのー……わ、私……のーす、好きなのー？」

「そのことについて今から話すわね。いろいろと誤解してるみたいだから」

——「コイツと私は単なる近所で。顔見知り程度。けどいつからかな。コイツに話しかけられたのよ。ふわふわの髪の女の子は誰だつて。紹介してほしいって言うから。それであんたに紹介したのよ。んで、数日後に「好きになつた」て報告してきたから応援するから約束を1つ。「あの娘を傷付けないこと」それが、条件。まあ、よつするに「泣かせるな」ってことね。

それが美人さんが語つたこと。男の人の相談役だつたみたい。先輩と話す機会が出来たのも美人さん繫がりらしい。

「あとはあんたに任せると。上手く伝えなさいよね」

さあ、戻ろう? 美人さんはにこやかに笑つて言つものだから私も2人をちらりと見て美術室に戻る。

大丈夫。あの2人なら。不器用で壊れそうな恋だけど。きっと伝え合えば。気持ちは、繋がるよ。

「ココロちゃん。ありがとう」

美人さんは嬉しそうに言うからなんだねって思う。けど理由は教えてくれない。

誤魔化すように油絵に取り組んで美人さんはあの2人の、幸せそうな絵を描いていた。

暫くすると先輩が戻りまだギクシャクとした歩き方。その途端、上手くいったんだなって分かった。

先輩はさつさつと油絵を片付けスケッチブックを取り出す。

「約束、したの。油絵が終わったら……描いてあげるって」

描くつて決めたから。そう言う先輩は幸せそうで。羨ましい。それにその約束は隼人と私の約束にそつくり。先輩は、あの人を好きになつて後悔はありませんか？

その問い合わせはもう分かつたような気がする。だつてあんなに幸せそうな人が後悔なんてしない。

きつと笑つて、ないよ、と言つだらう。

私は窓をじっと眺める。外では男バスがいた。その中から隼人を見つけることが出来た。ゼッケンと後ろ姿で。けどアイツがいない。元気で、少しやんちゃで、隼人のライバルのアイツがーー。

「棗ー！こつちだ！」

誰かが叫ぶ。すると真っ直ぐにボールが叫んだ人の元へ。この投げ方は見覚えがある。遠い日の、アイツの投げ方。くるりと違う方へ目を向けるとアイツが。それを見て少し頬が緩んだ。君を、描きたくなりました。

君の彩はどんな彩ですか？

あるとしたら。

元気な君には太陽色ですか？ 少し優しい君には自然色？
でも一番似合うのは……。 苦い色が混ざった、あの色。

「口口口ちゃん。油絵終わったのかなー？」

先輩が私の絵を覗く。 すると、うん、と笑いながら満足そうにする。 理由が分からずにいると「口口口ちゃんらしさが出てる」と言つ。 それは褒め言葉なんですか？

なんかすつぐダメだしされてるよつな……。

「嫌味じやないよ～？ あのね、口口口ちゃんみたいに優しい絵だなあ、つて思つてね」

それは隼人と同じ。 どうして優しいと思うの？ 私は全然優しくないのに……。

臆病で周りの人を振り回す、そんな性格なのに！ 勿体ないよ、
私にそんな優しい言葉。 先輩の方が優しいです。

「口口口ちゃん……。 つまらないこと考えていたら怒るからね

？」

「つまらない」と……。 そののかもしね。 今氣にしていい
たつてダメ。

油絵に集中しなくちゃ。 そして隼人に喜んでもらえるような絵
にするんだから。

今はそれ以外のことを考へない。

「あ。 いの絵は……。 ありがとう」

先輩は美人さんの絵を見て一瞬となる。

美人さんは面白いのかそれとも別の理由なのか、微笑みながら返事を返す。

美人さんに何か言われたのか先輩は顔を固ませ目に涙を浮かべる。先輩の顔、忙しいな。今日はころころ変わって。

先輩が他の人の絵を見に行くと美人さんは私に教えた。なんて言ったのかを。

「私をふつてあんたを選んだアイツと別れるとか言わないでよね。もしそうなつたら私、奪いにいくわよ？」

それは美人さんもあの男の人が好きだつたということ。告白したけど男の人は美人さんじゃなく、先輩を選んだということになる。でも、美人さんは先輩と男の人を心から応援してた。応援するだけで辛いと思うよ？ 私には……よく分からぬけれど。

「最初はね、くつつかなければいいって思つたわ。でもどうしてかな。応援したくなつたのよね。いつまでも友達のままの2人にイライラしてたかもしれないわね」

笑いながら話す美人さんは遠い日のことを思い出すように、振り返るように話す。美人さんはもう吹つ切れているんですね。態度からしてもう男の人は「前の好きな人」になつている。今は「友達」の関係なんだろう。

美人さんはため息をついて少し嬉しそうに笑つた。

「でもこれで終わつたわけじゃないわよ？あの2人だもの。喧嘩も沢山するわ、きつと。そうしたら絶対あの男は私に泣き付いてくるのよ。相談役は、まだまだ続くわね」

面倒よ、と美人さんは言うが言葉と違ひ顔は嬉しそう。それは

どうしてなのかな。

相談役はそんなに楽しいの?

美人さんはくすりと笑い「2人を応援してるって感じられるの」と言いキャンバスに色を塗り始める。

「さあ、完成させるわよ。あの2人の絵を描くつて決めたんだから」

幸せそうな2人を描くとね、吹っ切れたんだって思えそうよ。
そう言って美人さんはまた柔らかく笑った。私も自分のキャンバスに戻つて色を塗る。秋の風に秋の蒼空。絵を描き始めてから自然の微かな変化も気になり始めた。

絵に影響するの、と風景画を描いていた誰かが呟いた言葉。

風景画を描いたことがないから分からなければ風や蒼空に変化があると風景画を描いていた人は消しゴムを持って蒼空を消す。
それほど気になるみたい。絵を描くと先輩達が言った言葉を思い出す。私は風景画じゃなくて果物や花、瓶だけど。
でも次の油絵を描くとしたら私はきっと人を描くだろ?。
美人さんのように幸せそうな絵を描くな。

「アイツ、なのかなあ……」

不意に大西が浮かんで呟いた。描きたいけど。もう一人ほしい。
隼人とか? それとも……。

「そこ、サボらない!」

注意されたので色をぐりぐりと塗る。
文化祭まであと少し。何回言い聞かせるんだろうね?

今は油絵に集中するんだからーー。

one sided lover 7 描くと決めたから（後書き）

先輩みたいに好きな人の前じゃ素直になれない人はいますよね。
照れ隠しとか。

ついつい思つていることと逆のことを言つてしまつ。よくありますね。

だからこそ口々口のように素直で無邪気な女の子が書きたくなる
んです。こんな娘がいるんですよって。

冬は書きたい話が沢山あります。
隼人や棗の友情も書きたいですし。
ココロと棗も増やしたい……。一応冬は大きく動きだします。

先輩が好きな人と結ばれてから数日経つてすぐに文化祭に。私はなんとか油絵を終わらせて体育館に飾られてある自分の絵を見ると恥ずかしい。

隼人も見てくれるかな。ドキドキした中で文化祭は始まる。最初は吹奏楽部の演奏。知ってる曲から知らない曲まで。凄いなあ！私は吹ききつとあんなに覚えられないよ……。

吹奏楽部の部員は動きながらふくので大変だらうな。

でも、みんな喜んでいるから良かつた。

私が心配するのも変だけど。演奏が終わると拍手が大きい。それだけ凄かつたからなあ。

吹奏楽部がいなくなると私は隼人と感想を言い合つ。

「凄かつたねー。隼人はどれが一番良かつた？」

「一番最初の曲かな。やっぱり最初だから曲が賑やかで良かつたと思うよ」

隼人の感想を聞くと後ろにいる真琴にも感想を聞く。文化祭の時も出席番号順に座るので隼人と真琴は近い。だから話せるので嬉しいな。

「あ、1組の始まつたよ！」

舞台の方を見ると確かにライトがあたつていたので口を閉じる。台詞は聞こえないところもあるけれどだいたい場面が変わると同時に展開が分かっていく。

「私は……あなたを、……好きが分かりません……」

舞台上に立つてこむ女の子の台詞がはっきり聞こえて耳に残る。今私の気持ちのようで。女の子は泣きながら去つて行くといつ場面だつたけど女の子の役は涙を流していなく、顔を隠しながら裏舞台へ消えていく。中学生で役で泣くのは難しいもん。演技を上手く出来なくて当然だよね？ 演技で思つたけど大西は出来るのかな。そもそも役をやつているのかな。きっとしてないんだろうな。してたらそれはびっくりするけど……。舞台を見るとまた女の子が出てきていた。

「好きが分かりませんがあなたに逢うと嬉しくて。話すだけでも楽しくて。この気持ちは何か分からないんです。……あなたは、こんな想いを抱く私をどう思こます？」

「別にどうも思いません。ただはつきりしているのは僕は君を好きなのです。僕に振り向いてくれるまで諦めるつもりはありませんよ」

逢うと嬉しい、話すと楽しい……。

それは大西にこつも思つこと。逢うと嬉しくなるし、時々話しただけで楽しくなつちやう。この想いは分かる気がして分からぬの。これが恋なのかな、って思つたり。でも否定してる、心の中で。これが恋なら楽しいだらう。今まで以上に大西を意識するだらうな。恋と認めたら。でも認めたら自分らしくなくなるかもしれない。それがこわくて認められないよ……。

「私ね。あなたが他の女性といふと心がモヤモヤしてイライラするの。あなたが他の女性を見ていても。違う女性の話を私にされても。胸が苦しいの。どうすればいいんでしょうか……」

同じ想い。大西が柴崎さんといふとイライラして。他の女の子といふと苦しくなる。どうすればいいのかな……。こんな想い消えたらしいのに。そういうえばイライラしたり苦しくなったり……大西に振り回されることもないのに。

「僕が治しますよ。だから僕と一緒にいてくれませんか？」

「ふふつ。嬉しいです。そうですね。あなたといふのも良さうです」

恋が全て上手いくなんて思わない。辛いこと、嬉しいこと、悲しいこと……。

きっと嬉しいことも多くて。悲しいことも多いのかかもしれないね。でもきっと恋をしたら何かを得られるよね？　きっとなにか得られるよ。そう思つたら恋をするのもいいかも知れないな。でも今の私じゃ不安もあるから……少し時間がかかりそうかな。何が不安かよく分からぬけどね、何か変わるような気がして。

「星野さんー？」　　具合悪いの？」

隣を見たら心配そうにする隼人がいた。

いろいろ考えていたせいか劇は進んでいて今は3組の終わりぐらい？

「だ、大丈夫！　考え方があつただけで……。心配しなくていいよ？」

「そつか……。星野さんって身体弱そうに見えるから。ほつとけないんだよ」

ま、まずい……。今、きっと顔が赤い。『ほつとけない』なんて言われたら……。隼人は分かつて言つてるの？

隼人の方は見れなくて心を落ち着かせる為に深呼吸をしてみる。少し落ち着いたような気もして、緊張も和らいだ。

「はい。半分のクラスの発表が終わつたので少し休憩にしたいと思います。後ろには美術部の絵が飾られているので見て下さいね」先生がマイクで言うと元々高い声がさらに高い。

隼人は席を離れて後ろに行き、美術部の作品を見ていく。約束したから見てくれるのかな。

で、でも……じっくり見られるのも改めて恥ずかしい……。

真琴を見ると後ろで作品を見てるし……。

そ、そういうえば先輩や美人さんの絵はどんなのだろう。

後ろに行くとみんなの絵があった。

美人さんは先輩と男の人と一緒にいる絵。

先輩のは青い澄んだ蒼空そらに何かが浮かんでいる不思議な絵。

恥ずかしいけど自分のも改めて見た。

ビンに黄色い花に花瓶に葡萄ぶどうがあるシンプルな絵。よく見ると荒削りだと思う……。色はゴチャゴチャしてるし、物も立体的じやくてきじゃない。

私の絵つてまだまだ未熟みじゅくだなつてよく分かるくらいに。

「星野さんの絵、それだよね。前と同じ、優しいよ

「そうかなあ？　未熟すぎて飾るのが恥ずかしいよ。でも、隼人は優しいね。ありがとう。もっと上手くなるように頑張るよ！」

隼人は一瞬固まると顔を片手で隠しながらどこかに行く。

あ、あれ？ ビうじたんだわ？ 変なことでも言つたかな！？

「ハハロー！」

後ろに抱き付かれるような感覚があり、後ろを見ると千恵が抱き付いてた。

美咲はのんびりと絵を見てる。

「ハハロって隣席の男の子と仲いいね……。羨ましいな～」

千恵は隼人のことになると寂しそうにするなあ。

隼人がどうかしたのかな？

千恵はそつと離れると作り笑いを浮かべて真琴と何やら盛り上がる。

「この2人は仲良くなれるよね。性格が少し似てる気がするよ。

「席について下さい！」

体育館に凄く響く。マイクで喋らなくても聞こえるんじゃないかなあ。美咲と千恵は4組の列に急いで戻る。次は4組か……。大西は……どうしているんだろう……。

「ハハロ。大西ね、役してるみたいだよ

真琴が席についていたずらつぽく笑う。

いつも思うけど私って分かりやすいのかな？

それとも顔でてるのかな。舞台を見ると背の低い男の子が立っている。少しきせのある髪に細いのに筋肉がついてる体。大西だってすぐに分かった。服というか衣装というか……。私服っぽい。

でも演技は個性が出るらしいから大西らしさがよくでてる。ギクシャクした歩き方。苦い表情。なんだか可愛いしくて目が離せない。男子に『可愛い』なんてダメだけど……。

少ししたら大西が舞台にいなくなる。ビリやで終わつたみたい。もう少し見ていたかつたな……。

「うわあ～。4組、面白かつたね」

「え？ ああ、うん。面白かつた、ね？」

しつかり見ていなかつたから面白いか分からない。大西が可愛いかつたなら頷いて「そうだね」と言えるのだけど

「ああ～。口口口のことだから大西しか見てないんでしょ？」

「な！？ そ、そんなことは……」

否定は出来ない……。

だつて大西のこと本当に見ていたから……。
で、でも、認めるのも嫌だ。真琴に絶対にからかわれる。
いや、真琴だけじゃなく千恵や美咲にも。
だから少しの間、秘密にしておこう。この胸の熱い想いは。

「次は6組だね……。あー。緊張する……」

真琴は衣装に着替えながら裏舞台に行く。私は背景係で背景を塗るだけだったから別に緊張はしないけど、真琴は役をしてるから緊張もするもんね……。裏方は裏舞台で見るだけだから。うん。劇が始まると真琴はすぐに舞台に立つ。裏舞台でそれを座りながら見る。

「星野さん。」こんなところにいたんだね

「え。隼人？　あ。そうか。隼人はナレーターだよね？」

隼人の手にはマイクが握られている。おまけに片手には台本がある。ナレーターは台本見れるから楽、なんだよね？

「星野さん……。あのわ……」

「へ？　どうかしたの？」

暗くてよく見えないけど何か言おうとして言いつていいのか迷つている様子に見える。言いにくいのかな。

「僕……星野さんがーー」

「おい！　隼人！　ナレーターの台詞だぞ！」

隼人の言葉はかき消されてよく聞こえなかつたな。『僕は』までしか。小さい声だったから。大きな声でもだめかもしねいけど。

「あ……。ごめん！」

隼人は謝ると台本を見ながらマイクを顔に向けて声を出す。

それから少しして6組も終わると先生の話や後片付けをして、教室に戻つて給食。

隼人と話しながら給食を食べるとなんだかドキドキした。意識しちゃつた……。裏舞台の暗い時に隼人の顔を見たらすごく男らしくて。男前がさらに男前になつたような。心臓に悪いです。本当に……。

one sided love-8 文化祭（後書き）

次回は29日更新です。順番に更新していくと思っています。
29日に更新したら次は28日に更新。一年生の時の秋は次回で終了です。

「口と棲みやつと絡みます。
隼人は出ません。
美咲と千恵がたくさん出るので友情要素が盛りだくさんのような
感じです。

部活は今日、あるかなあ……。文化祭が終わつたばかりだからな
いかもしれない。

先輩にも逢いたいし……。とりあえず美術室に行つてみようかな。
言いたいことも沢山ある。

美人さんにも「上手かつたです」と言いたい。早く、逢つて言
たい。

「ハロウちゃん? ビーチしたの? 部活ないよ?」

「せ、先輩!」

ふわふわの髪をいつも結つていてるのに今日せまねじっていた。肩
につくつかないかぐらこの髪の長さ。結つてもつぶし長いと
思つていた。

「先輩は髪をおろしたんですね。似合つてます」

「あ、ありがとうございます。ハロウちゃん、本気で愛しています!」

ぎゅっと抱き付かれる。せき込むと腕の力を緩め
てくれた。

それでも手をほどこうとした。

先輩の様子がおかしいから不安になる。

「本当にハロウちゃんが大好き……。妹が出来たみたいで……。
いらっしゃられるのも今までだね……」

震えてる手。泣きやうなほどに弱々しい声。

先輩は……何を言つてるの……？ 今までつて最後つてことへ、どうして……そんなことを言つて……？

「私も……もつすぐ受験だから。三年生はもつ引退なんだよ。運動部の方がはやく引退するけど……。文化系も今日で引退。今までありがとうございました。」口ひかりんも頑張つて、

先輩と逢えなくな……？ あんなに沢山喋つて沢山恋愛について教えてもらつて……。話したいことがあるのに、言いたい言葉は出ない。頭が白い絵の具に塗りつぶされたように真っ白。先まで先輩の顔が見れたのに今は先輩の顔がよく見えない。滲んでいく……。

「もひ……。そんな顔しないで。まつたく逢えないわけじゃないから。学校ですれ違うかもしれないし……。卒業したら遊びに来るから……。だから、その……」

先輩が励ましてくれているのは分かる。

でも先輩だつて……泣きそうな顔、しますよ……？

先輩にお礼を言いたいのに出てこない。「ありがとうございます」とこいつ言葉。

でも……言わなくちゃいけない。声が震えていたつて泣きやうになつたとしても。

先輩に感謝しますから。感謝の言葉くらい伝えなきや……。

「先輩……。ありがとうございます。私も、先輩のことが大好きです」

声が震えて情けないな……。顔はきっと涙のあとがあるだらう。

先輩はにつこつと笑うと耳に顔を近付ける。な、なんだろ？
何か言つのかな……？

「ハハロちやんの恋も……叶うといいね」

……え？ 恋なんてしてませんよ？

先輩はうつすらと笑うと彼氏さんと一緒に帰つていった。泣いたばかりなのにまた涙があふれていく。逢えないわけじゃない。話せないわけじゃない。

けど……先輩の恋を見てから少し羨ましくなったのに。

「ハハ……。先輩……」

その場にしゃがんで声を出さないように我慢する。幸い人がいいので人目を気にすることもない。

「…………何してんの？ 目立ちますよー」

…………氣のせいだらうか。誰かさんの声が頭上から聞こえた。声は知ってる人。

まさか……アイツ？

でもこんなところにいるはずがないよね。とつぶに帰つているはず。

「聞いてんの？ 星野ハハロ」

「な！ ふ、フルネームで！ 大西 栄！」

顔を上げると大西が私をじっと見ていた。大西はなんでここにいるの…？ 美術室に用事なんかないはずなのに。迷つた……とか

ないよね。うん。

「お前だつてフルネームじゃねえか。……それよりこんな廊下で泣かれたら迷惑ですけど?」

「泣いてなんかない!……どこが泣いてるの!?」

ムツとして言い返す。泣いてはいたけど……大西が来たからすっかり涙がなくなつたよ。

「ふうん。泣いてないならいいけど。お前はいつも笑つとけ!
笑うかどには福来たりだぞ?」

心配……してくれてるの?

大西は口は悪いし意地悪だし……。
でも、いざという時優しいんだよね……。小学生の時、アレルギーで目が赤くなつたら心配してくれた。優しいから大西は人気があるんだなあ。

「あ、ありがと!」

「それになあ。こんなんで落ち込んでたらこの先やばいぞ。引退なんて気にしたらダメだ。俺らなんて……もうとっくに先輩はいないんだから」

大西は顔を少し歪める。あ……。悲しくないわけないんだ。
私が落ち込んでいるから慰めてくれたんだね……。ごめんね、大西。元気を出さなくちゃいけない。
いつまでもうじうじしてられない!

「あー。星野。お前、隼人と……その、あの——」

「棗——」

階段から柴崎さんが下りて来て大西の腕をとる。

大西は言いかけていた言葉をやめると柴崎さんに顔を向けた。困つているような迷惑そうな……なんともいえない顔。

「棗ー。こんなところにいたんだー。4組にいなかつたから焦つたわよ」

「しば、柴崎……。悪いけど先に行つといってくれない？ 星野と話したいんだ」

柴崎さんは私を睨み付けて大西の腕を引っ張る。え……。大西と柴崎さんの距離が近い……。

大西は柴崎さんをじっと見ているし、柴崎さんは私を睨んでいる。イライラする……。田の前でそんなことしなくてもいいのに……。

「何言つてるのよ棗ー。 部活まで時間ないのよー。 話なら私が聞いてあげる！」

大西は私を見たが目で「助けてくれ」と言つているのは氣のせい？ 柴崎さんと仲がいいんだから柴崎さんに聞いてもらつたらいいと思つ。

わざわざ私に話す必要なんてないと思つし。

「じゃあね。星野さん」

柴崎さんに腕をとられながら大西は歩いて行つた。胸の奥が棘に

刺されたように痛い。苦くて酸っぱい、蜜柑のような想いが広がる。
最近、こんな想いが多い。

柴崎さんと大西が一緒にいると蜜柑のような想いになる。気にしてもしようがないか……。

でも、なんだか歩きたくない。美術室の前にしばらくよ。

「ハハロ。どうにいたの~？」

美咲が階段から下りて私の前に立ち、すっと手を握られた。
美咲がなぜここにいるんだろう。

千恵はいないのかな。先に帰ったとか？

「どうして……そんな顔してるの~？」

美咲が小さな鏡を鞄から出して私に渡す。鏡で自分の顔を見ると泣き出しそうな顔……。悲しいことなんてないのに。
どうしてこんな顔してるの……？

「……。大西だね~？ 大西も女の子泣かせなんだから~」

美咲……。冗談はきついです……。

大西じゃないよ。

大西のことでなんで泣かなくちゃいけないの？

「こんな時は千恵だよね~。千恵になら話せる~？」呼んで

くるよ~」

千恵……。大切な友達。

なんでも言える、なんでも話せる友達。本気で泣いて笑ってくれる親友……。

「いた！ 二人とも…………え？ ハハロ、どうしたのー？」

「千恵、ハハロと話して。私はそのへんうわづらじてるから」

「

美咲は鞄を背負つと離れていく。

千恵はそれを見たあとに私の隣にゆっくり座る。

そつと髪を撫でてくれた。指先から千恵の優しさがあふれてる。

「…………ハハロ。言いたくないなら言わなくていいけど、いつから涙が出たの？」

「お、大西が……柴崎さんと一緒に部活に行つて……せつかく大西と、話せたのに……また、話せなくなる。そしたら……涙が出てよ」

千恵はハンカチを差し出してくれた。涙をふきとり、落ち着かせるために深呼吸を繰り返した。

千恵に話したら楽になつた。心が軽くなつたのかな……。

「悔しかつたんだよ、きっと。大西を独占してるので子が羨ましかつたのかな」

そう、なのかな？ 確かにもやもやしたけど……。
どうして柴崎さんが、つて思つたけど……。独占されたから？
大切なものを？
大西を？

「混乱してるならいいの。まだ気付かないのなら仕方ないけど、認めるのも勇氣だからね」

何、を？ 気付かないのは何に気付いてないの？ 認めるつて何を？

千恵がいいたいことは「恋」のこと？ 大西が好きかもしないって思つたことはあるけど……。時々、胸の奥で何かが叫びそうなほど想いがあるのは知つてるよ。だけど、それが恋なのかは分からぬ。それが今のは気持ち。

「帰るよ。部活がないんだからはやく帰りたいんだから」

その時の千恵の顔は切なげで悲しげな顔だった。

どうしてそんな悲しげなの？

千恵の方が辛いんじゃないの？

今の私には聞く勇氣すらなかつた。

美咲は階段に座つていた。待つてゐる間、宿題をしていたらしい。

「帰るの～？ もつ少し時間かかると思つていたのにな～」

残念そうに宿題をしまつ。鞄を背負い、立ち上がる。

千恵は美咲を見てため息をつく。

どうしたんだろう？ 美咲、変なことしてないと思つけど。

「美咲……。あんたはいつものんびり屋さんよね？」 テキパキしてゐる人を見習つといいんじゃない？」

「むう～！ のんびりかもしれないけど、これがちょうどいいんだもん～！」 テキパキすぎてもダメだと思つけどな～」

「Jの2人のやりとりが面白くて好き。ずっと変わらないやりとり。次はどんなやりとりをするのかな。握っている鞄をもちながら千恵に笑いかけた。

「千恵と美咲のやりとり好きだ。いつまでも見てたいな」

千恵は少し顔が固まった。肩も小さくはねた。聞いたらやいけないことを聞いたかな……？

「そう、だね……」

千恵の様子がおかしい。今のは言っちゃだめだったかな……。聞きたいけど、聞けなかつた。

美咲は千恵の変化に気付いてないらしく、呑氣にしている。気にしてもどうもならないし、考へても仕方ないよね。気付いてないふりをしておこう。

「うわあ……。今日、風が冷たいよ~」

美咲が「ブレザー着ればよかつた」と言つたが、そんなに寒いかな？ 普通だと思うけど……。

「美咲は寒がりね。ブレザーは冬に着るもの。今着たら暑いに決まってる」

「む~！ 千恵、おかしい~！ 寒くないなんて~！ ねえ、口口口、寒いよね~？」

なんて言えばいいんだろう？

寒いか寒くないかと聞かれたら微

妙。冷たい風じゃなくて、微風のよう。

「寒くないかな。むしろ微風?」

「え~! ? ハハハまでひどいよ~」

美咲はふくつと頬を膨らませて私を睨み付けるように見る。

美咲は私より身長が低いから睨み付けられても可愛い。睨んでな
いように見えるのだ。

「美咲はいいよねえ。身長低いし可愛いし」

「千恵が高いの~! ハハハだって低いし可愛いよ~!」

千恵がこつんと美咲をたたく。本当に2人のやりとりを見ると元
気になれる。

ずっと、見てみたいと思つんだ。

今回はどうだったでしょうか？

棗の慰め、柴崎さんの行動。慰めはやつてほしくない時とかありますが、好きな人ならどんな言葉でも嬉しいですよね。

o n e s i s s e d l o v e - 1 0 冬の訪れ（前書き）

ついに冬です！ 冬は切なさがありますよね。冬の海は特に。イ
メージカラーでいうと水色っぽいです。

冬は、苦手。寒いものもあるけど、なんとなく……切ない季節だから。

千恵が帰り道の時に言つた。冬が苦手とか言つたのを初めて聞いたので驚かずにはいられなかつた。

千恵は雨が嫌いなら聞いたことはある。雨の時、すこく嫌そうな表情をしてるから。雨は、気分がのらないのは分かる。晴れが好きだけど、晴れすぎても暑いから、曇りがちょうどいい。

「うー。寒いなあ……。はやく春にならないかな……」

「春かあ。春になれば中2になるね。後輩、出来るかな」

千恵は年下が好き。弟のようで可愛くみえるらしい。

私には弟や妹がないので年下と関わる機会なんてない。小学校の時は、交流会とかなんとかで、3歳年下の子と遊んだ。

でも、私と遊んだ子は元気いっぱいの男の子で、あちこち走り回るので、捕まえるのに時間がかかつた。田をはなすといなくなるので手を繋いでいたっけ……。

あの時は、走ることに必死だったから、可愛いなんて思う余裕なんてなかつた。弟がいたら、こんなことをしてたかな、と思つただけで。後輩がくるなら、女の子なのかな。美術部つて男の子いないから。

「口口口！　なに考えていたの？　私の話も聞いてほしかつたな」

「え、あ、『じめん。年下の子つてどんなかなつて』

千恵はしづらへ田を空中に彷徨わせてい、ぼんやりした。年下のことは、いつも楽しそうに話すの。

「弟は可愛い。大きくなつたらぜんぜん可愛くなじけどね。後輩が出来たとしても、それほど小さくないから、可愛いと思わない」と私は思うな」

「千恵は弟、2人いるもんね。後輩の相手とか得意そりだから、よろしくね」

そう言つたら、千恵はうつむく。

また、だ……。最近の千恵はこれからのこと話をすると元気がなくなる。

まるで、自分がいなくななるよつと。元気がなくなるのは、千恵がいなくなるから?

そんなこと、考えさせない。

「千恵がぼーっとしてどうあるのー、元気じゃなきや、笑えないよ」

私に出来る励ましなんて、こんなこと。精一杯考えても、綺麗な慰めなんて考えられないから。

千恵はしつづめていたが、にっこり笑つとまたいつものように、喋り出した。

「そうだね。笑えないね。先のことを気にしたりして、どうしようもないし。今を楽しまなきゃー！」

いつもの千恵。お姉さんのように大人びていて、優しい……。
たとえ、千恵がいなくなつても、繋がることは出来るから。樂しい思い出を、今だけでも……つくれり。

「じゃあ、また明日」

私の家に着くと、千恵は手を振りながら帰つていいく。後ろ姿をずっと見ていたが、寒くて立つていられないので、家にそそぐと入つた。家には兄がパソコンをいじりながら宿題をしていた。パソコンに夢中で私に気付いてないのだろう。

私は部屋に入つて私服に着替えた。制服つて動きにくい。ブレザーは着ていたら身体が重く感じる。

「ハハロ。今日は早かつたのね」

「ん……。お母さん? 買い物してたの?」

玄関から顔を覗かせる母。父はまだ帰つてきていない。

いつも夜中に帰つてくるけど。母も夕方の6時から仕事に向かう。6時になるまで買い物やら掃除やら洗濯やら……。皿洗いは私が担当。母がここまで頑張つているのだから、せめて水仕事はやってあげたい。

「今日は部活ないからね。今日の『飯なにー?』

「ん? 今日はね、ひじきに唐揚げに野菜の炒め物に、魚の煮付けよ。栄養、バツチリね」

うわあ……。兄ちゃんが好きなものばかり。ひじきは私とお父さんが好きだけど、魚は私以外みんな好き。魚の煮付けは苦手。揚げ

物なら好きなんだけどなあ……。

「 ハハロは野菜も食べなさいね。身長伸びないわよ」

「 ……小学生に間違えられたからって。童顔だと言いたいの?」

身長もあるだらうけど、顔が幼ことよく言われる。小学生に間違えられても文句は言えない、と。

よく間違えられるけど……そんなに言わなくともここのこな。身長が伸びないので親の遺伝かもしれないし。

私はお母さんを部屋から出すと椅子にもたれた。今日は……疲れた。部活もないんだけどな……。ひとつひとつの田を瞑る。いい夢、見られますよ!」。

「 ……あて、早く。早く、起きなさい……」

誰がいるの? 耳の近くで聞こえる細い声。厳しめの令子だ。おしゃめな声は……こつも聞こてる声だ。眠い……。もう少し寝たい。

「 千恵ちゃん、来てるわよ。待たせるつもりなの?」

「 お、母さん……? もつ朝、なの?」

くしゃくしゃの髪を撫でながら聞いたり、呆れたように見られた。時計を私に見せぶりにして、田原まし時計をたたかれた。時計を

見ると……完璧に遅刻。用意は急がなくちやー。

「早く着替えて髪を整えなさい。時間がないし、千恵ちゃんも待ってるから、早くしなさいね」

私は洗面所へ向かい、洗顔してから歯を磨く。制服を着て、ボサボサの髪をくしで梳かして鞄を持ち上げる。朝ご飯を食べてるひま、ないよね。

千恵を待たせてるんだもん。待たせたくない。

「ハハロ！　遅いー。相変わらずなんだから」

「『めん！　寝坊しちゃって……。これでも急いだ方なんだよ』

千恵はくすくす笑いおえると、私の頭をみてまた微笑した。髪の毛がどうかしたのかなあ……？　急いでやつたからまだはねてるかな？

「ハハロ、髪がはねてる。動かないでね、なおしてみるから」

千恵は手櫛でおしてくれたが、髪の毛先だけはねたまま。癖毛だから諦めではいるんだけど、もうちょっとストレートにしてみたいとは思つ。みんな、さらさらしてストレートで羨ましいもん。

「ハハロ、最近太った？」

「ええー？　うわわ……。ダイエットしようかな……」

確かに最近、肉がついたかなっては感じてたけどー。

やつぱり太つてたんだ……。揚げ物ばかり食べてるからかな……。
太つた姿なんて、見せられないよ！

「冗談だよ、冗談。口々口が体重氣にするなんてね。前は全然
氣にしなかったのに。大西を好きになつてから変わったよねえ」

「違うー！　年頃だから氣になつただけで……。大西はまつ
たく関係ありません！」

千恵のばか……。

そんなこと言つたらまた意識しちゃうじゃんか！
私の考へていることを知つていて言つてるの？　わざとなの？

「口々口……。もう認めてもいいんじゃない？　いつまで、
認めないつもり？　みんな、辛くても頑張ってる。逃げるの？」

違う。否定したい。

でもそう出来ないのは、心のどこかで認めてるから。
私が恋を認めないのは、辛くて傷付くのがこわいだけかもしね
い。こわい、辛くなることが。変わつてしまつ……変化することが。
私だけ、美咲や千恵みたいに恋話したい。惚気話だつてしてみ
たいんだ。

でも……」わくて出来ない。矛盾、といえばそうなのかもしぬな
い。

「認めるのだつて勇氣だからね。私は全力で口々口を応援する

「うん……。ありがとう、千恵。頑張るから」

認めるね、と言いたいけど私にはまだ勇氣が足りないから。時間

を下さい。頑張つてこの想いを育てるよ。

だから、それまであたためさせて。初恋は、人生で一度しかない。初めての想いを、大切に、壊さないようにしてみたいから。

「星野さん、おはよう」

隼人が席について挨拶をしてくれた。

隼人とは仲が良かつたけど、文化祭をきっかけに距離が近くなつた。女子たち……隼人ファンは私に目を光らせるけど、隼人とは友達なんだもん。何の進歩もしないし、下がるわけでもない。

第一、隼人から話しかけてくるので、私は遠慮しなくてもいいと思つんだけど……。

「おはよう。そうだ！　あのね、隼人……。文化祭の前の約束、覚えてる？」

「ああ……。僕を描いてくれるんだよね？　今、描いてくれるの？」

いたずらっぽく笑つた隼人はかわいらしい。普段、にっこり笑うと爽やかな笑顔で、女子たちが騒いでいる。いたずらっぽく笑う姿は、女子の前では見せない。

私が見れてるんだ、と思うとなんだか嬉しいような。

「隼人がいいなら……。文化祭が終わつたから、暇になつちゃつた」

「そつかあ……。そつだなあ。僕も部活暇になつてきたしなあ。今日、顧問の先生が出張なんで休みだから……。放課後、教室で待つてくれない？」

「いいよ。

そう返事をしたら、隼人は嬉しそうに笑つた。

隼人の笑顔つてなんていうか……キュンとする？　キュンつて漫画みたい。

私も部活はない日だから、帰つても暇だし。休み時間に美咲と千恵に言つておかなくちゃ。今日は先に帰つててね、と。

五時間目が終わつて、すぐに教室を出て4組に向かう。4組に行く時つて、なんとなく緊張する。普段、4組行つてないからかな……。

「ココロ～？　逢いに来てくれたの～？」

「あ、美咲！　ごめん、今日先に帰つてて！　私、用事あるから！」

美咲は嫌な表情をなにひとつしなくて、きょとんとした表情で、分かつたよ、と頷いた。何も聞こじしないので、よかつた……。

「じゃあ、先に帰つてるけどね～、用事つて槇野くんでしょ～？　千恵に言つたらヤキモチやくなえ～」

「ええ!? 知つてたんだ……。千恵がヤキモチ? まさかあ~」

千恵のヤキモチねえ……。

隼人と関係あるのかな?

隼人の話をすると千恵は、いつも寂しそうに笑うから。知り合いには見えない……というか一人が話してるとこうなんて見たことない。

私は美咲に手を振りながら教室に戻り、放課後を待遠しく感じていた。

o n e s i s d e d l o v e - 1 0 冬の訪れ（後書き）

約束までなんとか書けました。冬は運動部、辛そうだなあ……。
夏も辛いと思つんですけど、運動するなら秋ですね。

やつとここまで書けました。のんびりなのか、早いのかは分かりませんが、□□口の認めないシーンは意外に苦労します。好きじゃないつて想定、上手く書いてみたかったんですね。

授業終了を知らせるチャイムがやけに大きく響いた。今日の授業は……これでお終いかあ。疲れたあ……。

「今日はここまで。次の授業までにちゃんと予習をしてくるように」

社会の先生が教科書を閉じると、クラスのみんなも同じように片付け始める。

私も片付けようと教科書や地図帳を机に押し込む。中から出たのは、大きめなスケッチブック。あ……。そつか。

隼人を描くつて約束したんだつけ。すっかり忘れてた。楽しみにしてたんだけど、社会の授業で眠たくて……。あくびなんでしたら絶対に怒られるから睡魔との闘いだった。授業内容は全く聞いてなかつた。

「星野さん。眠いのに頑張ったね」

「ふああ……？ 隼人？」

どうして知ってるのかな……。

私つて分かりやすいのかなあ？

隼人が鋭いとか、そんなのじゃないのかな。

「星野さん、授業中に頭がゆらゆら揺れてたから……。うとうとしてたし」

「んんー。社会つて苦手で……。頭に入らなくて

少し前まで頑張つて聞いていたんだけど、そのうち分からなくなつて……。言い訳にしか聞こえないよね、これじゃあ。

「星野さん。」のあと、大丈夫?」

「全然大丈夫!　掃除して、挨拶が終わつたら描くから!」

隼人を描けるといつことに眠氣は吹つ飛ぶ。本当に楽しみで仕方ない。

私は掃除場所に向かう。廊下なので少し冷えるが、ひんやりとした空氣にほんのりと心地良さを感じる。ほうきを持ってゴミを掃いていると、柴崎さんと大西が仲良さそうに話しているのが目に入つた。もやもやする……。痛い、見たくない。一人を見たくない……。一人に背を向けて気にしないように、掃除に集中した。

ぼーっとしてたらすぐに放課後になつた。嬉しいはずなのに、喜べなかつた。心配かけたくなくて、隼人の前ではなるべく笑つてみせた。

「どこまで描いた?」

「え、あー……。まだ顔の輪郭しか描けてない」

五分も経つのに、輪郭しか描けてないってどういうことなの、私は失礼すぎるよ、モテルになつてもらつてるのに……。

「体調、良くなかった？　今度にする？」

「大丈夫だよ。そんなに心配しないで」

再び描こうとした手を隼人に強く掴まれる。痛いわけじゃないけど、力が強くて振り払えるはずがない。

「嘘はダメだよ。今日は家に帰つてゆっくり休んで。また別の日に描いづら。ね？」

「…………」

不満そうな表情をして隼人は意見を変えようとはしない。渋々頷いて、教室を出ようと/orして隼人を見た。にっこりと笑つたかと思つたら、独り言のように呟いた。

「僕は諦めないよ。僕の想いに気付いてくれるまで、ね」

なんのことだろう？

私に向けたのか、単なる独り言なのか。体調が優れないのも本當なので軽く頭を下げる。帰り道を一人で歩いた。ズキズキと痛む胸をおさえて、目を瞑つた。

「私の、ばか……」

やつと氣付いた、本当の気持ち……。目を逸らしてた、熱い想い……。立ち上がりつて、親友の家に向かつた。

千恵の家つて、相変わらず遠い……。肩で息をして乱れを整える。必死で走ってきたからか、髪の毛はあらゆるところがはねてまわる。

る。

でも、髪を気にしてるひまじやない。

千恵に言いたいことがあるんだから―― 家に足を踏み入れると家の中はがらがらだ。どうしたのかな……。

「おや、ハハロちゃん。千恵に何か用かい？」

「あ、おじさん。こんなにちわ。千恵…… いますか？」

おじさんは「待つててね」と笑うと階段を上つていった。待つてゐる間、おじさんが手に持つていた茶色い箱……段ボールを見た。どくどく、と嫌な予感がさつきからずっと頭の中に流れる。勘違いだよね、千恵……？

「ハハロ、どうしたの？ 珍しいね」

「千恵！ あの、ね……話したいことと、聞きたいことがあるの」

場所を変えようか、と千恵が言つたので私は千恵の後ろについていく。人目が少なく、秘密話にはもつてこいなのかもしれないな。

「んーと。話したいことから聞こつかな？」

「う、うん！ 私、やつと分かつたんだ……。私ね、大西が

好き。恋なのか分からぬいけど、やう思つんだ……」

柴崎さんと仲良くしていようと、大西に恋してるからだと思った。今日でその思いが確信に変わったから、千恵に伝えたい。

「自分が恋だと思ったら、それはもう立派な恋なんだよ！」

にっこりと笑つて千恵が髪を柔らかく撫でてくれた。

「で？」
「聞きたい」とつて？」

「う、うん。私の勘違いならいいんだけど……千恵、なんで家の中の家具とかないの？ ひ、引越しとかじゃないよね……？」

笑つて違うよ、と言つて千恵。勘違いだよつて……。

二馬を見る。目にはハヤーの聲で和の言
がこゝる。疑うくらいに。

「あーあ。ばれちゃったか。さすがに分かるよね、私の態度とかにも出てたと懲りし。引越しなんだよね」

嘘じゃないの？
本当なの？
嘘だつて言ってほしかつ

私が「行かないでー!」って言つてどうにかなる話じやないのは分かつてるけど、でも……。

「ねえ、口。恋つて気付いてどう思った？」

「え？ 確か……。こんなに辛いのかなあって」

あれ？ 本当にそう思つた？ 辛いだけじゃないよ。楽しいことや嬉しいこともあつたはず。確かに、大西が柴崎さんと仲良くするのは嫌だと思つし、そんなことを思つてしまつ私自身も嫌だつた。

でも、この想いは譲れないから……。
だから私は、頑張つて成功させたい。

「私ね、もしかしたら……怖かつただけかもしない。周りのみんなのよつに傷付くのが怖かつた。恋に臆病になつてたんだ」

「うん。それに気付いたら、もう大丈夫。口口口は口口口らしく、焦らなくともいいからね？」私も応援してるから

ぎゅっと千恵に抱きつく。

千恵はいつも応援してくれてたんだね。
だからいつも私に、恋してるつて気付かせようとしてくれたんだ。
私、全然気付いてなかつた……。

「ありがとう、千恵。私は頑張るよ。大西に振り向いてもらえないかもしねりだけど……後悔しないためにも、精一杯のことほしいたい」

「それでこのコロコロ！ それに私、夏休みとかに逢いにくる
し、手紙だつて書く。だから悲しがることはないんだよ？」

そつか……。

そうだよね。手紙だつて書けるし、逢いにだつていける。一度と
逢えないってわけじゃないんだ。

「それじゃ、私は手伝いがあるから。口も早く帰った方がいいよ？」制服のままだし

あ……。無我夢中だったから家に帰らないでそのまま来ちゃったんだ……。

これは寄り道だなあ。

でも早く帰らないとすぐに空が暗くなっちゃう。

「うん。帰るね。また明日」

「また明日！　あ、口口口」

足をとめて顔だけ千恵に向ける。

千恵はぱたぱたと駆け足で走つてきたり、くすくす笑いながら呟いた。

「挨拶とかしなきやダメだよ？」大西にも、槇野にも

槇野？

槇野って……隼人！？

な、なんで千恵が知ってるの！？

私……隼人のこと、千恵に話したっけ？

「槇野は女子から人気があるから有名だよー。爽やか男子ってね」

ああ。

真琴も前に言つてたような……？

隼人は確かに爽やかという言葉が似合つ男子だと思つ。周りにき

りきりした光とか飛んでそいつ。

「じゃ、またね！ 気をつけてねー」

千恵がぶんぶんと手を振つてくれるの、私も負けないくらいに手を振つた。制服で、しかもこんな時間に何をしてるんだろうな、私。時間は六時を過ぎていいし。帰つたらきっと『ご飯が用意されてるだろ？』みんなは食べてるはずだから温め直さないと。冷えたご飯は好きじゃない。苦手な方だ。ぱさぱさして、美味しいねとか言えない。食べようと思つたら食べれるけど、普段は好んで食べない。好みがあるんだろ？

「ただいま」

返事は求めているわけじゃないので、早足で服を手に取ると、制服をハンガーにかけて吊つておく。ブレザーにしわとか寄せたくない派なんだよなあ……。

「ノーロ、『ご飯食べるだろ？』 今、温め直すな」

お父さんがおかずを持つて電子レンジで温め直す。帰つてきたばかりなのだろう。仕事着を着ていて、顔は疲労といつものが浮かんでいる。

お父さんが家族のために一生懸命なのは私にも分かる。だけど、なぜか好きになれない。幼い頃に遊んでもらつたことがないから？ 家にいてもそんなに会話しないから？ 私つてひどい娘だな……。

「はい。温め直したから冷えてないと思つが……。残さずに食べるんだぞ」

「分かってるよ。私も、もつ中学生なんだから」

箸を取つてホウレン草の炒め物を食べる。味付けは変わってないと思う。……うん。「」飯を食べ終えると、風呂に入つて布団に倒れ込む。今日は……いろんなことがありすぎて、疲れた。恋を認めたり、千恵が転校することを知つたり。疲れを癒すために目を瞑つた。

今日の朝はどきどきと胸が高鳴る。隣で歩いている千恵はにやにやと面白そうに笑つてゐるし。

「あ！　あれ、大西じゃない？」

見てみると、隼人と並んで歩いている小さな影がある。隼人と大西は友達であり、ライバルだと言つていたから仲良し。一緒に登校するよね。

「頑張れ！　ハハロー！」

強く背中を押されて、目の前にはにこやかに笑う隼人と、びっくりしたような大西の表現が目に映る。

「、ここで勇気出さなくて、この先どうするの私！

「お、おはよう……大西と隼人」

千恵が後ろで微笑んでいるのがなんとなく勘で分かる。挨拶も出

来なくて、この先の恋をどうやって頑張れるというのかな。見ているだけじゃ、きっといつか後悔する。見ているだけじゃ、満足出来なくなる。

大西はしばらくきょとんとして、瞬きを繰り返すと爽やかとはいえない、きらきらした笑顔で笑った。

「おはよ。星野」

その笑顔は隼人とはまた違う、綺麗な笑顔。ほんのりと頬を紅くさせて、嬉しそうな笑顔。

私が見てきた大西の中で一番好きな笑顔になつた。前に好きだったのは、部活の時の笑つた表情だった。夕日と重なつて、かつこよく見えた。

この笑顔をまた見たい。

これが大西と私の、最初の始まり。

「口がついに認めました。挨拶から始まるって素敵です。後悔したくないって思つて行動るのは良いことだと思います。私の場合はなかなか積極的に出来ないので、積極的な人が羨ましいです。

o n e s i s d e d l o v e - 1 2 療えない傷（前書き）

冬が終わります。中一編はだらだらしただけですね。進んでいるのかな？

冬に「蜜柑色」の意味が微妙に出できましたが、分かった人っていますかね？

さつきの朝は最高だつたなあ……。会話を挨拶でも出来るなんて。顔、にやけてないかな？ 口元が緩んでいるのが私でも分かつた。また大西と朝逢つて、挨拶出来たらいいな……。

「……さん？ 星野さん？」

隼人の声で現実に戻される。朝に逢つたのは隼人も同じで、行くクラスが同じだから別々に行く理由もないから、隼人と一緒に六組へ向かっている最中。

千恵たちの四組も同じ校舎で、すぐ近くなのだけど……けんかのようないい合いを無視しておいてきた。

隼人が「棗はほつとけばいいよ。僕、星野さんと話したいし」と言つので、一人きりで階段を上つている。

大西が気になるけど、千恵が変なことをいうはずないので、黙つて隼人とクラスへ行つてる。

棗は……どう思うんだろう？

付き合つてると、思うのかな。

隼人と私つて恋仲つていうか、恋愛感情なんて全くない。

隼人はかっこいいし、人気があるから女の子なんて選び放題じゃないのかな。ん？ 選び放題？

隼人つて好きな女の子、いるのかなあ……？

聞いたこともないし、聞く気も全然なかつた。関係ないから、で終わつていた。一度くらい、聞いてもいいよね？

「隼人つて好きな女の子、いる？」

何気なく聞いたつもりだつたのに、隼人は驚いた表情を向けると、考えるようにして黙り込んだ。動揺しているのか、聞いてほしくな

かつたのか……。き、聞かない方がよかつた?

「そうだな……。いるといえぱいるね。前から気になつてしまふがないんだよね」

「へえ! どんな女の子?」

隼人にもいたんだ! 好きな女の子ってどんな女の子なんだろう?

隼人が惚れるつてくらいだから、可愛くて優しい女の子なんだろうな……。

「うーん。初めて見た時に一目ぼれつてやつ? 可愛い子だなあ……つて。仲良くしてゐうちにどんどん惹かれていつたんだ」

「うわあ。隼人なら、きっと振り向いてもらえるよ! 応援してるね!」

隼人は「ありがとう」と言って笑ってくれた。爽やかだなあ、本当に。上手くいくといいな、隼人の想いも。

「でもね。その女の子は僕じゃなくて、他の男の子が好きみたいなんだよなあ。僕がいくらアピールしても、相手は鈍感な子だから気付いてくれないし。そこがまた燃えるけどね」

他の男の子が好き、か……。辛いな、隼人。好きで仕方ない人が、自分じやなくて違う人を見ていたら……。自分でその人が振り向いてくれないと分かつてしまつたら……。
私はきっと、耐えられない。

隼人はいつもそんな想いでその人を見ているのだろうか。悲しい

想いで、その人と話すのだろうか。

私に隼人をどうやって応援出来るのかな。下手な励ましじゃ、だめだ。

「隼人は……頑張ってるんだね。私も頑張るから……隼人も頑張ってね？」

上手く言えないけど、私にはこれしか言えないから。

隼人の想いは実つてほしい。実つて、幸せな表情をして「上手くいつたよ」と笑つてほしい。

「ありがとうございます。僕も頑張るよ。……最後まで、諦めたくないんだ。あの子は、譲りたくない」

よかつた。

隼人が諦めないって言つてくれた。譲りたくないって、すごく好きなんだな。

そんなふうに強く想われるってとっても幸せなことだよね。幸せ者だな、その女の子。

「よし。教室に着いたから、この話はお終い。秘密にしといてね？　好きな人を知られるの、騒がれそだから苦手なんだ」

「うん。隼人と私だけの秘密だね。また、時間があつたら話そ
うね」

上靴に履き替え、教室に入った。がやがやと騒いでる男の子のグループを避けて、自分の席に着く。鞄を置いて後ろを向く。後ろの席は真琴の席。

真琴は机に伏せて、寝ているように見える。朝早くに来てるのか

な?

真琴は私より断然早い。何時に家を出てるんだろう?

「おはよー、『ロロ……』

「おはよー、真琴」

顔を上げた真琴にぎょっとした。耳は赤いし、潤んでるし……泣いていたんだつてすぐに分かった。

こんな真琴、前にも見たことがある。

いつだつたか、マンションの前で蹲っていた。泣き顔で、理由を聞いてもかわされたつけ。

とりあえず、このまま教室にいれば真琴が泣いたつてことに誰か気付くだろう。場所を移動して、話を聞こじつ。

「真琴。少し話を聞かせてほしいんだけど……いい?」

確認してみると、真琴は小さく頷く。顔を隠しながら、保健室に向かう。保健室の先生は、悩みをなんでも聞いてくれる。精神的に辛い人や人間関係で困っている人……そんな人の悩みを聞いてあげることで本人の心は軽くなるんだとか。

「誰もいない。先生もいないや。中に入つて、話を聞かせてね？」

ソファに真琴を座らせ、その隣に私が座つて背中をそつて落ち着くように、何度も何度もわかる。田が潤んだと思ったら、ぽたぽたと下に落ちて行く。

「こわ、こよ……。女子が怖いよ。私の傷が……また出来る」

「うん、うん。ゆっくりでいいよ。少しずつでいいから」

真琴は精神的に疲れているかもしれない。女子が怖いって、どんな過去があるんだろう。想像していたよりも深く、たくさん傷ついた過去かも……。

「わ、たしね。小学校の時に……仲良かった女子が、急に私を無視して。とっても怖くて、人と……特に女子と関わることが苦手になったの。クラスの、女子を見るとそのことを思い出して。時々、泣きそうになっちゃって」

真琴の、心の傷。癒えない深い傷はどうやつたらいいのだろう。私は、何の役にも立たない……。

真琴はこんなにも辛い思いを一人で抱えていたといつのこと。どうして気付いてあげられなかつたんだろう。

「聞いてくれてありがと。私のことほいいから、教室に戻つた方がいいよ」

時計を見ると、チャイムが鳴るまであと五分。急いで走つたら何とか間に合つ。

でも、真琴を一人にしていいの？ 不安定なのにほつといていいの？ いいわけないのに……。

「あら？ お客がいたのね。あらあらー。そこの可愛い女の子！ どうしたの？」

保健室の先生が帰ってきたみたい。先生が手招きをして先生の目の前にある椅子に真琴を座らせる。先生が手招きをして先生の目

真琴はおとなしく椅子に座ると、顔を俯けた。先生は真琴を心配そうに見ながら、私に微笑むと「戻りなさい」と穏やかに言った。真琴を不安に思いながらも、頭を下げて教室に戻った。教室に戻つて担任の先生に事情を説明すると、自分の席に座る。
私には何が出来るんだろう……？

「ココロ！　ビデオしてそんなに上の空なの？」

帰り道、千恵が怒つた表情をして聞いてきた。

真琴のことを話してもいいのかな？　人の傷つて簡単に話していいわけない。

どうしよう……。

千恵は信用してもいいんだけど……勝手に言つていの？　本人のいないところで。

「真琴でしょう？　ココロって嘘が下手。そんなに深く考えないでもいいよ？」

「で、でも…」

どうしてそんなこと言えるの…？　真剣に悩んでいる真琴の力になりたいのに……軽く考えても、どうにもならないはずなのに。

「私が言いたいのは、そんなに深く考えても仕方ないってこと！　真琴の力になりたいのなら、ココロが真琴を支えればいいんだよ。うじうじしないで、いつも通りにしてあげればいいの」

それは納得。誰だつて急によそしへされたら心地良いとはいえないよね。

いつもより、何もなかつたようにして。辛いなり、傍にいてあげればいい。

それだけでも、少しは心が楽になると信じて。

「ありがとう。千恵には助けてもらつてばかりだね」

千恵、いつもありがとう。助けてもらつた分、今度は私が千恵を助けられるように。

千恵に何かあつたら、すぐに飛んでいく。絶対に。

「じゃあね」

千恵の後ろ姿を見送り、冷たい風が頬に触れる。

私もそろそろ帰る。雪とか降つてきたらどうしたらいいのか分からぬし。最後に後ろを振り返つて、足を進めた。

それから一週間くらい経つた頃、だろうか。

千恵が引っ越した。見送りに行つたけど、時間がないから話すことをあまり出来なかつた。手紙を書こうにも、住所が分からぬ。私つてどれだけ抜けてるんだろ……。

「あ。見て見て、桜の木が蕾をつけてる~」

美咲が学校の校庭にある桜の木を指差した。綺麗な桜の花。日本では歴史があるんだよね。花が咲くのは、あともう少しかな。

「まだ冬だけど花も負けずに頑張ってるんだねえ~」

もうすぐ、別れと出会いの季節がやってきます。

o n e s i s d e d l o v e - 1 2 療えない傷（後書き）

隼人にも好きな人はいたんですね。可愛いのか美人なのか……。隼人は笑顔が可愛い子とか、優しい子が好みな気がします。冬では棗とココロが仲良くなつたかなあ？

友情も多くかけてよかつたです。

ちなみに次回は中一編が始まります！ 起承転結でいうと「承」の部分になります。

o n e s i s d e d l o v e - 1 3

名前呼び（前書き）

つこに一年生編です。一年生編の時は隼人と「コロコロ」でしたが、二年生編は棗が多くなるかなー、と思います。

春つてとても素敵な季節だと思ひ。生命の誕生もある春は、素晴らしいんだけど……今はそつ思える余裕がない。

「……嘘」

春になつて学年がひとつ上がつたのでクラス替えというものがある。三年間、同じクラスでもいいと思うけど、たくさんの人と関わるためにもあるし、苦手な人とも仲良くやつていかないとダメだということで、今日がクラス発表の日だったから、少し不安だつただけど……。

「大西と、一緒のクラス。隼人は違うクラス。美咲とも同じクラス、かあ……」

美咲とは嬉しいけど、大西も一緒に。好きだと意識してから目を合わせるのも恥ずかしいのに。同じクラスなんて、緊張するに決まってる！

「良かつたね～。大西と一緒にだねえ」

美咲、絶対からかつてるな……。嬉しいといえば嬉しいんだけど、照れくさい……。

せめて隼人がいてくれたら助けを求めることが出来たのに。隣席になることはないだろう。

そこだけが救いかもしれない。好きな人が隣席つて……。授業どころじゃない！

でも、頑張らなきゃ。後悔はしたくないんだから。

「柴崎さんも違うクラスみたい。これなら、大西と思いつき
り話せるね~」

にやにやしてる美咲に軽く「そうかもね」と返事をしておく。
柴崎さんが、大西に近付くことだって出来るんだから、油断出来
ない。

「さつきからなんだよ? 大西、大西つて」

横を見ると大西が不機嫌そうに立っていた。聞いてたんだ、すっ
かり聞こえないのかと思ったよ。

「別に~? 大西には関係ないもん~! 女子の話なの~、
女子の~」

美咲はゆっくりして言つてるからかもしれないけど、私には美咲
が大西におちよくなっているように見える。
美咲がゆっくりからかもしれないが。

「ふーん。まあ、関係ないし。とりあえず名前を嫌がらせのよ
うに大声で叫うの、やめてくれよな」

声、大きかったかな? 普通だと思つんだけどな。。。確かにみんなに聞こえてたら恥ずかしいよね。こそこそ話していくても悪口を言つてるようになるから、一人だけの時に今度話そつと。美咲は「『めんねえ』と軽く謝ると再び話を掘り返す。

大西がどこかへ行つたから良かつたんだけど.....本人いたらどうなつていたのだろう?

「とりあえず~。これはチャンスなんだから! いっぱいア

ピールするんだよ～？」

美咲はそう言つて大西に田線を向ける。ジッと見ているものだから、気になつて振り返つてみる。

そこには、柴崎さんと仲良く話す大西の姿があつた。

「早く大西を口口口のものにしなくちや、他の子とくつこちやうかもね～」

前から思つていたけど……この時になつて思い知らされるなんて。私からも、積極的に話しかけないといけないな。本当にこのままじゃあ、柴崎さんにとられかけやつから。

「教室に行こいつ。席とか確認したいし～」

美咲はことんマイペースだな……。

でも、席を見たいのは事実だし、早めに教室に行つておきたいのも、また事実。時間は余るだらうけど……その分余裕が出来るからいいか……。

「うん。行こいつ！ 隣席、気になる！」

階段を上り、三階に着くと私たちの教室に入る。綺麗に並べられた机に、ピカピカな黒板。教卓にはどつたりプリントがある。

「あ！ 黒板に席が書いてある紙がはられてるよ～！」

美咲が覗き込むと残念そうに表情を崩す。嫌な席だつたとか？ はたまた、別の理由？

私も席を確認するため、紙を覗ぐ。見方があつてるのなら、私の

席は真ん中の列の後ろから一一番田。

大西は右側の廊下側の、前から二一番田。距離は離れている。

美咲は廊下側の列で、後ろから一一番田。班は違うものの、かなり離れてはいなく、安心した。

「大西とは離れてるね……。こいつなつたら、こっちから何か仕掛けるしか……」

美咲、何を考えているの？ 気のせいだつたらいいのだけれど、変なことを考えてないよね？

ましてや、大西と私に何か仕掛けるつもり……？

そ、それはダメ！

「美咲！ 計画立てなくていいよ！ 私自身で頑張るし。チヤンスだつてあるし」

美咲が大きな目を細めて私を見た。一ヤリと笑って、悪戯をしたくてたまらない小さな子供に似ている。

どうしてそんな表情になるのか分からなくて、首を傾げた。

「計画なんて立てるわけないじゃない。口々口がどんな行動とるのか気になるし、大西がどんな表情するかも楽しみで仕方ないのに！ 私は黙つて見守つてること決まってる」

思いつきり、はめられた……。楽しみにしてるつて、すじく田を輝かせて言つたけど、それはそれで大西に悪い気がする。

どんな表情をするのかを楽しもれていのだ。悪趣味だといふか、好奇心があるといふか……。

「星野？ 教室にいたのか？」

大西の、声……。

私の焦がれている声。

その声で名前を呼ばれたら、気付かずにはいられない。

『星野』と呼ばれるだけで嬉しいのに、『口口口』と呼ばれたら顔が真っ赤になるんだろうな……。

「ああー。捗してもいなかつたから、焦つた。教室にいたんだな」

「捗して、た……？」

大西が私を？ 本当に捗していたの？

それはどんな意味？ 普通に受け取つてもいいの？

大西の言葉を信じていいの？ お願い、その意味を教えて——。

「え、あの。俺何言つてるんだろ。と、とりえず……たまたま話したくなつたつていうか……」

「ふうん。でも顔が真っ赤だよ～？ 息も切れているし、走つてきたんじゃないの～？」

美咲が鋭く突つ込みながら一いや一いや笑うと、大西が美咲を睨み付けた。

美咲は怯えた様子はなく、知らん顔をしている。満足そうな表情。人をいじるのが好き、なんだな……。

私も気をつけなきや美咲にいじられる……。

「クラスが気になつただけだ！ ……俺の席は、ここか。ま

あ悪くないかな」

席につくと、顔を伏せる。眠いのかな？

私も自分の席について、やることがないので外の景色を眺めた。桜の花びらが満開で風が少し吹くと少しだけ花が下へと散る。

それだけでも綺麗なんだから、桜吹雪になつたらどれだけ綺麗なんだろう。桜吹雪は風が強く吹いて、たくさんの桜の花びらが舞う。前に見たのは五年前。授業中に窓を見ていたら、桜吹雪が起こつてあまりの綺麗さに声が出せずに、しばらく見入つていた。

また見れるかな。今度見るなら……大西と見たいと思つるのは私のわがままなのかな……。

「あー。ここが新しい教室かあ。心機一転、また頑張らないとね」

「好きな人と離れちゃつたあー！　彼が他の子を好きになつたらどうしようかなあ！？」

声に反応して見てみると、教室には人がさつきより多い。

私が窓を見ている間に来ていたみたい。声を出していた女の子は髪が長くておとなしそうな子と、派手な茶髪の子だった。

「はい！　席着ぐー！」

担任の先生であろう、髪を結った女教師が威厳のある声を響かせ、みんなは慌てて席に着く。

私は元々座つてたから慌てる必要はなかつたわけだけど。

「進級おめでとう。このクラスになつたからには、クラスのルールをしっかりと守つてもらう。いいな？」

厳しそうな先生だなあ……。眠い、けど寝たらだめだ。頑張れ、
私……。

いつの間にか話は終わっており、みんなは帰る準備をしていた。
私も軽い鞄を持ち上げ、美咲の席に行こうとするが、呼び止めら
れた。

「悪いが星野、これを大西に持つていいでくれないか?」

先生がゼッケンを持ちながらため息をついた。先生の目に映った
のがたまたま私で、だからこれを渡せと。

それだけなのに、顔が緩むのが分かつた。話すチャンスが、早速
訪れたのだから当たり前といえば当たり前。

「分かりました。大西に渡せばいいんですね」

「悪いな。あいつ、持つて帰るのを忘れたようだ。迷惑かける
が、頼んだぞ」

受け取つたゼッケンを握り締めて、美咲と一緒に大西を捲く。
美咲は眠そうにあぐびをして体育館前に立つた。

ここで男バスが練習しているんだな。中へ入ると、大西がボール
を転がしていた。

私に気付くとボールを手にしたまま、「どうかしたのか?」と問
い掛けてくる。

「ゼッケン。忘れてたでしょ?」

ゼッケンを見せつけるために手を出すと握り締めていたためにク
シャクシャしていた。怒る、かな……?

「んなにクシャクシャにしたんだもん。謝つておいた方がいい！」

「大西、『めん』。クシャクシャにしちやつたね……」

キヨトンとした大西の表情に目を逸らす。恥ずかしくなつて、目を合わせられない。意地悪く笑うのが見えて、背筋に冷や汗が流れた。

「気にすんなつて。でも、悪いと思つてんなら……ひとつ聞いてほしいことがあるんだけど」

「な、何？　出来る限りのことない」

「うしてそこまでしないといけないのか、疑問に思つたけど言つのはやめた。少しば反省してるけど、言つことを聞かなくてもいいのじゃないのかな。嫌われるのが怖くて、言えないけど。

「俺のこと、棗つて呼べよ。これからは『大西』じゃなくて『棗』だからな」

「は、はあ？　なんで……名前で呼ばなきゃいけないの？」

大西を名前で呼ぶ？　好きな人の名前を？

緊張し過ぎて倒れそう……。幸いなことに体育館には大西と私しかいない。一人だけの空間は静か。

「隼人のことだつて名前で呼んでるだろ……。なんか氣に入らないから。俺のことも呼べよ」

単なる気まぐれか……。

でも、これで大西と近付けたと思つていいんだよね？

友達関

係になれたつて少し自惚れていいんだよね？

「ほら、呼んでみろよ」

「な……なつ、棗」

自分でも分かるほどに声が小さく震えていた。名前を呼ぶって、こんなに緊張することだったかな……？

隼人の時は戸惑つたものの、こんなに緊張しなかつたのに……。私はやっぱり、大西のことが……。

「小さくて聞こえない。俺に聞こえるまで呼ばせるからな

「な、棗……。棗。棗！」

必死になつて大声で叫ぶと、相手は満足したように笑つた。その表情が少し真つ赤で嬉しそうだったのは、きっと私の見間違い。

「ちゃんと、呼べるじゃん。これから俺を呼ぶ時はそやつて呼べ」

「うん。おお……じゃなくて、棗」

顔が熱を持ちながら逃げるよつに走つた。恥ずかしい、恥ずかしい……。

彼は、いつも私を惑わす。泣きたいほどに幸せで、苦しいほど切なくて……。

もう私にはどうすればいいのか分からぬよ……。

「大西、棗」

もう一度呟いてみると、甘く響いて驚いた。大西……じゃなくて、

棗の名前ってこんなに甘かつたかな？

棗の声が聞きたいから、用事がなくても名前を呼んでしまいそうだよ。

「大好きだよ」

名前を呼ばずに、落ち着くために息をついた。

やつと名前呼びまでの仲になりました！

隼人だけ呼びすてなのは特別な気がしたので、棗も名前で呼べる
ように話を調整しておきました。今回は棗とココロですね。

いつかココロ視点ではなく、棗視点や隼人視点を書いてみたいで
す。

一年生編になつて、隼人と棗の会話です。話を書きながら、爽やかな人つてどんなのだろうと思いました。

私は『隼人』という人物は好きですが、中々性格を掴めないでいます。優しいのか、意地悪なのか……。棗は分かりやすいですが。

私が美咲の元へ戻ると、待つてましたと言わんばかりに笑顔が咲く。鈍感なはずなのに、棗と私のことに関するては妙に鋭い。何かあると棗の話をして、私を動搖させるのが楽しいと言っている。

「口の焦つた姿を見るのって楽しい～。からかうのも楽しいけどねえ～」

美咲からしたら、初恋でこんなに戸惑つてる私を見るのは楽しいんだろう。何せ、ずっと冷めた思いで恋なんて出来なかつたんだから。

でも、棗を好きになつてひとつ分かつたことがある。分かつたと いうより、気付いたこと。恋は人を信頼しないと出来ないんだってこと。信頼してない人を好きになれるはずがない。例えば、苦手な人がいるとしてその人を今すぐ好きになれる？ 簡単に、好きになれるはずがないんだ。少なくとも私は、棗を信頼してるんだ。他の人の見方で変わるけれど。

「大西と何かあつたんでしょう？」 一人きりの時間は楽しかった？

「な、なんで二人きりって知つてるの？」 棗に聞いたの？

ううん。

棗が言えるはずない。体育館を出でないはずだし、出たとしても私と会うはず。なのに会つてない。一人きりなのを知つてるのは……棗と私だけのはずなのに。

「戻つてくるのが遅いからだよ～。勘で言つただけ。それより

……大西を棗つて呼んでるんだ～？」

美咲の質問があまりにもしつこいので、経緯を話した。話をなかつたら、明日また聞かれることは想像出来たから。

美咲はこんな調子だけど、口は堅いから誰にも言わないって信じてる。学校の人も、私が棗を好きなことは知らない。知ってるのは美咲と千恵。学校の中では美咲だけのはずだけど、真琴も薄々感づいてるみたい。一年生の時に相談したことがあるからだろ？

「棗も攻めるねえ。うんうん、楽しくなってきたなあ」

美咲が楽しそうに鼻歌するので、考えることはやめておく。今は今で楽しもう。いろんなことを考へるなんて、私には合わないって分かってるから、ただ突っ走るしかないんだ。計画性がないともいえるけどね……。

「じゃあね。また明日」

「またね？」

分かれ道を曲がり、息をつく。頭から中々離れないでいる、棗との場面。

棗にしてみれば、そんなに考へないで言つた言葉かもしれないけど、私にしたらそれは希望。彼の名前を呼ぶことが出来るんだ。ずっと気になっていた、柴崎さんが棗と親しくすること。付き合つてるんじゃないかつて疑つほどに。

私の氣のせいなんだって思えた。

今日はいつもより早めに学校へ着いた。何となく、早めに起きて早めに来ただけ。静かな通学路。同じ制服の人が全くいない。朝の風景つてこんなものなのかな？

私は足を急がせて学校に向かった。不安になつて、教室でみんなが来るのを見たかつただけかもしない。教室を覗くと、誰もいない。八時前に来たんだから当たり前かもしない。

「あれ？　誰かの鞄が置いてある……。この席つて、誰だつけ？」

「そこは俺の席ですけど？」星野さん

ん？　今、『さん』付けした……？

私をそんなふうに呼ぶのは、限られている。女の子からは『口口』って呼ばれてて、男の子からは普通に『星野』だから。

隼人？

でも声が違う。嫌味の敬語は使わないだろつし。

「おい！　俺だつて！」

「棗！？　な、なんでこんなに早いの？」

慌てて後ろに下がる。早い時間にいるなんて思わなかつたし、鞄を置いてるからてつきり違う人なのかと……。

「朝練だつて。教室来たら、誰もいないからさ……。暇だから他のクラスに遊びに行つてたんだよ」

他のクラス……。

それって、柴崎さんのところへ 朝練が終わつたらこいつも柴崎さんに入つてゐるんじゃないの?

柴崎さんが、好きなの……?

「どうした? そんな暗い表情して」

心配して顔を覗き込む。嘘を言つてもどうせばれてしまう。でも、嫉妬してゐからって言えないし……。まして、柴崎さんのことを話題にする勇氣すらない。気になるものは気になるけど……聞いてもいいのかな?

「そーだ、これ貸してやるよ」

そう言つて片手に持つていた本を差し出す。何の本? シンプルなツルツルな表紙。特に絵が描いてあるわけでもなく、鳥の羽か天使とかがやつてる羽。受け取つてページを捲ると、文章ばかりが書いてある。小説……なんだろうけど、表紙からして恋愛小説か何か? タイトルからしてもそつだし。

「そんな難しい顔するなつて。今、小説にはまつてゐんだ。それ、面白いから読んでみろよ」

「ありがと……。棗が小説を読むなんて、想像出来ないよ」

状態で言つてみると棗がそっぽ向く。

そのままからかいのけど、せつかく借りたんだからゆっくり読もう。感想だつてちゃんと言つておきたいもの。ページを最初に戻して、目を通す。恋愛小説かと思つたら、アクションシーンやファンタジーっぽい、男の子にも読みやすい物語だ。

「これは、確かに面白いなあ……。」

「おはよつ。星野さんもおはよつ」

「あ、隼人！　おはよつ」

読んでいた本を閉じて、廊下側に歩く。

棗に会いに来たのかな？　去年、隼人が棗に会いに行くのはそれほど見たことがないよ。うな……。

「隼人？　何しに来たんだよ？　特に用なんてないだろ？」

「酷いなあ、棗は。いいじやん。僕がこのクラスに来たって。それより星野さん、早いね」

いきなり話を振られたので頷くことしか出来ない。今日はたまたま早く起きちゃって、なんて私がいつもギリギリまで寝てるようにな聞こえるし。黙つていれば、棗と隼人があれこれ話すはず。

「星野さんはこれから早く来るの？　なら僕も早く学校に来ようかなあ。朝早くに来て一人だけで話すって楽しいだろ？」

「んー。これから早くに来れたら来るよ。静かな教室って好きだから」

理由はもうひとつある。朝早くに来たら、また棗と話せるかもなんて。

隼人と話せるのも楽しいけど、それ以上に棗の方が楽しくて嬉しい、仕方ない。

「さ

「あ、僕そろそろ教室に戻るね。誰か来てるかもしないから

「早く戻らないと、女子が探し回るんじゃねえの？」爽やか
男子の隼人くん

棗の嫌味にも隼人は笑つて「そんなことないけどね」と受け流した。新しいクラスでも人気者になることは予想出来る。顔が整っていて、なおかつ爽やかで優しいんだから。去年もすぐ女子に呼び出されてた気がする。

「あ、槙野くん！」「ここにいたんだ！」搜したよ

ほんわかな雰囲気の女の子が隼人に駆け寄り、はにかむ。同じクラスの子なんだろうなって、何となく思った。

それに隼人を見る女の子の目が輝いているのは、気のせいじゃない。隼人のことが好きなんだろうな。

「ごめん。棗といろいろ話したくて。今から教室に戻ろうと思つてたんだ」

「そ、そうなんだ……。安心したよ。もしかしたら彼女がいて、彼女に会いに行つてゐるのかと」

安心したのか、さらに笑顔が輝く。彼女なんて隼人はいないのに。好きな女の子がいるつて言つてたのに。もしかしてこの女の子なのかな？

「隼人の好きな女の子って、あの子？」

廊下を歩いていく一人を見て呟いた。爽やか笑顔を女の子に向ける隼人と、はにかんでいる女の子。中々お似合いだよなあ。

「はあ？ 隼人に好きな子がいる？ デビの噂だよ」

「ほ、本当だつて！ 隼人から聞いたんだもん！」

棗は疑つていたけど、何かを考えているみたいで、黙つたまま。好きな子がいるつて隼人から聞いてなかつたのかな？ ライバルだから黙つてた、とか関係ないだろうし……。

「部活の時に聞いておく。そんなの聞いたことないし。隼人が惚れるほどの子だ。どんなに可愛いんだろうな」

「きつと、すつぐ可愛いよ！ どんな女の子かな？」

好きな子がいるのは教えてくれたけど、誰が好きなのかは教えてくれなかつた。

でも、きつと可愛い子なんだろうな。

棗にも教えてないつてことは、横取りとかされたくないとか……そういうのかもしれない。

そういうのかもしれない。そういえば、棗には好きな子や付き合つてる子はいるの？ 全く知らないし、いたとしたら？ 付き合つてる子がいるのなら……どうすればいいの？

「棗は付き合つてる子とかいるの？」

「は？ 付き合つ？ そんな奴、いねえよ」

とりあえず付き合つてはないんだ。次は好きな人がいるか聞きた

いけど、聞きにくいやなあ……。

もう、流れに任せて聞いてやおうか。

棗が好きだつてこと、分かるはずないから。

「好きな子は？　いるよね？」

聞いた瞬間、棗がこれまでになくくらいに真っ赤になつて、取り乱す。

こんな反応するつてことは……いるんだ。

私、ばか？　笑つて「いるわけないだろ」って言ってくれるのを期待してた。好きな子は、柴崎さん？

「俺、他のクラスに行つてくる。ぐ、変なこと聞くなよ」

慌てて廊下に走つていいく棗。隠したつて態度からして分かるのに。棗はきっと、柴崎さんのことが好きなんだ。美人だし、仲が良いし……付き合つてると誤解するほど、一緒にいたし。でも……敵わないかもしけないけど、私は後悔したくない。振られると分かつていても、いつかは告白したいって思つてる。今はまだ告白なんて出来ない。告白する勇氣すらない。

「あ……本、借りてたんだ。読んでおこつかな」

机に座つて鞄を置いてからページを捲る。読んでいるのだけど、棗はこんなジャンルが好きなんだなあ、とか小説を読むんだとか棗のことばかり。

「棗……」

好きだと言えば君はどんな表情をするのかな。笑つて「冗談はや

めろよ」と言うのかな。

それとも真っ赤になってくれる? 微笑んでくれる?

私は、どんな反応を期待してなんて言ってほしいのだろう。

「ばか棗」

微笑みながら「ありがとう」なんて……。いつかは言ってくれるのかな?

「俺を好きになってくれてありがとう」
言つことはないと分かついても。

君が迷惑に思つても、私の想いは止められないんだ……。

「口が可愛くて仕方ないです！」　一途だけどいろいろ考えて前に進めなかつたり、後戻りしてしまつたり。彼女は『柴崎さん』という人が離れないんでしょうね。

棗といふと楽しいけれど、柴崎さんが頭を駆け巡つてゐる、といった感じでしょうか。今は出番がない柴崎さんですが、後々登場しますので

one sided love-15 共通（前書き）

一年生編の春、最後です。次は一年生編夏に突入です。夏は少し変化があらわれる予定です。

柴崎さんと棗に異変が……？

口々口に対する気持ちの変化も？

そして隼人との友情に穴が！？ のような話を予定しています。

時間が過ぎると、クラスに人が集まってくる。席に着いて話したり、宿題したり。さつきまで棗と隼人と私で話していたのは嘘のよう。

美咲の席に目を移すと、まだ来てない。家が学校に近いからいつも遅く来るのは分かっているのだけど。暇で読んでいた棗の本はもう読み終えた。最後の展開がまさか！と思いつアクション。小説って面白いなあ……。今度、買おうか。
それがきつかけで棗とまた話せるかも。

「星野さん。その本なあに？ 可愛い表紙だね」

派手な女の子と一緒にいた女の子が顔を覗かせ興味深そうに、私と本を交互に見る。前に見た時は気付かなかつたけど、この子は背が低い。長いスカートに長い睫毛。少しオシャレをしたらかなり可愛くなるつて私も分かる。

「は、わ……？」これは棗から借りたもので…

「棗？ ああ、あの……んーと柴崎さんの人だよね？」

柴崎さんの人……？ 何、それ。付き合つてるとか、そんなの？ でも棗は否定してた。有り得ないよ、付き合つてるなんて……。好きならまだ分かるのに。ううん。この子が誤解してるだけかもしれない。

「なんだ？ それ。柴崎の人？ ばかじやねえの」

「あわわ！？ 大西くん？ 聞いてたの？ ただの噂だから気にしないでね？」

女の子は急いで違うところへ行く。彼女を田で見ていたかと思うと、苦笑。

どうして苦笑するのか分からなくて強く本を抱き締めるしかなかつた。

「誤解するな。柴崎とはただの友達。付き合つてるとかないから」

「『』、誤解された方が嬉しいんじゃないの？ 柴崎さんって美人だし。あんな人が彼女なら自慢できる……だろ？」

棗は「はあ？」と不機嫌っぽい声を出して首をポキポキ鳴らしていたが、何を思い付いたのかニヤリと意地悪な表情をする。この表情の時つていつもドキドキする。緊張して、上手く息が出来ない。見られてると思つと変に身体に力が入る。

「柴崎じやあ好みじやないんだよな。俺にだつて好みがあるの。美人だから彼女にするとか、無理があるつて」

お腹を抱えて大袈裟に笑う棗に呆れながらも、ホツとした自分がいた。胸の奥に棗の彼女というのが気になつて仕方なかつた。柴崎さんじやないのが救い。幸い棗は柴崎さんが好みじやないんだし……。

なら、棗の好みつて？

「じゃあ棗の好みは？ 可愛い子？ 優しい子？」

「そこ聞いちゃう？ んー……。背とか関係なくて、一緒にいたら楽しいやつかな。もつと言つなら髪が短い子がいいかな……。ま、長くても好きな子ならなんでもいいけどね」

それは分かる。

私だって棗が好きだから、背が低いのだってバスケに打ち込んでいる姿だってかつこいいと思うの。かつこよさでは隼人の方が何倍もいい。

でも、私には……誰よりも棗がかっこよく見えるの。

「星野は？ 好きな奴とか

「秘密。でも、かつこよくないかもしけないけど、私にしたら世界で一番かっこいいと思わせる人」

それくらいに惚れているんだよ。気付いてるの、棗？
君への想いはこんなに強いのに。誰にも負けないのに。
どうして見てくれないのであらう――。

「ふーん。べた惚れかよ。惚氣は面倒だからバスね

「惚氣なんてしない！ あ、小説読んだから返すね。面白かった

抱き締めていた本をゆっくり緩めて返す。わがままになつていたんだ、私。話せるだけで十分だったはずなのに……。

棗が誰と付き合おうと私には関係ないもの。応援する必要もないし、邪魔する必要もない。好きな人と付き合えたら……どんなに幸せなんだろう……。

「おうーーー」それで小説に興味が湧いてきたら嬉しいな……なんつって！」

「あ、うん。小説って面白いね！　何か買おうかなあつて

それは正直な感想。次の休みにでも、ファンタジー小説や恋愛小説、ホラー小説を探しに行こうかな。話題の映画小説とかでもいいかも。

そう考えると次の休みが楽しみで仕方ない。ああ……わくわくするー！

「おはよう～。ハロロ」

「わあー？　み、美咲！？　驚かさないでよ

美咲、本当に心臓に悪いんだから。驚かされるのは慣れないものなんだから、少し優しくしてほしいものだ。

「何話したの～？　朝から仲良いねえ～」

「秘密だよ。棗と私の秘密の話」

だつて、棗と私を繋ぐものがひとつもないんだもん。
だからせめて、これくらいの秘密くらい、いいよね？　例え棗
が私以外の人に教えたって、それでいいから。少しの間だけ……！」

短い一日が終わり、カレンダーに日をやつた。明日は三連休だ……。長いなあ、三日間も棗に逢えないなんて……。

そういうえば棗は隼人に聞いたのかな？　好きな人のこと。隼人が教えるのは想像つかない。

もしかしたら、勝負をして教えるか教えないかを決めるのかも。

「…………」

頭に流れるのは、ただ君の無邪気な笑顔。

目が覚めたのは午前十時。遅く起きたなあ。八時とかに起きるんだけど。

とりあえず顔を洗わなきゃ。タオルを持って洗面所に向かう。洗顔をして歯磨きをして。服を着替えようかなあー、と服に手をかけた瞬間に家のインターホンが鳴った。誰だろう？　遊び約束なんしていないし、彼氏なんてもつてのほか。訪ねてくる人はいないけど……。

「はい！　どちら様ですか？」

「千恵です。ココロいますか？」

お母さんが振り返り、目で何か言つている。言いたいことは分かるよ。早く着替えて用意しなさい、だろ？　少しばは待つてほしい。服に着替えようとしてたんだから。

でも、千恵って言ったよね？　本当に千恵？　三連休を利用
してこっちに帰ってきたの？

そう思つと早く逢いたい、という思いに駆られて財布を持つ手や
動く足が妙に震えた。玄関に立つて、深呼吸をしてからドアを開け
た。目の前には髪を切つて、天然パーマになつてゐる髪型に大きめ
の服。ズボンにスニーカーというシンプルな服装。
私を見て微笑んでいる千恵がいる。

「千恵！久しぶり！　たくさん話したいことがあるの。聞
てくれる？」

「口口口久しぶり！　勿論！　私からも聞きたいことはあ
るんだから」

自転車に乗りながら買い物をしようとした決めるが、前からよく行つ
てた店に向かう。向かっている間、いろいろな話をした。新しい学
校や部活のこと、友達のことや楽しいこと。

私からは一年になつてからどうなつてているのか、部活の後輩のこと
と美咲のこと。

あんなに相談して、後押しまでしてもらつた。好きな人のことを
話しているとこんなにも楽しくなつて、とまらなくなる。いつの間
にこんなに好きになつていたのかな……。

「ねえ。口口口に聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「ん？　話せる」とならなんでも話すよ

「話せ忘れた」とはないはず。変なことを聞かれても、教えなきゃ
いいんだし。

千恵のことだから変なことは聞かないとは思つけど。

「槇野について聞きたいんだけど……。その、槇野から何か言
われてない？　『付き合っててくれ』とか」

「言われてないよ。隼人が私にそんなこと言つはずないよ」

だつて隼人には好きな人がちゃんといるんだから。好きでもない
人に「付き合つて」なんて言う軽い人じやないもん。

それになんで私？　名前で呼んでるのは呼んでるけど、そこま
で仲良くないしなあ。

「鈍感だな。隼人も苦労するね、これじゃあ」

「何言つてるの？　苦労するつて……部活はそんなに忙しく
ないはずだよ」

額に手をあてて、呆れた表情の千恵。退屈ならそれでいいけど、
顔に出すことないのに！　久しぶりに逢えて、遊べて私は嬉しい
のに。

とりあえず小説を買いたい。

千恵にも言つておいたから賛成してくれると思つ。多分。

「小説買いたいから、見に行つていい？」

「そうだつたね。本屋に行こつか。小説好きなんだよね」

すっかり上機嫌な千恵を横目に、どんな本を買おつか本当に迷つ。
アクション？　感動？　はたまたホラー？　ホラーって面白
いんだけど、一人で読んだり見たり出来ない。夜の風呂とか怖くて

後ろを見ながら髪を洗うし。中々寝付けないし。明るい話にしようかな。

なんて考えていたら本屋はすぐそこ。遠いわけではないので、すぐ着く。周りを見ると人が自転車で道を行き来している。私たちも自転車だけね。

「ああ。これもいいなあ！　これは映画の小説版だし。どれも欲しいやあ」

千恵は輝かせて小説コーナーを見るけど、私にはさっぱり。分厚いものや小さいもの、上下巻があるもの。

どんな話なのかも知らないのにどれを選べばいいんだろう。

棗が興味のある小説にしたい。戦闘ものかな、やつぱり。

このすごい数の中からひとつだけを選ぶ……。骨が折れる作業。しんどいかもしれないけど、棗との会話になるのなら苦痛だとは思わない。

千恵だつているんだし、手伝つてもらおう。小説に詳しいみたいだし。

「ねえ。小説選びたいんだけど、千恵も選んでくれない？」

「いいよ。どんなのにする？」

棗との会話になりそうな、そして読みやすくて続編などないもの。詳しく述べると上下巻がないもの。大きさはあまり大き過ぎないものがいい。

千恵は難しい表情を少しうると、手前にあつた本を取り、押し付けてくる。

「これがいいよ」

「て、適当じゃないの？　これ」

押し付けられた本を見ると英語が並んでいて、表紙はツルツルしていて水色の光が描かれている。疑問に思いながら千恵を見ると「大丈夫だから」とピースサイン。

千恵のことだから何か考えてこれにしたのかかもしれないし。覚悟を決めて、本を買った。

本を買って学校に行くのは久しぶり。教室には誰もいないので、前に買った本を取り出して田に通す。読みやすいな。読んでいると話に引き込まれていく感じ。

「お？　星野もこれ好きなんだ。俺も好きなんだよな」

いつの間にか棗が来てた。本の話……。良かつた。
棗も読んでた。好きだと、言つてくれた。

それから棗との本の貸し借りが始まつた。廊下とかを歩いていると「星野！」と呼んで息を切らしながら「これ読んでみるよ」と笑つて言つてくれるんだ。

「ありがとう。棗」

もうすぐ頬との裏がきます。

o n e s i s d e d l o v e - 1 5 共通（後書き）

どうでしたか？　今回の話は、好きな人と共通な話を出来るのも楽しいですよね。日常にありそうな、じつは普通の会話かもしれません。

ですが人生に一度しかない中学生の青春を感じていただけたら、と思います。

柴崎さんがやつと登場します。美咲は出でこませんが、その分に柴崎さんと「口がたくさん話しています。書いていて楽しかったお話しでした。
では、お楽しみトやこせー。

夏は君への想いが増す季節。焦がれて焦がれて、手にしそうとしたら轟く消える。大切だから急いでいけないのに。大切だから時間をかけていかないとダメなのに。気付いた時には手遅れ。私の選ぶ選択肢には、間違ばかり……。

夢から田を覚まして、夏服に手を通す。真夏だから太陽が眩しくて、日焼けする肌。健康的かもしねりだけど、白い肌には憧れたりしている。漫画とかでよくある……。

「じゃあ、行つてきます」

マンションを飛び出して学校へ早足へ向かつ。朝早く学校に行つて、みんなに内緒で棗と隼人と話す。ささいなことでも、私にしたらとても楽しいし嬉しい。一人と話せるのは、特別だから。教室に着いたけど、誰もいない。棗もいない。朝早くに来ても、一人には朝練があるから話せない時だつてある。しようがないことだし、部活で頑張つてほしいことも事実。でも、寂しいと思う自分がいる……。何考えているの！ 私つたら！

「あれ？ 星野さんだけ？」

声に凍り付く。どうしてここにいるんだろう。校舎は同じだけど、クラスは違うしあの人は私たちのクラスより一階上にいる。私が三

階にいるとしたらあの人は四階なの。」「

でも、あの人はここにいる。きっと彼に会いに来たんだ。そういうやなきや、来る理由なんてないもの。

「ねえ。棗知らない？　捜してるんだけど」

「知らない。朝練じゃないの？」

あの人——柴崎さんに目を向けた。相変わらず美人。何ヵ月ぶりに見るだろう。一年になつてから全く見なかつたし、会わなかつた。このクラスに来ることもなかつた。

なのに、なんでこんな時間に……？

「そう。棗が遅いっていつたら朝練しかないものね。ああ。そうだ。棗が来たら言つておいてくれない？　柴崎が会いに来てつて言つてたつてね」

「別にいいけど。柴崎さんに聞きたいことがあるの」

私は決心して聞いてみる。柴崎さんは私を振り返りながら無表情になつた。こつちを睨んでいるようにも見える。そんなことを無視して、気になつていたことを聞く。

「柴崎さん。棗どどんな関係なの？　付き合つているわけじゃないんだよね？」

核心を突いてみた。棗からは聞いたけど……信じていいけど確認しておきたい。付き合つてないのに、付き合つているような素振り。そんなの、卑怯だ。動搖させるためにこんなことをしてるなら、柴崎さんに何か文句でも言つておきたい。

「なんか変わったよね。一年の時は人見知りとかで、言いたいことをひとつも言えなかつたくせに。棗がいるから強気になつたの？ ふざけないでよ」

「確かに前の私は、言いたいことも言えずひたすら我慢してた。柴崎さんに棗を取られても、仕方ないんだって。一人は似合つてるから」

柴崎さんは美人で、肩につくかつかないとくらいいの髪の長さで前髪を分けていて、白い肌にまいていて短いスカート。鍛えられた筋肉のついた足。強気な目元。いつも何かを企んでいるような口元。柴崎さんに敵うなんて、無理だけど。私は特別可愛いわけじゃないし、美人なわけでもない。

でもね、好きな人が出来たら誰でも可愛くなりたいんだ。似合うようには頑張りたいんだ。棗に似合うためには、凛々しくて優しい子にならないとダメなんだって思つて。可愛い子じゃないとダメなんだろうって。私は、棗のために変わりたい。

「そ、う、よ。私と棗は似合つて。棗を必ず私のものにするんだから」

「でも！ 私だつて棗が好き！ 譲れないし、譲りたくない！ 棗は……棗に似合うかは本人が決めるから、私は最後まで諦めない」

柴崎さんには負けたくない。棗をもの扱いしてる人に。まるでゲームの中のキャラを何日で自分を好きにさせられるか、そんなふうに棗を見ているんだろう。

だからって私には邪魔をする資格はない。なら、私は私なりに出

来ることをするだけ。棗が柴崎さんを選んでも、彼は彼にしか分からぬことがあるはずだから。

「あつそう。棗のことが好きなのは前から知つてた。あんな態度をするんだから、丸分かり。私も棗を諦める気は全くない。確かに、棗とは付き合つてないし、友達関係。私にこんなことを言うのは納得いかないかもしだれだけど、棗はあんたを選ばない」

「な、なんで……。なんでそんなことを柴崎さんに言われなきゃいけないの！？　なんでも分かつたような言い方、やめてよー。」

私を選ばない？　柴崎さんがなんで分かるの？　棗の想いで分かつていいような言い方……。何を知つてると云ひの？　棗が誰を選ぶのか分かるの？

そんなの、冗談にもほどがある！

「今のは勘。棗は星野さんを選ばないとと思つただけ。私がなんでも知つてゐわけじゃない。じゃあね」

冷めた目で私を見たあと、柴崎さんは廊下を歩いて行く。誰もいなせいが、柴崎さんの歩く音が響く。私はまだ聞きたいことがあるので柴崎さんの腕を引っ張つた。驚いて振り返る柴崎さんを無視して、一番氣になつていることを口にした。

「柴崎さんは……棗が好きなの？」

聞いた途端、柴崎さんの口元が怪しく笑つたのを見逃せなかつた。本当は、棗のことが好きじやないんじょ？　私から棗を奪つて悔しい姿を見たいがためなんじょ？

「さあね。私が棗をどう思つていいが私の勝手。星野さんに
は関係ないわ」

「…………」

確かにそうだ。柴崎さんの気持ちは私がなにか言つて変わることはないし、変わる必要もない。気持ちは自由だから、誰かが勝手に操つていいものじゃない。また、邪魔をすることも人の勝手だから。

「手、離してよ。星野さんと仲良くなんてないんだから」

「やひ、だけど！　お願ひだから約束して。棗を傷付けない
で……」

柴崎さんが棗をどう思つていても、私がどうにか出来るはずがない。私はばかだから、棗のことを傷付けてほしくないって思うだけで精一杯で。お願いなんて、そんな綺麗なものじゃない。私の勝手な思いを押し付けてるだけ……。

「棗を傷付ける？　そんなことしないわよ。棗とは付き合つてないんだから。それに棗が私を好きにならないとダメじゃない」

「分かつてる。でも棗は柴崎さんを気にしてるから……」

だつていつも一緒にいる。前に見ないふりをしてたけど、一緒に下校しているのを見たことがある。一人ともバスケ部だからまたまだつて、見た時は無理矢理そう思つていたけど、時間が経つにつれて分かつたんだ。あれはどちらかが待つていたのだと。信じたくないけど、棗が柴崎さんを待つてたんだ。あの日は男バスの方が早く終わっていたから。柴崎さんは遅かったのに。もう、棗の気持ち

は柴崎さんに傾いているんだって、私でも分かるよ？

「星野さんはそういうふうに見えるだけ。強気はどうしたの？」
諦めないんでしょ？」

私の反応を楽しんでいる柴崎さん。強気なんじゃなくて、あれは勢いで言つてしまつただけといつか……。本当には思つてたんだけど。あんなに強気と言えたのは初めてかも知れない。いつもは流れているから。

「柴崎さん。ありがとう。私も棗にアプローチしてみるよ」
「応援もしないけどね。棗が来たら伝えといで。柴崎が待つてた、つて」

柴崎さんは優雅に微笑むと階段を軽く上つて行つた。後ろ姿を見ながらなんともいえない気持ちになり棗の机に触れた。授業中はいつも伏せて寝ている君。寝てる時に思い浮かべているのは、誰？君の笑顔も君の全ても……全部、私が独り占め出来たらいいのに……。

「棗は、誰が好きですか」

机に座つて君と同じように伏せてみる。誰も来てないからいいと思つ。少しだけなら……。

そんなことを思いながら、机に問い合わせてる自分がおかしくなつて、自分の席に戻つた。手を机の中に突つ込むと人が描いてある紙を見つけた。柔らかい笑顔で、優しい雰囲気を漂わせている男の子。去年の冬に描いた、隼人。輪郭しか描けてない中途半端な絵は、何ヵ月も放置されたまま。

「私、何忘れていたんだろう……。描くつて言つたのに」

廊下を走つて階段を素早く上る。隼人に会つて話して……。それからのことは全く考えていない。ただ、会いたくて仕方なかつた。柔らかい口調で私を呼んでくれる、あの男の子に今すぐ会いたい。

「…………隼人！」

教室を覗いたけど誰もいなかつた。朝練？　それにしては遅い気がする。長引いているだけなのかな？

教室に戻ろうと、階段を下りていたら大好きな声が聞こえた。

「隼人ー、俺疲れたから来るならお前から来いよな」

「朝練で？　今日はまだ軽い方だつたじやん。それに僕は言われなくても、棗のクラスには行くよ。会いたい人がいるんだから「棗と隼人だ……。そつか、朝練だつたんだ。あんなに不安になつてた自分はなんだつたんだろう……。」

それにしても、隼人の『会いたい人がいるんだから』つて……隼人の好きな人つて私のクラスにいるつてこと！？　そうしたら、隼人がその人に会いに来てたつてこと……なんだ。

「あれ？　おはよう。星野さん」

「わあ！　お、おはよう。隼人」

急に声をかけられたので、隼人に変な声を出しちやつた……。いつもと同じ笑顔を浮かべているから、それほど気にしてないみたい。

隣に棗はいないから……教室に戻つたんだろうな。

「隼人！」「これ！」

「ん？　あー、絵？　嬉しいなあ、ありがとう」

はにかまれて恥ずかしくなつて、顔を真つ赤にしながら教室に戻る。机に座りながら寬いでいる棗が、いた。

「おはよ。棗」

「おひ。おはよ星野」

笑顔を浮かべられて何も言えずにいると、棗が何か思い出したのか「あ。そういえばさあ」と声をかけてきた。

「隼人の好きな奴、教えてもらえなかつた。でも、大体予想はついた」

「え！？　隼人の好きな人、分かつたの！？」

大声で言つてしまい、慌てて口を手で隠す。興奮して、つい……。でもやつぱり隼人は教えてないんだ。知られたくないから言わないんだよね？　なら、私も黙つていた方がいい。

「あ。柴崎さんが棗を呼んでたよ」

「は？　柴崎が？　一体なんだろ」

本を机に置くと、慌ただしく走つていく。私はその後ろ姿を、引

を止める」となんて出来なくて、ただただ黙つて見つめていた。

one sided love-16

恋敵（後書き）

一年生編の夏とは少し違う心情を感じていただけたら嬉しいです。
棗と一緒にいて気付くこと、傷付くこと。成長していく口々口をあ
たたかく見守つてくれたらありがとうございます！

棗が少しずつ、口々口との距離が近くなっています。
それは隼人も同じで、口々口も一人の間で揺れています。棗が好きだけど、隼人にもドキドキさせられちゃいます。
でも、恋愛っぽくもっと甘くしてみたいですね。

棗が柴崎さんのところに行つて、何分経つかな……。軽く十分は過ぎてる。なにを話しているの？ 棗は柴崎さんの想いに気付いているのだろうか。

あの時はごまかしていた柴崎さんだけど、私からしたら柴崎さんは棗が好きなんだと思う。だから、棗に振り向いてもらおうと頑張るんだ……。

「柴崎さん、綺麗だから鼻の下を伸ばしているのかも」

「そう？ 棗はそんな軽い奴じやないよ。多分ね」

横を見ると、隼人が笑顔で机に座りながら顔を手に乗せていた。いつの間に、とか思つても私が気付いてない間に来たのだろうと思えば、それほど不思議じやない。

隼人はあぐびをしながら棗の席の教科書を捲る。細くて白い手から目が離せない。隼人は手まで綺麗。全てが綺麗な人……。

「星野さんも気になるの？ 棗の教科書」

私を見ては、微笑む彼。どうやら勘違いしてゐらしい。私が見ていたのは棗の教科書じやなくて、隼人の手なのに。

隼人の隣まで行くと、私も席についた。隼人と隣席。去年も隼人と隣だつたな。いろんなこと、話して先生に注意されたこともあつた。その度に隼人ファンの女の子から痛い目線を受けていた。今は、隼人の隣は私じやないけれど。

「星野さんと隣席なのは久しぶりだなあ。よく先生に怒られた

よね

「うん。授業なんて耳に入らなかつた。……隼人」

名を呼んで、教科書を持つている指に手を伸ばす。少し冷たい指と手。静かに隼人の手を握つた。

隼人は困った笑顔をしていたけど、意地悪な笑顔になつて強く握り返してくれた。

「星野さんの手、小さいね。女の子の手はこんなに小さかつたかな？」

「隼人が大きいんだよ！　バスケしてたら手も大きくなるの？」

私よりも大きい手は、男の子の手。こんなに簡単に握つてしまつたけど、隼人が嫌がらなかつたから嬉しい気持ちと安心する気持ちが私の心を揺さぶつた。

負けないようにと私もさつきより力を込めて、強く強く隼人の手を握り締めた。

どれだけそうしていたのか、分からない。棗が声をかけてきたから隼人と繋いでいた手を離した。さつきまでお互い強く握り合つていたのに、驚くほど簡単に隼人の手は離れていつた。

目の前で怒つた表情の棗に隼人は気付いてない素振りで「おかげり」なんて言つている。私は棗に目をやりながらも、隼人と繋いでいた手が熱を持っていることに気付いて、その手を片方の手で握つた。

「なんで、隼人が俺の席に？　なんで星野が隣に座つてるんだよ？」

「怒らないでよ。いろいろあつてさ。内緒だよね。星野さん？」

いきなり私に聞かなくても……いいのに。内緒、と言えばいいのかな。隼人は手を握っていたこと、言つつもりはないみたいだし……。私も出来れば恥ずかしくて、言いたくないし。話を合わせていた方がいいよね。うん。

「な、内緒だよ」

「ほら。星野さんと僕の秘密だからね。これ以上、触れて欲しくないなあ。怒られても困るかな」

ひ、秘密……？　そこまで大袈裟なものじゃないんだけど。
それより、怒るってどうして？　柴崎さんとなにかあったの？
喧嘩でも……したのかな？

「隼人、教室に戻れ。今は話したくない」

不機嫌な棗が隼人を睨んで、今にも喧嘩しそうな勢い。なんだか恐くなつて、二人から少し距離をとつた。特に棗が……とても怖い。逆に隼人は肩を竦めて息を吐くと、廊下に出て小さく私に微笑んだ。ドキリ、として隼人がいなくなるまで見ていたら、乱暴に教科書を机にしまう棗と目が合つ。

「…………」

「…………」

長い沈黙。目を合わせていても、棗はなにも言わない。私もなに

も言えない。隼人のことがあつたから余計に棗とは気まずい。

棗が怒りのオーラ全開で、話しかけることすら怖い。

棗の目線が怖くて、私は隼人を追いかけた。

足音に気付いた隼人が振り返る。私を見てから駆け寄つてくると、背中を優しく叩いて「大丈夫？」と聞いてくれる。多分、私が息を少し切らしていたから。早く隼人の傍にいたい、そういうふた想いが私をここまで走らせた。

おかしいかな、私……。私は棗が好きなはずなのに。
隼人と一緒にいたいと思うなんて……。

「棗が怖かつたよね。大丈夫だよ。みんなが来るまで僕と話せばいいから。僕のクラスに来て、僕の隣席に座ればいい」

手を触られたあとに、強くまた握られて手を引かれる。反抗も出来なくて、おとなしく歩いていたら隼人のクラスに着いた。
中に入つて隼人が肩に手を置いて座させてくれた。

「みんなが来るまでここにいていいよ。棗にも困るよね。あんなことくらいで怒るんだから」

「あんなこと……？」

首を傾げて隼人に向き合う。隼人はなにも言わずにただ私に笑顔を向けるだけ。きっと、言うつもりはないんだ。態度だけでそれが分かる。直接棗に聞けつてことか……。

「ま、槙野くん！　話があるのー。」

隣のクラスの女の子がドアに立つて、顔を真っ赤にさせながら俯いている。

きっと、隼人に告白するつもりなんだろうな……。

「行つてくるよ。星野さん、退屈かもしれないけどすぐに戻るから」「あー、おはよー、口口口ー」

私のことは、気にしないで。すぐに戻らなくていいから、ちゃんとその子と話してあげて。返事を考えてしてあげてね。心中でそう呟きながら黙つて一人を見送った。

少し時間が経つたので、隼人のクラスから出て自分のクラスに戻る。

この時間なら、誰か来ていると思う。棗と一人きりになることもない。棗のことは、どうしてあんなに怒ったのか分からぬ。でも、柴崎さんとにかくあつたから……。柴崎さんは、棗の態度まで関係するほどに特別な人なのかな……。

「あー、おはよー、口口口ー」

美咲が教室から飛び出してきて、肩がぶつかつた。痛いけど、美咲に悪気はないんだから、笑顔で美咲に話しかける。

「そういえばねえ、大西がおかしいんだよ。怒つてるつていうか、考えてるつていうか~」

まだ、機嫌が悪いんだ。顔を合わせても睨まれそうな気がする……

…。隼人とは少し仲が悪くなつてたし。

しばらくは、棗と隼人は会わない方がいいんじゃ……。でも、どうすればいいの？ 私から隼人に話しかけるにしても、女の子の目が気になる。彼女、なんて誤解されたら大変！

「ああ。ごめんね星野さん。話が長くなつて。また話しに行くよ」

「ま、待つて！ 話しに来たらいろいろ大変だから！ 来なくとも大丈夫だよ」

あれ？ 私、今なんて……？ 言葉の意味は、来ないでと言つてるようなもので……。

隼人の様子を伺つてみると、見たことがない悲しい笑顔。

「そつか。ごめんね。周りに誤解されて迷惑だよね。分かつたよ。もう、行かないよ」

私はなにをしてるの……。隼人を突き放すなんて、出来ないくせに。好きな人は棗でも、隼人にもドキドキしてる私がいるから。

「わ、私が隼人に会いに行く。朝しか……会いに行けないかもだけど」

隼人はみるみる明るい表情になつて、頭に手をのせて撫でてくれる。優しくて、この人に思われる人はどれだけ幸せなんだろう…。隼人の彼女になれたら、毎日が幸せで楽しくて。羨ましいなつて少し思つた。

「嬉しいよ。星野さんから会いに来るなんて。待つてるからね。

……あ、もしかして棗とのこと気にしてる？ 部活でも会つから
そんなに気にしないでね」

あ……。部活でも会つんだった。それならなんにも変わらないかも……。

でも、一人はライバルだしすぐに仲なんて戻るよね。さつきの棗は嫌なことが会つただけなんだし。

「気をつかわせてごめんね。僕がなんとかしてみせるよ。あんな空氣、苦手だし」

「私にも手伝えることがあつたら言つてね。喧嘩とか……しないでね？」

手を振つて隼人がいなくなるまで見送る。一部始終を見ていた美咲は口を大きく開けて固まつていると、目を細めてニヤリと笑つた。

「あの槙野と恋仲なのかなあ～。女子を敵にまわすんだね～。
私は興味ないけどね～」

「へ、変なこと言わない！ 恋仲じゃなくて、友達だからね
！」

美咲を軽く叩いて教室に戻る。棗を盗み見ると、静かに本を読んでいる。

棗から怒りオーラが見えるのは……私の目がおかしいのかな？

「おい。星野。話がある」

棗と目が合つたついに呼ばれ、肩を震わせながら棗に近付く。

黙つたまま廊下に出て棗の田が私を映す。君が怒つてるのは……
私が原因？ 失礼なことでもしちゃつた？

「星野！ お前は簡単に触り過ぎなんだよ！ 男に気安く
触れたらダメだ！ 隼人にも！」

「はあ？」

何を言つのかと思つたら、手を握つていたこと？ 男に気安く
触れるなつてどういうこと？ 女の子に気安く触れたらダメなの
は教えられたけどねえ……。

「どうしてダメなの？ 棗にも、触れているのに」

棗の手を静かに触つた。温かくて、私と変わらないくらいに小さ
な手は、隼人とは反対で。

触られていたことに気付いた棗は、顔を俯けて手を離そうとした
い。私の心臓の激しい鼓動が、棗にも聞こえるんじゃないかつて思
つた。手に触れているだけで……私が熱をもつことをしらない君。
君に、私の想いは伝わつていますか……？

「温かいな。星野の手は。……他の奴には触られたくないって
思つただけだ。隼人と手を握つてたのも、イライラしたっていうか
……」

「な、つめ？ どうしたの？ そんなこと言つて……。じ
よ、『冗談はやめてよね！』

手を離して肩を思い切り叩いて、早足に教室に戻つた。

棗の言葉……棗は分からぬかもしれないけど、あれは私にとつ

て最高に嬉しい言葉です。嫉妬じやないはずだけど……嫉妬に聞こえるんだよ？

「手、熱い……」

棗と繋いだ手が熱い。汗もかいていて、微かに震えている。

棗は私と手を繋いでも、平気なのかな……。私だけこんなに緊張して、身体が熱くて……。

でも、これから隼人に触れない方がいいのかな？　他の男の子にも？　それは難しいな……。

プリントを配る時とかに手がたまに触れることがあるもん。

「棗はばかだけど……私はもっとばかだなあ」

だつて、あんなにドキドキさせられる人に恋をしたんだから。例え、君が違う人を選んだとしても……私は、君に何かしてあげられるように、頑張るからーー。

隼人がメインのような今回でした！ 次回は棗と隼人がどうなつたのか、隼人に会いに行くココロを見てどう思うのか、を予定しています。

今回も隼人メインです。一人しか出でいませんが、恋愛らしく甘くなつた話ではないかと思います。

私にしたらこれで甘過ぎたと思うほどですが、他の方の小説を見ているとこれで甘過ぎとこりわけではありませんね。調整が難しい恋愛小説です……。

棗が嫉妬に似た感情を私に見せてから、数日経つた。相変わらず隼人とは仲が良くないみたいで、みんながいない時間……つまり朝に隼人に会いに行っている。隼人には触れてないけれど、時々触れそうになる。その度に棗を思い出して慌てて引っ込めるんだけど……。

「どうかしたの？　考え方でもしてた？」

隼人が私の顔を覗き込んで、肩をビクリとさせながら後ろに下がる。

隼人はクスクス笑いながら宿題をしている。もう一、本当に心臓に悪いんだから！

「あまりにも静かだからさ。いつもなうよく話すのになあ、って思つただけだよ」

「棗とはどうなったのかなって。仲直りしないの？」

指をいじりながら顔を下に向いて聞いた。隼人のことだから怒らないとは思うけど、念の為に。棗に聞いても無視されるし、機嫌が悪くなる。だから隼人に聞いた方がいいし、どちらが謝った方がいいんじゃないかな。棗は、絶対に謝らないと思つけどね。

「特に変わりはないな。見たら分かると思うけど、どうなつたもこうなつたもないよ。仲直りつていうか、棗には棗で時間が必要だと思うから。頭を冷やしてもらえるまで待つよ」

すごい……。気の長い人ってこんな人のことを言うのかな？相手のことを考えて待つ人、かあ……。隼人はやっぱり優しい人だなあ。

「それとも、棗が気になる？　いつもの棗に戻ってほしい？」

「え！？　そんなことは……」

棗が気になつていてるんじゃなくて、ただこのまま気まずい空気が流れるのかと思うと……神経がもつのかなあって……。はやく仲直りして、前見た走り対決とかしてほしい。ライバルなら、いつも対決してるんだよね？　一人は……今もライバルなんだよね？

「ねえ隼人。二人は今もライバルだよね？」

隼人は「うーん」とあぐびをしながら伸びをすると、顎に手をついて黙つた。考へているんだろうけど、この緊張した空氣……気まずい。

「そうだなあ。ライバルかもね。意味は星野さんとは違うかも

「え？　一緒にじゃないの？　私が考へているのは宿敵の意味のライバルだよ」

なにが違うんだろう？　ライバルって他にどんな意味があつた？　友情とは違う意味のライバルなのかな？

答えに困つている私に隼人が笑うと、「やっぱりね」と言つ。

「とりあえず恋敵は恋敵つてことだよ」
　　ライバル

「ええ？ 教えてよ！」

抱き付く勢いで隼人に近寄ると隼人は爽やか笑顔で頭を撫でてくれた。それで自分がなにをしようとしたのか分かつて、隼人と一分距離をおく。そうでもしないと、抱きつくかもしれないし。それにまた隼人に触れてしまうかもしない。

隼人に触ったことなんか女の子ファンに知られたら私、どうなるのかな……。ましてや、見られたら大変……。

隼人と話せるだけで羨ましがられるのに、隼人は自分の魅力に気付いてない。かつこよくて、優しくて紳士で。彼氏にしたら自慢はできるし友達と取り合いになるかも。私には有利得ない話。

「教えてほしいんじゃないの？ そんなに離れようとしないで、もつと近寄ってほしいな」

動けない。隼人に近寄ったら、棗をまた怒らせる気がして……。

第一、隼人に触れそだから距離をおいてるのに、本人は全く気付かないんだもん。これじゃあ、私だけばかだよ。隼人はきっと私の女子として見てないんだ。だから簡単に近付けるんだ。妹的存在なの、私って？

「これ以上近付くのは無理だよ！ 教えてほしいけどこれ以上近付いたら……」

隼人に触つてしまします。

なんて言えるわけがないので、最後の部分だけ濁す。触る触らないを気にしないと思うけど、軽く触れちゃダメなんだって棗に言われたから。

だから触つてしまふ前に引いているのに、隼人から近寄ってきたら……何の意味もないじゃんか！

「なんて？　これ以上近付けないって？　なら僕から寄ればいいんだね」

「そ、そうじゃなくって！　隼人に触つてしまふかも知れないから距離が必要なの！」

ああ……言つちゃつた。勢いに任せ過ぎだよね私。
隼人はどう思つたのだろう？　「星野さんから触つてきたのに？」と思う？

顔を上げると、目の前に隼人が微笑しながら立つてゐる。こんなに近くに来たら……きっと隼人に無意識に触つてしまふかも……。足を後ろにして、また一步下がるうとしたら、私の腕を隼人が握つた。

「へえ。僕に触るかもしれないんだ。僕にしたらそれは嬉しいことだけど、どうして拒むの？」

「……男の子に簡単に触れたらいけないって。隼人にも触るなつて言われて……」

触りたくないって言つたら嘘になる。手だつて繋ぎたいし、スキンシップだと思ってやつてること。

棗にはそうは見えなくて、不快感を与えてしまふなら……棗以外の人には触れないように我慢するから。

隼人は目を大きく見開いたけど、すぐに細めて「ふーん」とか「なるほどねえ」と呟いている。

「あいつも中々だよね。ねえ、星野さんから触つたらダメなんだよね。なら、僕から触つたらいいの？」

「よく分からない……。私からは触れたらダメとは言われたけど、異性からとは聞いてないかも」

男の子には触れるなって。よくよく考えると、異性から触られそうになつた時とか聞いてないよ。こんな時、なんて言えばいい？ どんな反応をすればいいの？

「なら良いよね。僕、結構我慢してた方だから思い切りするか

「う

「隼人……？ 我慢つてどうしたの？」

手を伸ばして、隼人の頬に髪に触れようとして、また引っ込める……のに、引っ込めようとした時に柔らかい頬に手が触れた。

男の子にしては白い肌に赤みのある頬。二重の大きい目に細い身体。運動してるからだろう、足にちょうどいい筋肉がついて綺麗な足でシユツと細い。だからあんなにも、女の子が隼人に惚れたり憧れたり、ファンクラブをつくってしまうほど、人気があるんだ。私は贅沢なのかも。隼人に触れてはダメだと思っていても、心が頭よりも早く反射的に隼人に触ろうと手を伸ばしている。

指は熱をもつて、心臓が忙しくて激しい音を奏てる。鼓動の音が聞こえるんじやないかって不安になつて、胸をおさえて隼人を見ずに俯けた。

「意地悪し過ぎちゃった。星野さんは僕に触らなくていいよ。

その代わり、僕が星野さんに触れるから」

驚いて顔を上げた。身を固まらせて自分の身を守れと、簡単に触らせると頭が働く。でも、私は隼人に触れてほしいと思っている

し、棗にも同じ思いを抱いている。隼人は好きじゃないよ。ただ…
スキンシップだから。

棗、「ごめんね……。少しだけでいいから、私のわがままも聞いて下さい。

「隼人がそれでいいなら……。隼人の思つように行動してほしい」

手招きをされて拒むはずもなく距離を縮める。近寄つてぶつかりそうになりながら目の前で立ち止まる、隼人の細い指が私の髪に絡まる。何度も何度も髪を絡めては撫でられる。

「大丈夫。棗とは少し喧嘩してるけど、星野さんが心配するほど深いことじやないよ。仲直りは難しいかもしれないけどね」

髪を撫でてくれた指がとまつて目を合わせた。

隼人は、私が近寄つてきたのは棗のことが知りたいからと思つているの？ 棗のことでこんなに私が触られても、つて？ 私は棗と隼人がどうなつたのか気になつて話題にしたけど、嫌がつてゐわけじやないよ。むしろ隼人に触れられて嬉しいよ。隼人に触れたいと思つてゐるのに。

背を向けて立つ隼人が離れていく気がして、気がついたら隼人の背中に頬を寄せて手を隼人の身体に縛つていた。

抱きつかれるなんて思つていなかつたらしく、隼人の身体は大きく跳ねて固まつたまま。私がどう思つてゐるのか知つてほしくてしたわけだけど……恥ずかしい！ でもここまで積極的になれたんだから、度胸だよ度胸！

手に力を込めて、今だけは離れないという意思表示。

「私、隼人に触れられて嬉しい。自分の意思で決めたから、嫌

がつてないんだよ？」

隼人がこっちを向いて俯いた。だから嘘だと思われないように、ずっと力を込めて抱きついていた。

すると背中に手がまわってきて、隼人の顔が私の頭のすぐそこにあつた。いわば、抱き合っているんだ私たち。冷静になつて離れようとしたけど、隼人の力に勝てるはずもなく、すっぽり腕の中。

「ありがとう。こんなふうに抱きしめられるなんて思えなかつた。幸せ者だね。僕は」

隼人は爽やか笑顔を浮かべると腕を緩めて少し距離が出来る。寂しいと思いながら、自分がなんであんな行動に出たのか分からぬ。隼人が離れていく気がしたら、ほっとけなかつた。

大胆すぎる……。私は一体なんてことを……。隼人ファンの全ての女の子を敵にまわしたようなもの。見られてないから、大丈夫だよね？　うんうん。

「嬉しいなあ。星野さんから抱きついてくるなんて。これじゃあ我慢出来そうにないかも」

幸せそうに微笑んでいる隼人になにも言えず、ただ俯いていると隼人は私の頭を撫でて安心を与えてくれた。

もう時間だから教室に戻つた方がいいと、そういう意味の声にも言葉にもあらわしていない仕草の優しさ。

「じゃあ……戻るね」

夏は爽やかな恋の季節。爽やかで冷ややかな風を受け止めながら、惑わされる。

夏で気温が上がるのと同時に、身体もあの人を考えて熱をもつ。太陽の暑さと共に熱く、爽やかな恋の訪れ。だから惑わされてるだけーー。

「星野さん。僕は待っているからね。例え、都合のいい男でもいいから、傍にいたいと思う」

待つのは……なにを？　誰を？　彼女を？　……好きな人を？

どうしてそんなに優しい言葉を私に言うの。私じゃなくて、本当に伝えなければならない人がいるでしょう。でも、隼人に言うことが出来なくてそのまま教室に戻った。

「気付かない……つもりなのかな」

私って本当にばか。好きな人は棗だけだと思っているのに、隼人にも揺れている。隼人への思いは恋というには幼過ぎる。ただ、甘えられる場所。都合のいいところ。隼人を好きになってしまいそうで、少しこわい。

「大丈夫……。私にはあの人しかいないから。隼人は友達だから

この時は、ずっとこの穏やかな関係でいられると思っていたんだ。

次回は秋です。秋になつたら、書きたいと思っていた話があるの
で、それを書けるのが楽しみです

秋から冬にかけては甘酸っぱい、淡い恋愛になるかと思います。
今回のような甘い話は少なくなります。

でも、どこからが甘くてどこからが淡いのか分かりません……。
例えると「君と繋がる」や「あなただけに」みたいな感じにしたい
んですが、上手くいかない……とりあえず短編が書きたいのかもし
れません。

o n e s i s d e d l o v e - 1 9

不器用な優しさ（前書き）

「口と筆です。書きたいなあ、と思つていたお話なんですが、なんだか中途半端なできになつています。

秋は戸惑つ季節。熱い想いをしたのなら、今度は心を揺さぶられて。優しい君と元気な君に戸惑つて、心が揺れて——……。

秋は体育祭シーズン。去年は散々だったけど、六組が一位になつて……記念写真を撮つた。今年はどうなるんだ？……。

「はい！ それでは各種目に出来る人を決めていきます。全員出でくださいね」

種目は何種類があるけど、一年は全部出ないといけない。例えば、障害物リレーでネット潜りをやる人と三輪車に乗る人……必ず全員が出ることになっている。去年なら、自分が出る種目の時とかに、出ない人がクラス席に座つて応援とかしてたのに。全員が出るから、応援はないかもなあ。

「なに出ようかな……」

種目は、障害物リレーに全員リレー、百メートルや八百メートルなどの変形するリレーに百足リレー、玉転がし。まあ……出るのは強制だけど、障害物リレーの何の障害物をクリアするのかは自由に決められる。誰かとかぶつたらジャンケンか譲るかどっちかだ。

「星野さんは何やる？ 私、玉転がしがいいな」

「んー。何しようかな。体力ないから負担の少ないものかな」

私は運動が得意じゃないので、出来ればこいついうものは運動部の人任せたい。実際に、運動が好きな人にとつたら体育祭なんて気合い入りまくりだろうし。

「そうかあ。じゃあ百メートルか二百メートルだね」

変形リレーのことか。二百メートルはグラウンド一周で百メートルは半周なんだよね。楽にしたいなら百メートルだろう。でも、百メートルは喘息の人や本当に走るのが苦手な人とした方がいいだろうから。

周りを見たら、みんな話し合っている。リレーが多いから八百メートルは運動部しかないよな……そんなことさえ思ってきた。運動部が多いこのクラスでも、八百メートルは嫌らしく、運動部なのに「俺は二百メートルにしどく」なんて声も。

「やだ！　運動部が八百メートルやらなくてどうするんだろう。誰か推薦しないと……」

清楚な女の子が困ったのか、オロオロと周囲を見渡して、ギャルの女の子となにやら目で会話している。ちよっぴり手話を交えていたけど、ギャルの女の子がグーサインを清楚な女の子に向けて、清楚な女の子は安心したのか息を軽く吐いた。

「はいはーい！　意見があるんですけどー」

ギャルの女の子が手を上げて、声を体育委員に聞こえるように大きく発した。体育委員の子はギャルの女の子に目線を移す。ギャル

の女の子はチラッと清楚な女の子を見てから高い声で言った。

「八百メートルとかは運動部がやるべきだと思うんですよねえ
ー！　普段走ってるわけだしー。そこで、大西くんを推薦します
ー！」

「はあーー？」

ギャルの女の子の発言でみんなの目は棗に向かられる。当の棗は不満な表情を隠さず「はあ？」ともう一回言った。

いきなりのことなので言つた本人のギャルの女の子と清楚な女子以外のみんなは頭の中に疑問マークを浮かべていると思つ。私だけ、どうして棗が選ばれたのか分からぬ。

「なんで俺なんだよ？　運動部の奴なんてたくさんいるだろ」

「噂に聞いてるからかなあー！　槇野　隼人のライバルで、しかも男バスの次期エースなんぢやないかってえー。槇野　隼人とエースの座を取り合つているんでしょー？　なら大西くんかなあつてえー！」

ギャルの女の子が髪の毛をいじりながら言つ。毛先を指に絡めてほどく。そんなことを繰り返してから、教室を見ていき運動部の人を見つけては「あんたもね！」なんて言つてる。

「運動部の人なら体力があるから大丈夫ですよね？　文化系クラブや帰宅部の人には百メートルや二百メートルを譲つてくれませんか？」

黙っていた清楚な女の子が静かに言つた。運動部も最初は明らか

に嫌な表情をしてたけど、諦めて八百メートルを走ることになった。

ちなみに私は百メートルになった。二百メートルに入るよう、言

われたのだけど他の子が入ったので百メートルになった。

そのあとも一人が仕切って、あつという間に終わつた。暇だから前

の席の子と喋つたりして。

「ねえ。そういうえば、星野さんって彼氏とかいるの？」

キラキラ輝く目で見られる。彼氏？　いるわけないよー。中学に入った途端に付き合つ人とか増えたけど、私には縁がない話にな。

「いないよ。彼氏なんて出来ないよー」

「え！？　嘘だあ！　星野さんは槇野くんと付き合つてるんじゃないの！？」

「どこからそんな噂が……。大体、どうして隼人なんだろう？　話すこともあるし、会うこともあるけど……それなら他の女の子にもしてるはず。私より可愛い女の子との噂の方が全然いいよね。否定しそう、この噂。

「違うよ。隼人は友達で、付き合つてるとかないよ。……でも、どうして隼人？」

「そりなんだ。んんーとね、槇野くんが女の子に話しかけることなんて滅多にないんだよ。まして、会いにきてくれるなんて……！」

羨まし過ぎだよー！」

「そりだつたんだ？　隼人が話しかけることがない……それつて

苦手つてこと? でも、私とは話してくれてるし。理由は分から
ないけど、隼人は隼人でなにかあるんだわ。

「私が隼人と釣り合つはずないし。好きになつてくれることす
らないよ」

「冗談はだめだよ! 星野さんは可愛いから、すぐに彼氏な
んて出来ちゃうよ」

お世辞だあ……。私は全く可愛くないもん。美咲の方が可愛いし、
性格だつてのんびりしていて天然で守りたいって感じがするし。
私は苦笑しながら美咲を見た。変わりもなくボーッとしている。
なにしてるのかな? 考え事でもしてるのかな? 悩みなんて
なさそうなのに。

「では」の時間は終了とする。体育委員はのこれよ。打ち合わ
せがあるからな

「はい。一ヶ月もないですからね。体育祭まで。忙しくなるの
も仕方ないです」

先生と体育委員が話し合つてているのを横目で見ながら、みんなと
同じように帰る用意をする。今日は部活もないのに、割と早く帰れ
るな……。

チャイムが鳴つて、同時に教室を出て行くみんな。教室にいるの
は、先生と私と棗……。あれ? 美咲は!?

「……一人とも、暇か?」

先生がそんなことを言つのはなにかさせる時。雑用係の時だ……。

いや、帰ったあとは暇だから今も暇だけ。美咲め……鞄だけ置いてどこに行つた！？

「まあ。今から部活ですから暇……ではないですね」

「それならなおさらだ。部活に行くついでにこれを運んどいてくれないか」

棚から小さい箱と大きな箱を引っ張り出す。小さい箱は軽そうだけど、大きい箱は結構重そう。

先生は「頼んだぞ」と言つて、早足で教室を出て行つた。教室が重い空気を漂わせる。とりあえずこれを運ばないといけないのに。

「なあ。これってどうに運べばいいんだ？」

「あー……聞きたかった……。なに入つてるの？」

「この箱」

小さい箱を開けてみると、中に入つていたのはなにやらカラフルなペン。その他にも大きく白い、丸まつた紙。一体なにに使うと言うのだろう。

大きな箱も開けてみると、釘やら木材やら……重いものばかり。

「体育祭の飾りかなんかか？　なら文化委員に届ければいいんじやねえの？」

「でも箱に書いてあるよ。グラウンド……に持つていけって

先生、最初からこき使わせる気満々でしたね。

大西は早速箱を持つと早々に歩く。私もあとを追いかけようとして箱を持ち上げて……気付く。私が持っているのは重い箱。つまり

は大きい箱を持っている。たいして棗は軽い方の箱を持っているのだと。普通、男の子が重い方を持つんじゃないの！？

重いし、箱が大きいから前が見えなくて進めないし……階段とかどうやって進めと？

「重い……。棗はもうグラウンドに運んだのかな……」

重いから、時々おろしてため息をつきながら休憩を挟む。時々ジロジロ見られているのは気のせいじゃない。早く運んで帰ろう。美咲を見つけ出して！

「う、わ……ー？」

階段で段を外し、落ちる……！　はずだつたけど、腕を掴まれてなんとか助かつたみたい……。

私は助けてくれた人の方を向いて、頭を下げた。

「遅いんだよ！　俺が重い方運ぶから、お前は軽い方を運べ」

前を隠していた箱が助けてくれた人の手に軽々とおさまり、代わりに私の手には棗が持つて行つたはずの、小さな箱が……。

前を見ると助けてくれた人であろう棗が背中を向けて階段を下りていた。重いのに、その重さを感じさせない足取り。やはり男の子だし、部活もやっているから力がつくのだろうか？

「待つてくれたの……？」

こんなに軽い箱なら、すぐにグラウンドに行けただろう。なのに私と同じ場所にいたのは……心配してくれたとか、待つてくれたとか私なりの分解をしてもいいのかな？

「本当に私はばかだ……」

不器用ながらの棗の優しさは私にとってはなによりの薬で、あんなに隼人のことも考えていたのに、すぐに頭の中は棗の色に変わる。隼人のことはやっぱり、友達として好きなんだ。隼人の優しさに甘えていただけだよ……私は。

田頭が熱くなるのを感じながら、グラウンドへ走り出した。棗に「ありがとう」と伝えたい。また顔を見たい。もう、重症なほどに棗が好きで。引き返せないくらい、棗に溺れている私。

「先生！ 運んできました」

グラウンドに着いて箱をおろす。棗はいない。部活に行つたのかな。今すぐ会いたいのに。

先生が箱をチェックしてから教室に戻つた。鞄を教室に置いていたし、美咲がいるかもしれないと思って。

「ココロ～！ 遅かつたねえ～！ どうしたのかずっと気になつっていたんだから～」

美咲はニヤニヤしながら言つ。なにしてたか知つてゐるような言い方をするから……棗のことをついつい話した。美咲は曖昧に相槌を打つと、目をキラキラと輝かせた。

「棗はさつきどこかに行つたよ～！ 多分上の階に行つてると思つけど～」

上？ 隼人になにかあつたのかな？ でも一人は喧嘩しているから……会いにいくのは確率低い。まさかとは思つけど、柴崎さん

? 女バスだからバスケとの話も出来るし、途中まで一緒に行く
ことも出来る。最近、棗が柴崎さんと一緒にいるの、増えたと思う。
……見間違いならいいんだけど。

「いこよ。やつぱり明日雪。部活の邪魔したら嫌だし」

本当は一人でいるのを見たくないだけ。だけど認めたくなくて、
自分の中にこんな感情があるなんて知りたくないて、綺麗に雪つた。
邪魔になるのは本当。でも、会いたいのに。
上の階を見たあとに、苦笑がもれたのは……『氣のせい』なのか、分
からなかつた。

不器用な人ってどんな人なんだろう？ と思いました。
恋愛に関しては不器用、というのは奥手なんだ！ なんて考え
ながら今回の話をまとめてみました。この話に登場する人って、奥
手な人が多いよなあ、といまさらながら気きました。

one sided love-20

せきやまひる（前書き）

今回、少し軽めになっています。後輩ネタが浮かんでしまって、予定より長くなりました。

恋愛ではない話かもしません。話し合いたいな、軽い話です。

体育祭が明日になつて、部活も慌ただしい。一年生でも騒いでいて部活はいつもより賑やか。

部活の中で対抗リレーというものがあつて、三年の先輩……と二年の全員が出ることになった。三年は強制でだけど、人数が少ないので一年も出て一年は出なくてもいいから、かなり嬉しいと言つていた。

「星野さんー。これあげる

部活の後輩の男の子がぞら用紙を渡してきた。最近よく、話しかけてくる男の子。

ぞら用紙を見ると、大仏の絵が描かれていた。しかも、かなり上手い。残念なのは大仏が上手いんだけど……あらゆるところに落書きがかかっているところ。

「返す！　ちやんと部活に集中しなさい！」

「嫌だー！　それ、あげるつて言つたじゃんー！」

これもいつものこと。可愛いんだけど、私のことを先輩に見えないと言つて、さん付けしている。

背が低くて華奢な男の子で、まるで弟みたいでついつい甘やかしてしまつ。

「やつこえば、星野さんは知つてる？　あいつの好きな人

後輩がいきなり後ろを振り返つて、ぶつかりそうになる。この子

は背が低いから、ぶつかるとしても私のお腹くらいなんだけれど。

それより、あいつの好きな人って？　あいつって誰？

「ほらー　いつも星野さんにちょっかいかけてる、山田だよ！」

山田くん……。部活の後輩。よく話しかけてくれるから、私からも話しかけたりして。田が合つと、笑かしてくれたり。なんで山田くん？　今、座つて友達と話しているけど。

「山田くんの好きな人なんて知ってるわけないじゃん。もしかしてこの部活の中にいるとか？」

「当たり！　山田はな、好きな人がこの部活内にいんの！　誰だと思う？」

んー……。山田くんの好み、分からないしな。山田くんからそんな話、聞いたことなかつたし。

美咲とか有利得そうだよね。可愛いし、よく話してるみたいだし。

「美咲でしょ。山田くんって美咲が好きだつたんだ」

「いや違うしー　山田は星野さんが好きらしいからー。」

……は？　今なんて？　いや。聞こえてはいたけどもしかしたら私の聞き間違いかもしれない。

山田くんは、星の原が好きなんだ！　そんなとこ知らないけど、公園とかありそудだし。

「なあ！　山田は星野さんが好きなんだよなー！」

「はあー？ ち、違うしー。 星とかは好きだけどー。」

山田くんがいつの間にかやってきていて、必死に否定。当たり前だよ。私のことが好きな人なんて聞いたことないし。一年になつてから。私のことを好きになつてくれたら、まず「旦大丈夫？」とか聞いちやうしね……。

「気にしないで下さい！ 星野先輩もこいつを叱つて下さいよー。」

「なんでだよー。 本当のことを言つただけだろー。 照れてんのかよ、山田くん？」

ああ言えぱ」ソレ言ひ……永遠に喧嘩が続くだけじゃん。
私は一人をほつといて、グラウンドを見た。バスケしてる、棗を見るのは久しぶりだ。運動部は秋だよなあ、やっぱり。

「先輩、本当に気にしないで下さいー。 お、おれは好きな人とかいないんでー。」

「本気にしてないよー。あの子にも困つたものだよね。あとでちやんと言つておくから」

山田くんもいい迷惑だな。

ずっとグラウンドを見ていたからか、山田くんはそれ以上なにも言わずに去つていつた。その行動には感謝。棗のことが好きとか知られたくない。そのことを知つたら、棗はどんな表情をするのだろう……。どんな反応をしてどんな言葉を言つのだろー。
今さら、なんて思うだろうか。

「星野さん！　これ、教えてほしいんですけど」

「あ、うん。これはね……」んな感じで描いたらいいから

後輩に絵の見本を見せた。それを見た後輩は「ああ、なるほど」と納得したようで、スケッチブックを抱えたまま、本をひたすらに見ていた。

さすがにいつまでもグラウンドを見るわけにはいかないので、私も鉛筆を握り直して人物デッサンを描いた。

「……俺や、この前聞いたんだけど。あいつって付き合ってるらしいぜ」

「それ本当かよ？　釣り合わねえって」

一年で付き合う人とかいたんだ。早いよなあ、付き合うとか。釣り合つのは、周りから見た目。付き合つている本人たちは気にしてないのかな？　本当に好きなら、周りなど見えない。周りなんて関係ない。

「お前は好きな子のタイプってなに？」

「えー？　そりゃあ可愛くて、自慢できる彼女だろ」

可愛い子が好きとかいうのはみんな同じなんだな……。可愛いから付き合う、そんな人を見たことがある。

好きじゃないけど、顔が好みだから付き合つてているんだ、そう言ってた。好きでもないのに付き合えるのかな、普通。

「はあ？ 僕は好きな子がタイプだし！ まあ美人とかいたら付き合つてもいいかもな」

美人だから付き合つ？ 人それぞれだよな……。

棗は美人が好みじゃないって言つてたから、可愛らしい感じの子？ ほんわかしてる、優しげに微笑む子。

私は後輩が盛り上がっているのに悪いと思いながら、美味に話しかけた。

「そういえば、付き合つとかあるけど……どこからが付き合つてるの？」

発言したら、すぐにその場が静まり返る。なにか変なこと言つてはないと……思う。付き合つてるとかの話だから。

後輩たちはびっくり顔で「知らないの！？」と言つ田を向ける。

「そりゃあ、告白とかしていい返事をもらつたら付き合つだろ。まあ……両思いなら付き合つてるんじゃない？」

「じゃあ、例えばだけ……。付き合つてないのに、一緒に帰つたり会つに行つたりしたら、どう隠つ？」

後輩が考え込んでから、おちゃらけた笑いで「付き合つのも時間の問題じゃない？」と言つた。

そうかもしれない……でも、少しでも可能性があるのなら……棗に告白してみようかな。柴崎さんが告白するのかは予想が全くつかない。

付き合つのも、時間の問題か……。

「なんでそんなこと聞くの？ あ、星野さんつて付き合つて

「ば、ばか！　付き合つてゐるわけない！」

なんで付き合つてるとか思つのー？　私、付き合ふるわけないし！　そもそもそんな相手いなーしー

「星野さん可愛このーー！　俺と付き合つてみる？」

「ばかだ。でも、付き合わなーの？　同級生とかと？」

部活の後輩たち、みんな誰も付き合つてないじへへへへ「彼女ほしーなー」なんて言つてこる。

なら、付き合えばいいのに。ノリで付き合つたりすることもあるだろうし。全く告白されないわけでもないと思う。明るい性格だし、よく暴れ回つてこむから、少しほとびたれるだらう。

「誰でもいいってわけじゃなこなどなー。好きな子じゃないと、本気で付き合えないからさ」

「そつか。告白とかされたり、したりするやしょ？」

後輩くんはケラケラ笑うと、隣にいる三田くんを見た。三田くんは気まずそうに目を逸す。

後輩は笑い終えるとお腹が痛いとつてているのか、お腹を抱えてい。

「告白なんでしたことないしー。されたのは小学五年か、小学四年の時

「つい最近だねー。どんな告白された？　呼び出しがされた？」

するとまた、後輩はケラケラ笑う。面白くて仕方ないみたい。山田くんも知っているのか、少し口元を手で隠して、密かに笑っていた。

「あ、あれはつけた！　机に手紙が入つて……友達に聞いたらラブレター、とか！」

「そこならまだいいけどなあ！　差出人があいつだからな、面白かった！」

山田くんも声が震えているから、笑いをこらえていんんだろうな。ラブレターをもらつたという、後輩も大笑いしてるし。どんだけ笑つてんの。

差出人の女の子だつて、こんなに面白がられたら嫌なんじゃないの？　勇気を出して机の中に入れたのに。私がその女の子だつたら、きっと傷付く。告白したのに、笑われるなんて。

「そんなに笑つたら失礼だよ！　女の子だつて、恥ずかしく思いながら書いたかもしれないのに！」

後輩と山田くんを叱ると、固まつていたけどすぐにはまた笑い出した。怒りそうになるのをおさえ、出来るだけ笑顔を作りながら問い合わせた。

「なんでそんなに笑うの？　なにがそんなに面白いの？」

聞いても、ずっと笑つたまま。なんで笑えるのか、不思議。必死

で、自分に想いを伝えてくれたのに。自分を好きになつてくれた人なのに。感謝とか、しないのかな。

「この様子だと、間違なく、女の子を振ったと思う。たとえ振られたとしても、泣きたいくらい辛くとも、好きな人に「ありがとう」と言われたら、この人を好きになつて良かつたと思うんじゃないかな。本当に、大好きだと……思えるんじゃないかな、勝手にそう思える。

「俺に告つたのは、あいつだよ！」

後輩が指をさした。え……部活内にいたの！？　で、でも……そんな素振りなかつたはずだけど！？

指の方向には、一年の女の子。長い艶のある髪に、きつちりと着た制服。まいにちスカートに、いつも笑顔を浮かべている顔。確かに、障害があるって聞いてる。ノートに好きなアニメの絵をずっと描いてる、女の子。可愛いのかは……微妙です。

「あいつに告られたから、すぐに振つたし！　顔からしてアウトだから！」

顔が好みじゃないから？　確かにあの子は、可愛いとはいえないけど、この後輩が好きなのは薄々気付いてた。いつも傍に行こうと近寄つて、この後輩が来ない時は「あいつ、来ないのか？」なんて呟いている。後輩はその気持ちすら、否定してる。ただ、好きで、その想いを必死に伝えようとしてるだけなのに。「私は今も、好きなんだ」、そう伝えたいだけなのに。

「いいじゃん、付き合えば。似合つてるよ

「悪い冗談やめてくれよ！　絶対嫌だから！　それに、俺は星野さんがいいかなー。ね、本気で俺と付き合わない？」

「からかうのはやめてね！　それと先輩だから。さん付けやめてよー」

なんで私に付き合ひとか言えるのだろう。やっぱり誰でもいいんだなあ、きっと。

後輩はニンマリと笑うと、低い声で、私の名を呼んだ。

「口口口先輩。これから先輩って言つたら、付き合ひてくれますか？」

「は、あ？　なに言つてるか分かんない！　からかう暇があるなら、絵も描いたら！」

いきなり、名前を呼ぶから。不意にも、少し恥ずかしくなった。後輩であろうと、男の子。男の子に名前を呼ばれるなんて、久しうりだから……。

でも、彼はチャラチャラした人だから。こんなふうに女の子を口説くんだろう。好きな人には、特に。

「星野さん！　じゃあ、どんな人が好み？」

「えつとね、かつこよくて優しくて背が高くて頭良くて運動出来る人！」

はい？　今、誰が言ったの？

後ろを振り返ると、同級生の子が一口一口しながらうつとつと語る。

後輩は突っ込んでいるから、その隙に離れた。そのまま、からかわれていたら、なんて言つたらやめてくれるか分からないから。同

級生には、感謝です。

「お疲れ様～！　後輩くんも頑張るよねえ～」

「なにが？」

美咲の元に戻ると、満面の笑みで言われた。美咲は「あらあら～と大袈裟に驚いてみせると、こつそり耳打ちしてくれた。

「後輩くんね、口口口が元気ないから元気づけようとしてたんだよ～！　だから、からかっただように言つてたけど、あれが後輩くんなりの優しさだからね～」

元気が、なかつた？　そんなこと、ないはず。いつも通りに笑つて、いつも以上に楽しんでる姿を見せていた、のに。柴崎さんのことを考えて、表情に出ていたのかな……。

心配してくれる、そんな人がいる……。またあとで、お礼を言おう。今は、このままでいたいから――。

one sided love-20 付き合ひ方（後書き）

次回は体育祭の様子を書けたらなあ、と思います。体育祭といつたら団結力！ クラスが熱くなる話を書きたいですが、鉢巻きもいいなあー、色どうしようかな、なんて関係ないところで悩んでます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1162s/>

蜜柑色の君

2011年12月25日15時52分発行